
Angel Beats! ～君と～

幻影

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Angel Beats！ ～君と～

【Nコード】

N4729T

【作者名】

幻影

【あらすじ】

死んだ世界戦線、Girls Dead Monster、生徒会長、
彼らは死後の世界から卒業した。

記憶と記憶が交錯する時、物語が始まる。

ユニークアクセス6000突破です。
読んで下さって、有り難うございます。

序章

「――、――！」

「――」

「――、――！」

「――」

「――！」

「――っ!？」

頬に涙がつたっていた。

「俺、何で、涙なんか………?」

「お兄ちゃん、どうしたの?」

そこに真っ白な布団をかけている少女が不思議な目でこちらをみていた。

「いや、何でも無いんだ」

「そう？なんかすごい量だけど」

「そんな事ないよ。心配なくて大丈夫」

「学校でいじめられてない？」

「ああ、大丈夫だ」

そう言う少年は顔を腕で拭いた。

「なあ、それよりさ体調どうだ？」

「うん、手術したら大分良くなったよ」

「そっか、良かったなドナーが見つかった」

「臓器を提供した人に感謝しなきゃね！」

「そっだな、初音^{はつね}。お前、小さい時から病弱だったからな」

ガラリ、という音がすると白い衣装に身を包んだ医者が入ってきた。

「どうだい、身体の調子は」

「はい、先生のおかげでとても良くなりました」

初音はそう答えると笑顔をみせた。

「そっか、そっかそれは良かったね初音ちゃん」

「先生、本当にありがとうございます！」

あまりの嬉しさに声が大きく出た。

「感謝すべき相手はドナーにしておくれ。私はただ手術しただけじゃよ」

照れているせいか、先生は頭をかいた。

ここは病院。前の医者はそこそ名が知れている所だと言っていた。数多くの患者を救ってきたらしい。

「でも先生はただ手術をしてくれただけじゃなくて手術代を無料にしてくれたではありませんか」

「まあ、その事は内緒にしておくれ。そんなのはさておき拒絶反応も無いことだし、もう退院しても良からう」

「本当？いやったー！！！」

初音は嬉しさのあまりベッドを跳ねて跳ねて跳ねまくっていた。
「たうあだあしい！」

「えっ！？先生他に何か問題でもあるんですか！？」

「もう1週間だけいてもらおう！」

「え〜」と初音は空気が抜けた風船のようにしよげた。

「なんだ驚かさないで下さいよ」

「もう1週間の我慢じゃよ。それじゃあ、私はこれで。あっそれとお兄さん？」

「はい？」

「名前、聞いていなかったのう。何て言うんじゃ？」

少年は少し深呼吸をし、

結弦、音無結弦です」
ゆづる おとなし

「結弦君か、妹さん大事にしてくれよ」

「はい」

少年の物語はここから始まる。

第1話 Dream

「なあ――、一緒にこの世界に残らないか？」

――が居てくれたら寂しいくないからさ。

それに、――達みたいにな――」

「ジリリリリリ！――！」

「ハっ!？」

音に驚くと、時計のアラームを止めた。

「あの夢は一体……?」

その夢の内容はこうだった。

自分より背丈が低い女子と一緒に外へ行き、夕陽が程よく赤に染まっている中、結弦はその女子に言葉を発したそれだけだった。

（疲れたのかな。それよりも初音を迎えに行かなきゃな）

結弦は勢い良く立ち上がると昨日前もって用意した服を着た。

（ご飯は……ま、その辺のコンビニ寄って買うか）

そして、アパートのドアを回し開けた。

『結婚してやんよ！』

例え、どんなハンデを抱えていても

な！』

外は、暑くもなく、寒くもなく、そして太陽も出てとても心地良い天気だった。

「あゝいい天気だ。やっぱりコンビニ寄って正解だったな」
そう言くと緑色のベンチに腰掛をけ、コンビニで買ったおに

ぎりを口いっぱい放り込んだ。

平和な公園だと思った。子供は鬼ごっこをしたり、おじいさんはラジオ体操したり、色んな意味で平和だ。

そんな中、野球のボールを投げて何かの缶を当てようとしていた。

「あー何で当たらないんだ？もしかして缶動いてんのか？」

面白い事を言っている、としか言い様の無い一般人。

だが、結弦にはどこかで会ったような気がした。
懐かしい気がした。

結弦は『key』というコーヒーを飲み干し、どこでもある公共の場のゴミ箱におにぎりのビニールと共に捨てた。

そして、その一般人に一步、二歩、と段々近づいていった。

「ん？」と男がこつちを振り返った。

「お……音……無？」

「ひ……日向？」

会ってもいないはずなのに二人は何故か名前を言っていた。

『あ……どこかでお会いしましたか？』

二人は数分その場で固まっていた。

その頃

「遅いなーお兄ちゃん」

「へえ、結構野球上手いんだ」

「へへ、まあなつと！」

カアン！と結弦が投げたボールが見事に当たった。

コロコロと転がって行く結弦が倒した缶を日向は立て直した。

「よっこいしょ、野球やってたのか音無」

「いいや、肩には自信があるんだ」

「スゲーよ音無！野球経験が無いのにどうしてコントロールがこんなに良いんだ？」

「まあ良く分からない」

さっきの出来事が無かったみたいに二人は心を開いていた。

「日向はやっていたのか？」

「ああ。中学から」

「今は野球やっているのか？」

「いいや、今はやっていない。違う部活に入っているんだ」

「そっか。お、こんなところにバットがあるじゃん。日向のか？」

結弦は手に取ってバットを観察した。持つ所はかなり張り直しているのが分かった。

「ああ、そっだ」

「（どうだ、本気の野球やらないか？）」

突然、結弦の頭の言葉が過って行った。

「おい、音無、音無？どうした？」

「——っ！、いや何でもない——」

「大丈夫か？何回声かけても返事しないからさ」
心配そうにこちらをみていた。

「どうだ、本気の野球やらないか？」

日向にバットを渡した。急に何か言うと思ったら素っ気無い一言だ。

「本気の野球か・・・、なんかこの言葉聞いた事、あるな」
「やっぱり俺達、何処かで合わなかったか？」

「ま、気のせいだろ。そんな事よりやろうぜ、本気の野球」

「そうだな、俺が投げるから日向は打ってくれ」

「おう！やってやろうじゃん！」

二人は壁のある所に行き、数メートルはなれた。

「ルールは？」

「そうだな、よし。三球投げた内、俺が一球でも打てたら勝ちな！」

「分かった、試合開始だ！」

緊張が走っている。二人はそう感じた。

「行くぞ！」

ビュオ！という音が日向の耳に届いた。

（サイドスロー！？）

「グオッ！？」

バットを振った時には遅かった。

ダアン！と壁にヒットした。つまりストライクだ。

足下に落ちたボールを拾い上げ結弦に投げて渡した。

「お前、スゲーなサイドスローでも投げれるのか！」

「凄いだろ！次、行くぞ！」

「次こそ打ってやる！」

「お兄ちゃん、遅いな」

初音は待ち焦がれていた。

予定の時間がもう1時間過ぎたというのに結弦が来ない。

「ま、いつか。病院の中探検しようっと」

靴をはくとドアノブに手をかけ、ゆっくりと回した。

まず最初に思った事は奥に行く事だった。

（ここに来たこと無いんだよね。何かあるか楽しみ）

胸を踊らせ、足はいつの間にか歩きからスキップになっていた

た。

『
』

い・・・、そんな感じがする
（何だろうこの声？なんか、とても清んでいて、どこか悲し

初音は足を速めた。好奇心というもののなのかもしれない。

「ここかな？」

声が発生している所についた。

ガチャ とドアノブを回した。

そこには、女の子が上半身だけを起こしていて髪の毛はストリートでベッドのシーツにちょこっとだけくっついていた。

「お母さん？」

「ごごごごごご、ごめんなさい。つい、綺麗な声に連れられてここまで来てしまいました！ごめんなさい！！」

初音は深々と頭を下げた。

女の子は良いのよ、と笑顔で許してくれた。

その笑顔も綺麗だった。

「そんなに綺麗だった？私の声」

「はい！とってもいい声でした！」

「エヘヘ、そうかな？」

女の子は頬を赤らめた。

「あのー、名前は何ですか？」

「おやおや、唐突だね」

「あっ！ごめんなさい！」

「良いよ、良いよ。あたしの名前はねユイっていうんだ。お嬢ちゃんの名前は？」

「私の名前は初音っていいいます。初めての「初」に「音」といいいます」

第2話 出逢い

「初音って言うんだ。よろしくね。初音ちゃん。」

「こちらこそよろしくお願いいたします！」

初音はまた深々と頭を下げた。

「そんなにかしこまらなくて良いのよ」

「あつ、はい！」

「ふふふ」

「あの話変わっちゃうんですがいいですか？」

「何かしら？」

「さっきの歌の題名は何ですか？」

「さっきのはね、『My Soul、Your Beats

！』だよ」

「なんかカッコイイですね。題名」

「中身もカッコイイわよ。それに、私のお気に入りの歌なん

だ」

「そうなんですか。ユイさん」

「なに？」

また笑顔を見せた。その際、口の八重歯が顔を覗かせてた。

「また話変わっちゃうんですがいいですか？」

「ええ」

「どうしてこの病院に居るんですか？特に怪我や病気をし

いなそうなのに」

「それは……」

急に笑顔が消えてしまった。

「ごめんなさい。変な事聞いちゃいましたか？」

「うつん、気にしないで」

また笑顔を見せたが、何かひきつっていた。

「私ね、体、動かせないんだ」

「え？」

初音はそうは思えなかった。こんなにも笑顔がいつぱいなのに……。

「小さい頃、車にはねられて重体だったんだ。」

辛い事を話しているのに笑顔が消えていない。何故何だろう？と初音は思っていた。

「それで、何とか命をとりとめたんだけどね——、体、動かなくなっちゃったんだ」

「——！」

「ごめんなさいね。話、暗くなっちゃた。てへ」

「……いんですね、」

「？」

「強いんですね……」

いつの間にか涙が目につぱい貯まっていた。

「どうして……、そんなに……笑顔を見せられるんですか？」

「……、初音ちゃん？」

「はい？」

「『神様』信じている？」

突然に疑問を投げられた。

「私は、信じているんだ」

「どうしてですか？」

「だってあんな事故に合っても生きているんだよ？」

「でも——」

「それにね」

初音の言葉を遮り、言う事を続けた。

「それに、時々夢をみるんだ」

「夢？」

「うん。それはね、誰かが私にこう言っているんだ」

「何ですか？」

「『ある日、俺が野球やっていてお前の病院の窓を割るんだ』
って」

それで、どうなったんですか？と聞く初音。

「そこから先、分からないんだ」

「何ですか！それじゃあただのそこら辺の近所の悪ガキじゃないですか！」

「でもね、最後にこう言ってくれてるんだ」

「どう言ってたんですか？」

「『お前と結婚してやんよ！例え、どんなハンデを抱えていてもな！』て」

ユイは窓の外を見た。

「こうやって見ているとそんな気がするんだ」

「やんよって（笑）でも、良い夢ですね」

いつの間にか二人は笑い合っていた。
が、

ガシャーン！と急に窓が割れた。

「これって……、ユイさん？」

（『窓を割るんだ。それから謝りに行くんだ。』）

「ユイさん？」

「え？ああ、ごめん。野球……ボールだよね……。これって」

コロコロと転がって行くボールを二人は見つめた。

「夢、現実になっちゃた」

第3話 出逢い Part 2

「ユイさんこれってひょっとしたら」

「いやいや、現実こんなに上手くいかないものだよ」

だが、現実はそのようなものだ。

何気にくじ引きをやったら1等が出たり、じゃんけんで勝ったり、不思議な事が起こる。

そういうものだ。

「だけどこんな偶然……」

「H A H A H A、まさか」

「笑いが英語になってますよ」

ガラ

「あ、お母さん」

そこにはユイのお母さんがいた。

「その子は誰？」

「初音といます。よろしくお願いします」

「よろしくね。それで——、この窓どうしたの？割れているけど」

窓を割ったのは二人では無いことが分かった。なぜなら、女の『カン』というものだ。

「急にボールが飛んで来たんです」

「『ボール』ねえ」

確かに床にガラスが散乱してちよつと離れている所のボールがある。

「何処の子供かしらね。こんな事するのクスッ」

怒ってはいない。ただ、面白かった。

「お母さん？」

こんな姿を見るのは初めてかもしれない。

「スゲー飛んだな、日向」

（『病院の窓を割るんだ。それから謝りに行くんだ。』）

「日向？」

呆然と空を見上げた日向がそこにいた。

「日向、大丈夫か？」

「ごめん、ボーツとしてただけだ」

「一体なに考えていたんだ？」

「そんな事より、ボール捜しに行くぞ音無」

「捜しに行くってお前どれくらい飛ばしたと思ってんだ!？」

「さあね」

「さあねって」

何かとても頼り無さそうな気がしてならなかった。

「とりあえず俺の勝ちだな!」

「ああそういう事になるが、」

何故か日向は不敵な笑顔を浮かべた。

「という訳で、俺のボール捜しに手伝え!」

「どいう訳か分かんねえよ!ま仕方ないか」

「それで、俺が打った球、あっちだよな」

「まあ、そうだな。俺見てないけど」

結弦に何か心に引つ掛かっていた。
大事な何かが。

「どーだ、音無見つかったか？」

「いいや」

捜して数分が経とうとしていた。
やはり見つからない。

「とすると残るは・・・」

「何処見ているんだ日向？」

日向が見ている場所を見るとそこは、

「病院、ハッ——」

たった一人の家族が、妹が入院している所だ。

「おい、日向」

「どうした、音無」

「病院のさ一番左から5番目の窓、割れていないか？」

「!？」

それは大変な事だった。

仮にそこに人が居なかったとして窓の弁償だけで済むが、人

が居たら——

「音無、覚悟良いか」

「ああ勿論さ」

もう二人の心は決まっていた。

「謝りに行くぞ・・・」

「ああ」

二人は笑い合いながら、死んだ顔で、歩き出して行った。

ユイのお母さんは窓ガラスの破片をかき集めていた。その前に初音が手伝おうとしたら強制的に止められた。

「ユイさんが言う人、来ないですね」

「そうだね、所詮夢だったのかな。初音ちゃんが言った通りただのそこら辺の近所の悪ガキだったのかなあ。ちよっとショックだな」

今まで何処か心の奥底に秘めた想いは灰が風に乗って運ばれて行くように、何も残っていなかった。

「神様、いなかったのかな」

「そんな事無いと思います」

キツパリ否定された。そして続けた。

「信じ続けたなら、こんな事起こりませんよ。それに『信じる』と決めたなら最後まで信じ続けなきゃ駄目ですよ」

「心に響いたよ、ありがとうね初音ちゃん。もう一回信じてみるよ」

ユイのお母さんは背伸びをした。どうやら片付けは終わったみたいだ。

「さてさて、終わった終わった。来ないわねボールの持ち主」

コンコン

「先生かな？」

「どうだろ、ちよつと出るね」

スタスタとお母さんはドアの方へと行った。

『ごめんなさい！』

二人は同時に頭を下げた。

「どうしたの少年達？急に謝られても困るんだけど」

「実は公園で野球をやっててそれで、俺のボールが飛んで窓を割った訳なんです。ごめんなさい！」

「原因は元々俺です。コイツは関係ありません。ごめんなさい！」

「公園って遠いじゃない！どうやってここまで飛ばしたの？
凄いわね！」

「あれ？この声お兄ちゃん？でも後一人、誰？」
「お兄ちゃん？いたの？」

「まあまあ二人共、よく正直に言えたね。ボールは部屋にあるよ」

「はい、とっても優しくて頼れる兄なんです」
「そっか」

ガチャ

「失礼します」

「お邪魔します」

「お兄ちゃん！」

「初音！？どうして？」

「迎えに来るの遅いから病院の中探検してたんだ」
スッカリ忘れてた。

『あ』

「ひなつち先輩？音無さん？」

『ユイ？』

ありがとう、先輩

これで

良かったのか、

ああ

「お兄ちゃんと知り合いなの？ユイさん」
「ユイ、この人達と知り合い？」

『さあ？』

三人揃ってハモった。

「うちの妹がお世話になりました」
「いえいえ、こちらこそ。良くして頂きありがとうございます」
す

「ありがとうございます！」
「大きな声でありがとね初音ちゃん」
窓の弁償はしなくて良かったらしい。
あの先生が弁償してくれるみたいだ。

「あの」
「なあに、日向君」
「また、来ても良いですか？」
「ええ、勿論よ」
「私も、良いですか？」
「初音ちゃんまで来てくれるの？ありがとね。えーとお兄さんの名前は？」

「『弦』を『結』ぶと書いて結弦です」
「そうなんだ結弦君もどう？」
「俺は時間が有ったら来ます」
「そう、今日はありがとね」
ユイのお母さんは結弦達を最後まで見送った。

第4話 ここから

「二人共、硬くならないでどんどん食べてね」

（何で、こんな事に？）

初音は食べ物を口に運びながら思った。

遡る事5時間前

「初音、準備は良いか？そろそろ引っ越しするぞ」

「うん。でさ、お兄ちゃん」

「何だ？」

「引っ越し先聞いて無いけど、何処なの？」

「先生の家」

「先生って、私がお世話になった？」

「ああ」

「ええ!？」

初音は驚いた。それは無理も無いだろう。退院して家に帰ると兄はこれから引越すとか、家の物は無くなっているのは、大変だった。

「何で？」

「先生がさ、『私の家に来ないか?』てさ」

「断らなかったの？」

「『家族が二人だけで大変じゃろ?それに甘えるなら、ドーンと甘えて来い!』て」

何で先生が家族が二人だけの事を知ってるの、と聞こうとしたが面倒くさくなるだろうと思いこれ以上は追求するのは止めた。

「そもそも何でわざわざここに来たの?先生の家に直接行けばいいのに」

「だって、名残惜しいと思うんだこの家と別れるの」

そう言うのと結弦は何も無い家を見渡した。

「お兄ちゃんらしいね」

クスクスと初音は笑った。

「さてと、じゃ行くか」

「うん」

二人は初めての二人暮らししたアパートを後にした。

「で、先生の家の行き方は？」

「それが、分からない」

「どうするの」

「なぐんてね、先生が迎えに来るってさ」

やり取りしている間に白い車が目の前で止まった。

そして先生が車から降りると後方のドアをわざわざ開けてく

れた。

「さ、二人共乗って」

結弦、そして初音は車へと乗って運ばれて行った。

「そういえば、何で家族結弦君と初音ちゃんだけなの？」

「それは深い理由がありまして……」

「ごめんなさいね、私ったら。変な事聞いてごめんね結弦君」

「いえいえ、そんな事ありませんよ」

「結弦君、初音ちゃん」

はいと二人は返事をした。

「これからは、『家族』て思っていていいんだよ」

『はい』

二人はここから新しい生活が始まって行く――。

番外編

だった」

「ある奴には自分の過去と向き合う力が必要

「ある奴には夢を叶える力が必要だった」

夢を叶える力——？

——、何言ってるんだ——？

俺——

「ある奴には長い時間を掛け、仲間が必要だった」

長い時間——、仲間——？何だそれは

何で——、知らない男の襟を掴んでい
るんだ——？

どれだ！」

「さあ、貴様は

奴、？誰の事なんだ。

それに、この男子生徒は？

「！？」

眼を覚ましたが、そこには襟を掴んだ男は居なかった。

「夢？にしても良く出来てるな」

「うわあああああああああああ!？」

結弦は空を見た。

「夢で良かった………」

「おはよ、お兄ちゃん」

「おはよう初音」

お互い1階のリビングへ行き挨拶を交わした。

「そういえばお兄ちゃんの部屋から悲鳴が聞こえたんだけど、
気のせい？」

「気のせいだろ」

「そうだね。お兄ちゃんが悲鳴を上げるわけ無いよね？」

「結弦君、初音ちゃん朝御飯出来たわよ」

おばさんは言つと二人の前にお皿を並べた。

「おばさん」

「なあに結弦君？」

「朝から早く起きてご飯まで作って頂きありがとございま

す」

「？」

「迷惑ではありませんか？」

「結弦君、私達はもう家族なのよ？思いつきり甘えて良いんだ
だよ？」

「はい」

「ささ、食べようよ」

『いただきます』

三人は手を合わせ、ご飯を食べ始めた。

『ごちそうさまでした』

おばさんは食べたお皿を片付け始めた。

「二人共、学校に行く準備はした？」

「はい。もうしました」

「あれ？お兄ちゃん制服変わってない？」

その姿はブレザーに青いネクタイだった。

「変わったけど、どうかした？」

「前まで詰襟だったよね？」

「学校変わったんだよね結弦君？」

「私聞いて無い！」

「まあまあ、二人共そんな事言っただけで学校気をつけて行

ってね」

『行つて来ます』

結弦と初音は靴を履くとドアをくぐった。

「じゃここでお別れだねお兄ちゃん」

「気をつけるんだぞ初音」

「うんお兄ちゃんもね」

二人は別の方向へと歩き出した。

「久しぶりだな、学校へ行くの」

妹の為に働いて入院費を稼ぎ、日々アルバイトしていた結弦には無理も無いだろう。

「ごめんなさい」

と、身長は結弦より小さい男がぶつかって来た。

「あ、いえいえこちらこそ——？」

（『今は、貴方に立ち向かう勇氣だ！』）

「失礼しました」

男はその場を後にした。

（今の、言葉は一体？）

キンコンカーンコン

「おいゆりっぺ起きろって」

日向はカチューシャの女子に声をかけた。

「うーん後もうちょい・・・、昨日疲れたんだから・・・
・授業始まったら教えて・・・」

「しょうが無いな。分かったよ」

ガラリ

「えー今日から新しい仲間が増えるぞ」

クラスの担任が言くと教室がざわついた。

「ちなみに男だ」

『えー！』

（ふん、何だよ皆お子様だな）

男子生徒達が騒いでいる中、日向は冷静でいた。

「それでは来てもらおう、」

ガラ

（！？）

「今日からこのクラスに来る事になった、音無 結弦 で
す。よろしく願いいたします」

「じゃあ音無、あそこらへんで寝ている仲村の席の隣へ行け」

「はい」

結弦は机の間を歩き目的の場所へ向かい座った。

「よっ、音無」

横から不意に声がかかった。

「日向・・・！」

「もう、うるさいわね・・・！？」

「今日から新しく入った——」

「音無君？」

「ゆり？」

「何で、お前寝てたんじゃないのか？それに音無、何でゆり
っぺの名前を？」

『さあ？』

二人は揃って声を上げた。

放課後

「ねえ、音無君」

「何だゆり？」

「私と貴方、何処かで会わなかった？」

「さあ？気の——」

（『ようこそ！——へ！』）

（また！？一体何なんだ！）

「音無君？」

「へ？ああ、ごめん」

「そんな事より、私達の部に来ない？」

「部？」

「ええ、どうかしら？」

「おう、楽しいぞゆりっぺの部」

横からいきなり日向が突っ込んで来た。

「日向が入っている部活ってゆりの所だったのか？」

「その通り」

「貴方達、親しいけど友達？」

「そうだけど——」

（『じゃあな、親友！』）

（何だ今の——）

（またかよ！？）

「日向君？音無君？どうしたのそんなに険しい顔をして？」

『何でも』

「とりあえず二人は仲が良いのが分かったわ。どうする音無

君、部来る？」

結弦の答えは決まっていた。

答えは

「ああ。よろしく」

「ようこそ、我々の部へ。案内するわね」

旧校舎――

そこは前の学校と今の高校と合併させたが処分するのも勿体無いのでそのままにしてある。

「なあ、ゆり」

「何、音無君」

「ゆりの部活って具体的にどういう事をするんだ？」

「それは決まってい無いんだ」

ゆりの代わりに日向が答えた。

「へ？」

「まあ、うちの部活は好き放題にしてるんだけどね」

「そうか。ゆり」

「何？」

「俺とゆり何処かで会わなかったか？」

「貴方も同じ事を言うのね」

「どういう事だ？」

「私の部に入っている人達、皆そう言うんだよね」

「じゃ、日向も？」

「ええ、そうよ」

否定はしなかった。

「でもね、音無君や日向君と皆に会った時私もそんな感じがした」

そうこうしている間に目的地に着いた。

「『校長室』か」

（『うわあああああああああああ！！？』）
そこにはでかいハンマーが、そして結弦が鳥になった。

「音無？」

「へあ！？いや何でも！」

「大丈夫か？汗が凄いぞ？」

奇声を上げたり、変な光景が浮かぶは結弦は訳が分からなかった。
った。

「『宇宙戦艦』て言うのはどうかな！」

「いやいや、凄い規模だなそれ！」

「本当にやりたい放題だな・・・」

外からでもギヤーギヤー騒いでいる様子が目に浮かんた。

「そういう部活だから音無」

「そうだな・・・」

「じゃ私が合図したら部屋に入ってね」

「ああ、分かった」

ガチャ

「ハイハイ、皆静かに！」

ゆりは手を二回叩くと皆静かになった。

「今日から新しくここに入る事になった人がいるの」
「おっ、ゆりっぺ脅したか？」
「あんた……、一回死んでみる……？」
「ごめんなさいいいいいいいい！」
「分ければよろしい」
「……浅はかなり……」
「まっそんな訳で登場して頂くぞ！」
適当に日向はまとめると
「どうぞ」

ガチャン

「えーと、今日から新しく入る事になった――」

『音無！？』

挨拶をする前に皆が言い当てた。中には英語が混ざっていたのは気のせいだろう。

「みんな……？」

第6話 Friends

「みんな・・・？」

結弦は懐かしい感覚が襲って来た。今までに無い位・・・。

「つぐ!？」

突然に頭痛が襲って来た。

「音無君!？」

「ぐああああああ!？」

『神様もびつくり仰天かなって!』

『ゆりっぺの為だ!』

『・・・百人だ・・・!』

『一体何事だ!』

『Hurry up!』

『クライストと――』

『お前、どっちの味方だよ!?』

『認めてくれるのか――?』

『記憶無し男!』

『じゃあな、新人!』

『吹っ切れたと言つかさ——、』

『うん、』

『ゆりっぺさん』

『着痩せるタイプなんです!』

『結婚、してくれますか?』

『オペレーション、スタート!』

『愛してる!——!』

『——、——』

まるでパソコンのように外部から大量の情報が頭にぶち込んで
いった。

頭にこれ以上流し込まれて行くと壊れてしまう——!

「があああああ!?!」

「音無!?!すっかりしろ!音無!?!」

限界だったのか音無は声を上げるのを止め、そして地面に倒れ
た——、

『——無、音無!』

「う……………うん?」

重たい瞼を無理矢理こじ開けるとそこにはみんなが心配そうに結弦を見つめていた。

「あれ?……………俺、どうして?」

「音無君、貴方覚えて無いの?」

結弦は体を起こした。フカフカした手触り、元々ここに置いてあったソファだろう。

「それがサツパリ……………」

「音無、大丈夫か?」

「ふうん、心配して損だぜ」

「おいおい、大丈夫か?」

「……………」

結弦は床に足を着けるとフラフラしながらも立ち上がった。

「音無さん無理しないで下さい」

「音無、無理すんなって」

「大丈夫だ日向」

言葉で制すると顔を右、左と回した。

「Oh tough boy」

「本当に大丈夫?」

「ありがとな、心配掛けてくれて。ゆり、日向、直井、野田、藤巻、大山、椎名、TK、松下、竹山、高松——!?」

『!?!』

その場全員、数十秒固まったという。

「まさか、超能力者が部に入ってきて来るなんて」

「Oh my god……」

「なんで？」

「これはこれは大変面白い事が起こりましたね」

高松はメガネを知的に上げた。

「……浅はかなり」

「何で、私達の名前を？」

「分からない。自然に口から言葉が――」

そうとしか言い様が無かった。

「てか、何で俺が名前を言う前に皆言い当てたんだよ」

『それは……』

またもや、沈黙が続いた。

第6話 Friends（後書き）

直井は女になっています。

作者の事情で……『コレ』嫌いなので……

第7話 Friends Part 2

またもや、沈黙が続いた。

ガチャン

「おうどうした？皆静かじゃん」
そんな沈黙に一人の女子が壊した。

「岩沢？それに、関根？入江？ひさ子？」

またもや口から言葉が勝手に出ていた。

「記憶無し男！？」

『音無さん？』

「音無？」

またもやメンバー全員が固まった。

「やっぱり、あんた超能力者？」

「神様もびっくり仰天だよ！」

「音無さん凄い……」

「……浅はかなり……」

メンバー全員が驚く中、椎名だけが冷静でいた。

「貴女達、音無君と面識あるの？それに音無君も」

答えなんか決まっていた。

答えは……

『さあ？』

「音無、病院行った方がいいんじゃない？」
「そのようだな・・・」

日向の意見に音無は賛成した。

番外編 休日

「うゝん結弦君、何処も異常が無いね。いたって健康だよ」

「そんな。あんなに頭が痛かったのに・・・！」

納得がいかない。そんな気持ちで胸がいつぱいだった。

「恐らく、ストレスから来たんだと思うよ」

「『ストレス』？」

「まあ、初音ちゃんのために働いて良く頑張ったよ結弦君」

真剣な眼差しと顔がそこに有った。

いつもの口癖の『じゃ』が消えていた。

「でも——」

「レントゲンや色々な方法で調べたんじゃ。大丈夫だ。私の言

葉に嘘は無い」

「そうですか。治療代の方はどうなるのでしょうか？」

「お前は私の息子同然。無料だ」

爆弾発言な事を言う先生。良くここの先生を勤めていたものだ。

「そんな事したら医院長が——！」

「私が医院長だ！」

一瞬、結弦の脳がフリーズ状態に陥った。

「今、何て？」

「私が医院長だ」

「嘘だあああああ！！」

「嘘じゃ無いいいいいいいい！！！！」

病院中に声が響いた。

「お母さん」

「なあに？ユイ？」

「休日から凄い声だね」

「そうね。誰が声出してるんだろっね？」

遠い病室でも聞こえていた。

第8話 Off Day

毎日、寝て

毎日、同じ天井を見て

毎日、友達の手紙のコピーを書き写す

毎日、効果が有るのかどうか分からないリハビリ

毎日、お母さんに迷惑をかけてしまう

毎日、テレビの何かしらの番組を見て

だが、そんな日常にある変化が訪れた。

コンコン

「はい」

ユイのお母さんはドアに近づきドアノブを回した。

「あら、来てくれたの？」

そこにいたのは病院の窓を割った一人の日向がいた。

「あ、ひなつ先輩」

「よっ、元気してたか？」

お互いは気軽に挨拶する。

「はい、日向君、椅子どうぞ」

ユイのお母さんは何処からともなく椅子を出した。

「その椅子何処から出したんですか？」

「まあまあ、小説なんだから何でもありなのよ」

なんて事を言うんだ。

「ちよ、お母さん」

「それ、爆弾発言ですよ！」

二人共、ナイスフォロー。ありがとうございます。

「まあまあ、良いじゃない」

そう言つと溜め息をついた。

「あつ、日向君」

「何でしょうか？」

「ちよつとこれから仕事行くんだけど、その間にユイの相手を
して貰えるかな？」

「用事が無いので良いですが、俺なんかで大丈夫ですか？」

「日向君だから頼んでいるのよ。じゃあ、行ってくるねユイ」

「気をつけてねお母さん」

「行つてきます」

ドアノブを回し、すぐに部屋を出て行つた。

これで日向とユイの二人きりになった。

「そう言えば何で『ひなつち先輩』って言うんだ？」

「何ですか？いけないんですか？」

「いや、気に——」

(『ユ・イ・にゃん』)

(!?)

「どうしたんですか？」

「いや、何でも！」

そう言ってる割には何故か焦っていた。

「そうなんですか」

ユイは笑顔を作った。

(ヤベえ、可愛い。何なんだこの笑顔！)

太陽が重なってるせいか、さらに笑顔がパワーアップして見え
た。

「ひなっち先輩？」

「なんだ？」

無理に我に還るとユイに反応したが顔が熱かった。

「顔、紅いですよ」

「そんなこたあ無いぞ！」

「なら良いんですが……」

心配そうな眼をしてこちらを見てきた。その姿も可愛かった。

「なあ、ユイ」

「はい？」

「俺とユイ、何処かで会わなかったか？」

「どうして、そんな——」

(『60億分の1の——』)

「ユイ？」

「へ？あ、ごめんなさい。私もそんな気がします」

「そっか」

背伸びをすると、また同じ体勢に戻った。

だけどユイと会った気がする、随分と昔に。

「それだけですか？」

「ん？他にも有るぞ」

「何ですか？」

「俺達、何か『約束』しなかったか？」

「『約束』？」

「ああ」

「何かし——」

（『また60億分の1の確率で出逢えたら——
してやんよ』）

「どうかしたか？」

「この言葉、聞いた事ありますか？」

「へ？」

60億分の1の確率で出逢えたら、
これがその『約束』かもしれない、心の底から想っていた。
だが、聞けない。

「言葉って何だよ？」

今、目の前に、約束した本人が居るのだから。

第9話 Off Day Part 2

「言葉って何だよ？」

ユイは躊躇った。

『60億分の1の確率で出逢えたら――』

『結婚してやんよ！』

本当かどうか分からない。『約束』したかもしれないが、分からない。

あの夢も、

「ユイ？」

「やっぱり、何でも無いです」

聞けなかった。

「そっか」

「気にならないんですか？」

また日向は背伸びをした。

「ああ。ゴメンな変な事、聞いちゃって」
「いえいえ」

夢は夢にすぎなかった。

『いたって健康だよ』

（大丈夫なのか、俺？）

結弦は先生、いや医院長の言った事を思い浮かべて病院の廊下を歩いていた。

「あ、お兄ちゃん」

「初音？どうしてここに？」

ぱったりと廊下で初音に会った。

「どうしてってユイさんに会う為に来たんだよ」

ここの病院は父親代わりの先生の病院でもあり、そこそこ名前が知られている病院。

そんな所に一人の少女、ユイが居る所である。

「そう言えば、ここに居るんだったな」

「お兄ちゃんも行くよね、ユイさんの所に」

「そうだな。どうせこの後暇だし」

「じゃ、決定。行こうよ」

初音は結弦より小さな手で手を取ると走り出した。

「ひなつち先輩」

「何だユイ？」

「初めて会った日、何で私の名前が分かったんですか？」

「それは・・・」

「何ですか？」

「ユイもなんで分かったんだ？」

（『戦力になりますよ』）

（今のは？）

「それは、先輩が——」

コンコン

言い掛けようとしたらドアから音がした。

「はい？」

ガチャ

「ヤッホー、ユイさん。あつ、誰だっけ？」

「日向だよ初音」

（俺ってそんなに・・・）

日向が軽くシヨックを受けている間に二人は入っていった。

「初音ちゃん、それに音無先輩来てくれたんですか？」

「よ、ユイ」

「ねえ、お兄ちゃん」

「何だ初音？」

「何でユイさんの名前知っているの？」

（同じ事を聞いてら）

日向はユイと同じ事を言う初音に少し笑った。

（音無先輩、何て言うのかな？）

ここにも一人いた。顔に表してはいないがユイも何故かワクワクしていた。

「それは、分からないんだ」

「じゃあ、どうして名前を当てる事ができたの？」

「分からない。ただ、」

「ただ？」

「いや、何でもない」

懐かしい気がした。

言おうと思ったが何かバカにされそう、という気持ちがあつて
言えない。

第10話 Ball game rally

「球技大会？何でそんなの分かるんだ？」

旧校舎の校長室の中で結弦は疑問を抱いた。

「それは僕が学校のパソコンにハッキングしました」

そんな疑問をオカッパの髪型が特徴な竹山が答えた。

「流石、竹山君！でかしたわ！」

「容易い事です。それに僕のことは『クライスト』とお呼び下さい」

「ダメだよ！竹山君そんな事しちゃいけないよ！」

ギヤアギヤ騒いでいるのは特徴が無いことが特徴な大山だ。身長は竹山と同じ位だが名前に「大」が付いている割には小さい。

「僕は命令で動いただけです。あと僕のことは『クライスト』

と――」

「命令でもダメだよ！竹山君！」

「竹山君、証拠は残していないわよね？」

「僕を誰だと思っているんですか？それと僕のことは『クライ――」

――」

「なあ、ゆり」

結弦は竹山が何か言おうとした言葉を遮った。

「何かしら」

「本当にやりたい放題だな」

「それでも楽しいだろ？音無」

まだ騒いでいる大山を藤巻はなだめていた。
つり目が特徴で何故か竹刀を持っている。

「球技大会が何か懐かしいな……」

「音無、やった事あるのか？」

「いや、無い」

「どうしてだよ？」

「初音の入院費稼ぐのにちよつちゆね」

「マジかよ。お前学校は？」

「そんな事より日向君」

「何だゆりッペ？」

「あなた、この後用事があるとか言っ
てなかったっけ？」

「あゝ」

日向は時計を見ると即座に校長室から出た。

「音無君、日向君の帰りが早いんだけどどうしたの？」

「さあ」

本心では分かっているがとりあえず言わなかった。
きつとユイの所へ行つたのだろう。

「なあ、ゆり」

「何？」

「ここに居るみんなさ、あと一人足りないか？」

「やっぱりあなた超能力者？名前、分かってんじゃないの？」

「名前か……そうだな」

（『ゆりッペさん』）

「遊……佐？」

「分かってんじゃないの。そうよ」

ガチャン

「ゆりッぺさん例の球技大会は野球に決まったようですよ」
そこに長い髪をツインテールにした無表情の少女がいた。

「そう。調査ご苦労様、遊佐」

ゆりは校長のフカフカした椅子に座り、皆を黙らせた。

「みんな、球技大会は野球に決まったらしいわ」

「野球ですか……」

高松は知的に眼鏡を上げた。いかにも勉強できますという雰囲気が出ているが実際はバカらしい。

「Base ball、オモシロソウ！」

英語を使っていたりときには日本語を交えているという意味深で謎だらけなTK。「TK」と名乗っているのは本人がそう呼んで欲しいからだそうだ。

「で、ゆりッぺ今回の作戦は何だ？」

獲物を狩る獣の眼が特徴な野田。何故か常に黒くて長い棒を持っている。

ゆりは不適な笑みを浮かべた。

そして、告げた。

「今回はゲリラ参戦で行くわよ！」

第11話 Ball game rally Part 2

『ゲリラ参戦！？』

皆（椎名、遊佐を除く）は驚いた。

部を始めて以来、こんな大胆な作戦は無かった。

「そうよ。一度こういうのやってみたかったのよね」

「ゆりッペの願いなら喜んでやってやるぜ！！」

野田は黒くて長い棒を振り回しながら咆哮した。かなりうるさい。

「野田君」

「何だゆりッ———ヴお！？」

何処からか分からないがゆりは広辞苑を野田にぶちかました。

「ゆりッペさんやり過———？」

「尊い犠牲だわ。みんなこの死は無駄にしないよう頑張るわよ

！」

「いやいや死んでいないから！気絶してるだけだからゆりッペ

！」

松下は野田の方へ駆け寄ると体のデカさを利用してお姫様抱っ

こをした。

そしてソファーへと寝かした。

柔道が得意で五段を持っているらしい。

皆から『松下五段』と呼ばれている。

「俺は嫌だ」

「じゃんけんしない？」

「じゃんけん？」

彼女は脳をフル回転させた結果が、これだ

1・2・3！

「そう！じゃんけん！私がじゃんけんで勝ったら私の言う事を聞く！そしてあなたが勝ったら私の言う事を聞く！どうよ！」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

「いや、滅茶苦茶じゃん」

「ちっ」とゆりは小さく舌打ちをした。

「じゃあ、こういうのはどうだゆり」

「何？」

「もし、球技大会が遊佐の言っていた通り野球だったら俺は参加する。間違っていたら参加しない、これならどうだゆり？」

「私の情報は間違っていないま——」

「上等じゃないのよ！音無君やってやるわよ！」

この時、皆は思った。

アホだ、と。

翌日

「え、唐突に言うのも何だが、来週クラス対抗の野球をやる」

「音無君、約束事は守ってね」

「ハイ」

「どうした二人とも？」

第12話 Ball game rally Part 3

「ゆりッぺさん、音無さんは仲間に来ましたか？」

「当たり前じゃないのよ」

二人は旧校舎内の廊下を並列になって歩いていった。

『旧』と付いているが校舎内は綺麗だ。いつも用務員さんが休みの日に手を抜かず欠かさずやっているからだろう。

「脅しましたか？ゆりッぺさん」

「私、そんな事をする人間だと思って——」

「思っています」

「即答じゃない。私達は『約束』を守っただけよ」

『約束』というのは昨日の放課後、音無とゆりがみんなの前で宣言した事だ。

「ああ、あのアホなやり取りですか」

「ねえ、今アホって言わなかった？」

「いいえ、あの間抜けで馬鹿で呆れて言葉が出ず、アホとしか言い様が無いなんて誰が言いますか」

「ちよつと、遊佐バカにし——」

「そろそろ校長室に着きますよゆりッぺさん」

どうこうしている間に目的地に着いた。

ガチャン

「あ、ゆさゆさ」と遊佐に声を掛けたのは関根だ。
「しおりんさん元気でしたか？」

遊佐は適当に関根をあしらうと部屋の隅へと行った。

「Wahoooooooooooooooo!!」

TKはヘッドスピンをしながら二人を迎えた。部の中で一番ダンスが上手いらしい。

当然のように、ゆりは何も無かったように校長のフカフカな椅子へと座った。

「さて、音無君も加わったし作戦会議を始めるわよ！」

「何の作戦なんだゆり？」

「何ってポジション決めよ」

「ポジション決めですか」

高松はダンベルを持つのを止めると床に置いた。

「野球は基本的にここに居る全員でやるわよ！」

「ゆりッペ、野球のルール分かっているのか？するのは9人だここに居る奴ら合わせると10人以上になるぞ」

「そんな事分かってているわよ日向君。後の残りは代打や選手交代でもさせるわよ」

「おいおいゆり、そんなんで良いのか？」

「とりあえず私は監督に決定よ」

「ゆりッペが監督か・・・何か不安だな」

「日向君、ちよっとこっちに来て。顔に何か付いているわよ」
「え？何処？」

「大丈夫なのか？」

「どうなんだろうしおりん？」

「さあ？ひさ子さんはどう思う？」

「別に。岩沢は？」

「さあ？」

「どうしたものか・・・」

「どうでしょうかね」

「血迷いましたかゆりッペ！」

「はん、ひつでえ言われようだぜ！」

「愚民が務まるのでしょうか？」

（ぬうおおおおおおおおおおお！！！！何で、何で、何故だああああああああああああ！！！！可愛い顔して、直井ひつでえよおおおおおおおおおおお！！！！）

もう悔しい何かと何かと悲しい何かと何かと混沌と化していた。なにが何だか分からない。

日向は地面にうずくまった。もう顔をしばらく見せられなかった。

「おいおい、待てよお前らそんなに言う事は無いだろ！」

（お、音無・・・！！）

まさに日向にとって音無は救いの舟。いや、天使のように思えた。

「日向はとりあえず仮にも野球経験者だ。多分、ゆりはそこを見込んで日向を選んだんだ。そうだろ、ゆり」

「ええそうよ」

「うう、そうだったのかゆりッペ・・・」

そう言うと日向は立ち上がった。泣いていたせいか、目の周りがひどく腫れていた。

「音無ありがとう。俺の見込んでた通りだぜ。それにさ、初めて会った時から結構お前のこと気にいつてたんだ」

「お前、『コレ』か？」

音無は右手の甲を左の頬へとくっ付けた。

「違あああああう！」

「日向君そんな趣味が……」

『気持ち悪……』

「みんな誤解だあああああああああ！」

必死に否定したが、日向の『コレ』説は学校中に広まったとか
広まっていなかったか……。

第13話 Ball game rally Part 3・5

「お前の人生だつて本物だったはずだろおおおおおおおお！
」

あれ——？音無？

何で俺、血塗れなんだ——？

ゆりッペもボロボロだ——
これは——ひつでえな、

皆、血塗れじゃないか……

ちっ、体動けねえ

「認めてくれるのか？あんた——」

直井——？

『おい、日向起きろ』

「はい！あれ？」
「授業中に寝るなよ。つたく、おい、1行目から読め」

教科書に目を移すと読み始めた。

非常につまらなかった。それはここに居る全員が思っている。教科書に載っているもの全部作者の自己満足だ。

最近の科学は間違っている、思い通りに出来る、私はこう思っている、結局、作者の自己満足に過ぎない。

教科書というものは洗脳力が高いものだ。国の都合で内容も変えられる。

キンコーンカーンコーンとチャイムが授業が終わりを告げた。

「げ、ヤッベ弁当忘れた!」

鞆の中をもう一回確認し、中身をひっくり返してみたが見当たらなかった。

「おーう、音無、学食トウギヤザーしないかい?」

「お前、やっぱり『コレ』か?」

右手の甲を左の頬へとくっ付けた。

「違あああう!俺は純粹にお前と学食をしたいだけだつて!」

「日向いきなりそんな事を言うとは誤解されるぞ」

「うっ。で、どうだ学食どうだい?」

財布の中を見たがそんなに寂しくないようだ。

「そうだな食べるか」

食堂

合併させた学校の学校の校舎を改造させ、巨大なのが出来た。
全ての高校より勝っていた。

「でかいな……」

全校生徒をここに集めてもまだまだいけそうだ。

「お前ここに来たこと無いのか？」

「毎日、弁当食ってたからな」

良く見てみると真ん中にでかい階段もあつて2階もある。
一体どれくらいのお金を賭けたのだろうか。

「よし、何か食おうぜ！」

二人はタッチパネル式の食券の機械へと向かつて行つた。

「どうだ音無、決まったか？」

「ここ、メニユー在りすぎだろ……」

でかいだけだと思つたがメニユーは豊富だった。大抵の食堂は
でかいだけ取り柄でメニユーはスカスカだ。

15分後

「音無、10分は経ってるぞ。大丈夫か？」

「ヤッベ、迷う。日向ここのオススメは何だ？」

「このオススメか……、といつても何食つてもこの美味いんだよな……」

タッチパネルを指で弄っているとピッ、と何か音がした。

（もう、これで良いか……）

取りだし口から白色の食券を取った。それは『麻婆豆腐』と書かれている。

「音無、チャレンジャーだな」

「ハ？」

「この麻婆豆腐は物凄い辛いと噂されているんだぞ」

「仕方ないだろこれが出てきたんだから。日向は何にしたんだ？」

「オムライス。旨いぞ」

二人は空いている席を見つけて座った。

麻婆豆腐、この禍々しい赤い色。赤い色が豆腐まで浸食していた。

一目で見て味がわかった。

「辛そう……」

「音無、見事にハズレメニューを当てたな」

学食と言うのは見た目だけで判断は出来ないもの。名前が美味しそう、ただで頼んだらとてつもない不味さだった。という可能性も有り得る。それが、ハズレメニュー。

それを見事に当てたのが、音無 結弦。ごく普通の学生だ。

「見た目より、味だ日向」

（『そんな、ささやかな幸せ・・・奪っちまった・・・俺』）

「音無、無理すんな」

「だが・・・俺は食べる！」

レンゲを右手で掴み、麻婆豆腐を掬った。
やはり、禍々しい赤い色をしている。

「音無、お前を尊敬するぜ・・・」

ゴクツと生唾を呑み込むと意を決した。

「ハム」

そして、口に運び込んだ。

「うっ！」

「音無！やっぱり、——」

「うめえ」

「ハイ？」

「うめえよこれ！口の中でとろける豆腐、それに程好い旨味、
優しく包みこんでくれるこの風味・・・！滅茶苦茶うめえよ！日
向も食ってみろ！」

「そんなにか？」

音無に勧められ、スプーンを使い麻婆豆腐を掬った。

そして——

「旨いぞ！何だこの旨さは！これは、当たりメニューだ！」

「にしても誰だ、『辛い』って噂を流したの」
「さあな、食おうぜ音無！」

日向はまた麻婆豆腐を掬うと口に運んだ。

「日向、お前食うなよ！」

「ちえ、」

第14話 Ball game rally Part 4

「こんな感じでチームを考えたが良いか？ゆりッペ」

「良いけど、何で音無君がピッチャーな訳？椎名さんでも良いと思うけど。椎名さんはどう思う？」

ゆりは部屋の隅に居る、常に黒いマフラーを巻いているというのが特徴的な椎名に声を掛けた。

「別に、私はどこでもいい」

「椎名っちは運動神経抜群だし、かなり役に立つ。音無はコントロールも良いし、しかも速い。これ程適したピッチャーはなかなか居ないぜ」

第1話参照。見てね。

「じゃあ、何で野田君がキャッチャーなの？」

「音無のボールを捕れるのは野田しか居ない。反射神経も椎名っちに匹敵するから、盗塁された時に役に立つぜ」

「フン、当然だ。ゆりッペ、期待していてくれ」

野田はゆりにウィンクをした。

「分かったわ。後、助監督は遊佐、竹山君にしてもらおうと思うけど二人共いいかしら？」

無視された。

「了解しましたゆりッペさん」

「良いですけど僕の事は『クライスト』とお呼び下さい」

そんなこんなでポジション決めが終わったがある一つの問題点が存在した。

それは、

「チーム名、どうしようかしら」

そう、チーム名。チーム名は無くってはならない存在（？）だ。
これがなければゲリラ参戦が出来ない。

「ゆりッペ」

「早速案が出たの野田君？」

「ああ、『チームゆりッペ』どうだ？」

「何か嫌だ。はい、次！」

即座に却下。

「『チーム日向』」

「気分が悪くなるわ。はい次！」

「『今日のわんこ倶楽部』」

全員が固まった。

「いけなかったか？」

椎名は涙目で見ながらゆりを見つめた。

「椎名さん、いけなくもないけど他ないかしら？」

「今日のじゃんこ倶楽部」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

掛ける言葉が見つからない。

「浅はかなりいいいいいい！！」

奇声を上げるとドアを蹴破り、外へ逃げた。

「椎名さん、待って！」

大山が追いかけようと外へ行った。

あの足の速さに追い付けるのだろうか。

（『死んだ世界戦線』）

（何だ？今の言葉は？）

「音無君、何かないかしら？」

「死んだ世界戦線……」

想っていた事を思わず呟いてしまった。

「音無君、私達まだ死んでいないわ。他は？」

「走馬灯戦線」

「日向君、死ぬ寸前じゃない。他」

「フジツボ戦線」

「松下君、海の生き物になってるわよ。ていうか何で戦線が付くよ！他」

（『ようこそ！死んでたまるか戦線へ！』）

（ゆり……？）

頭の中にこの学校と同じセーラー服を着ていて何かの銃器を持っていた。

「死んでたまるか戦線……」

「音無君なかなか良いじゃない。はい決定！略してSSS！」

「何でSSSなんですか？」

「Shinde Tamaruka Sen Sen で『S

SS』どうよ！」

ゆりはどや顔をかましたがあまり決まっていな。

「なあ、ゆり」

「何？」

「どうやってゲリラ参戦するんだ？」

「あ！」

どうやらそこまで考えていないらしい。

クラスでは38人から、18人を選んで対決という形になる。

後の人達は応援、救護、代打、強制交代というルールで行う。

ハンデとして野球部員は前半戦は審判として活躍する。希望者は審判をやり続けていいらしい。

「おいおい、ゆりどうすんだよ」

「音無さんここは私に任せて下さい」

「直井さん何か作でもあるの？」

「私を誰だと思いでしょうか？天使ですよ」

「ハア？」

「私、催眠術が得意でしてね。審判を操ればゲリラ参戦が可能になりますよ」

駄目だコイツ狂つてるとゆりは思った。

「出来んのか？催眠術」

「おや、愚民の日向さん私を信じていないのですか？」

「何だと！」

「日向さん、私の目を見てください」

「ああ？」

「証明して差し上げましょう」

「面白い、やったろうじゃん！」

日向は直井に近づいた。

これから何か起こる事を知らずに……………。

「では」

直井の目を見たが特に何の変化は無い。

『愚民よ、水の有能さに気付くんだ。貴様は水に比べてどうなんだ？人の役に立ったのか？水さえあれば何だって出来るんだ』

直井は何処からともなく水入りのペットボトルを日向の前へ出した。

「水……！人の喉を潤す事が出来る……！雨だって降らせて大地を潤す事が出来る！水は岩さえも削る事が出来る！体の約6割が水！地球の約7割が海！雪だって水！崖崩れさえも起こすことも出来る！うわああああああああ！それに比べて俺は何だああああああああ！？人の役に立ってねえじゃねえか！！うわああああああ！！」

日向は地面に膝まづき、子供のように喚き散らした。

「ちよつと、日向君！？」

「Crazy boy!？」

みんな哀れな姿の日向に身を引いた。

「どんなもんです。私の催眠術」

悪魔のような笑みを浮かべ、ゆりを見た。もはや天使では無く悪魔だ。

「直井さんの催眠術はどうやら本物みたいね。これは使えるわ・・・」

地面を叩きまだ喚き散らしている。

どうやら速効性の催眠術ではないみたいだ。

「とりあえず、ゲリラ参戦は可能になった。残る問題はもう無い！」

「いやいや！日向をどうかしよつぜ！」

T o b e c o n t i n u e

第15話 Game start! Part 0.5

「待っていて何が悪い！俺はずっとこの世界で待っているんだ！！」

「まだ解らないんですか！？このままじゃ逢えないって言ってるんです！！」

逢えない？

誰に――？

この男、あの時――

「ハッ！？」

目を覚ますと自分の頬に滴り落ちる液体が落ちて行くのが分かった。

「学校……、行かなきゃな……」

結弦は涙を腕で拭くとベッドから降りた。

「おばさん、行つてきます」

「球技大会だっけ？頑張つてね」

「はい、行つてきます」

結弦はドアをくぐつた。

初音が居ないのは現在7時25分と少し早めに出たからだ。

「みんな、揃つたわね」

SSSメンバーは旧校舎の校長室に居た。

朝が早いせいかあくびが出ているメンバーが多い。

「ゆりッぺ、朝早いぜ。もうちょい寝かしてくれよ」

「作戦会議が終わつたら寝て良いわよ」

現在7時50分と微妙な時間だ。寝れたとしてもせいぜい10分位、中途半端な時間だ。

「確認するわよ。ピッチャー、音無君。キャッチャー、野田君。ファースト、TK。セカンド、日向君。ショート、ひさ子さん。サード、藤巻君。ライト、松下君。センター、椎名さん。レフト、大山君。」

これで良いわよね、日向君」

「ああ」

日向に確認を取ると目を瞑り、時間を少し空けると目を開き告げた。

「オペレーション、スタート!」

「ちよつと待つてよ!」

「何? 関根さん?」

「私達、陽動隊の役割は無いんですか?」

陽動隊とは

岩沢、ひさ子、関根、入江で組み合わせられたチーム。
音楽活動しており、いわゆるロックバンド。

「貴女達は救護係ね。必要が有ったら出て貰うわよ」

T o b e c o n t i n u e

第16話 Game start!

「では、校長先生からのお話です」

生徒会長が一通りゲームのルールを話すと校長にマイクを渡した。

ルールは話した通り、18人をクラスから選ぶ。

残りの人は代打、強制交代、応援、救護、という形に別れる。野球部員はハンデとして、後半戦から参加。審判にも廻って貰う。このまま審判をやり続けられる。

「皆さん、手短に話します」

とか言っておきながら話しは30分も続く、というのが大抵の校長。

「正々堂々と戦って下さい。はい、以上！」

『校長先生、ありがとうございました。30分後に試合を開始したいと思います。それまでは自由時間とします』

生徒会長が簡単に述べると生徒達は先生の指示で解散した。

クラス対抗球技大会は8クラスでトーナメント戦を行う。

クラスがこんなに多いのはこの学校が大きいからだろう。グラウンドは第一グラウンド、第二グラウンド、第三グラウンドがあ

る。そこで生徒達は野球をする。

「改めて見るとここ、広いな」

「そりゃあ、学校を合併して合併して合併したからな」

「何回合併したんだよここ」

「ま、ここにはサッカーグラウンドもあるし色々充実してるんだよ」

「充実し過ぎだろここ」

SSSメンバーは一足先に第三グラウンドへと向かった。
簡単に言うたと交渉する為だ。

結果は勿論、

「認めん」

「ちよつと何でよ!？」

「貴様達はメンバー登録リストには載っていない。それに、何故寄せ集めのチームなのだ？」

「おい、ゆりっぺの言うことを貴様は聞けないのか？」

野田は審判に抗議を仕掛けた。

「聞けないってなら力でおぶ!？」

ゆりは野田の顔面に裏拳をかました。そのせいか、野田は倒れた。

「まあそこはさ、認めてよ」

「この鬼壁と呼ばれている俺が認めるはずが無かろう」

鬼壁、

野球部員から慕われているらしい。

鉄壁の守り、強打者、その顔には似合わない優しさを兼ね備えている。身長は松下五段より少し大きい。

今回は全試合参加せず、本人の希望により審判をやる事になっている。

重苦しい空気が流れる中、音無達はゆりに背中を預けていた。鬼壁と対等に渡り合えるのはゆりしかないからだ。

「大人しく応援でもやっているがいい」
「嫌よ」

二人の間柄を形容するかのように、突風が吹いた。

「あう、目が、目が」
「どうした？直井」

「目にゴミが入ったようで、取って下さい音無さん」
「おう、分かった」
「どれ、俺に見せてみる」

鬼壁はいつの間にか音無の横にいた。

「あ、あんたいつの間に!？」

「まあ、そんな事よりこの子だ。目にゴミが入ったんだっけ？俺に見せてみる」

「あ、はい」

（かかった、計画通りね。流石鬼壁さんね優しいようで。直井さん後は頼んだわよ）

ゆりは直井に手を振った。催眠術を開始せよ、とのことだ。

「特にゴミなんて――」

『さあ鬼壁さんとやら、私達のゲリラ参戦を認めて下さい。なに、他のチームはじゃんけんで決めれば良いですよ。さあ認めて下さい』

「――、分かった。お前達の参加を認めよう」

完全に直井の催眠術にかかった鬼壁はゆり達のゲリラ参戦を認めた。

念のため、ゆりは「私達が参加するとはいいとして元々決まっていたトーナメント戦のチームはどうなるの」と、

「それはじゃんけんで決めれば良い」

確信した。催眠術は完全にかかったと。

第17話 Game start! Part1.5

球技大会

誰もが楽しみにしていた学校行事。

そんな中、抗議を仕掛けている者が居た。

「どういう事だよ!? 鬼壁じゃんけんで負けた位で出場停止ってさ
!」

「急に参戦したチームが現れたんだ。しょうがなかつ」

完全に催眠術にかかった鬼壁は冷静さを失った対戦相手をなだ
めていた。

「これは決定事項だ。もう変えられん」

「ふざけん——」

「おい、止める。そこら辺にしとけ」

チームの中で冷静な声がそのチームの男を黙らせた。

「鬼壁がこんなに拒んでいる。こんな事有ったかテメえら」

その一言でその場が凍りついた。

そして続けた。

「鬼壁は余程の理由でなければ認められない。皆も知っている
筈だ」

余程の理由では無いが、現在は直井の催眠術によって洗脳され
ている。

鬼壁を良く知っている者でも気付かれない。ある意味で直井の
催眠術はかなりの高等技術かもしれない。

「ですが、リーダー……！」

「俺がじゃんけんして負けた、それだけの話だ」

チームが焦っている中、リーダーと呼ばれている者が冷静に対処した。

「ま、じゃあな鬼壁。審判しつかりやれよ」

「無論そのつもりだ」

「へっ。お前の頑固（信念）前から変わってねえな」

「……………」

中には舌打ちをする者、納得がいく者、いかない者がリーダーの後ろへ付いていきその場を後にした。

そんなやり取りを見ていた者が居た。

「これで、良いのか……？ ゆり」

「そんなの決まってるじゃない」

悪魔の様な笑みを浮かべ掃き捨てる様に言った。

「良かったのよ」

第18話 Game Start! Part 2

照りつける太陽、わんさかと集まっている観客。
もはや球技大会ではなく甲子園だ。

「先攻、後攻はコイントスで決めるぞ」

鬼壁の声は低くそれでも遠い観客席に届いた。

「表でお願い」

「俺達は裏で頼む」

でかい手をポケットに入れると百円玉を取り出した。

キインと鬼壁の親指によってコインが回転しながら上がっていき、落ちて行った。

鬼壁はコインが表か裏を確かめた。それは、

「表か、先攻はSSSチームだ。各自互いに所定の位置に付け」

「皆、準備は良いわね！この試合勝つぞ、オーーーーー！！」

『・・・・・・・・・・』

一人だけ盛り上がっているゆりはさらに盛り上がっていた。

「何でみんな盛り上がらないの？」

「最初は音無だな行つてこい！」

「俺が一番じゃないのか！」

「まあ待てよ野田、お前は一発逆転の切り札だ。お前は6番だ」

「ちよっと、無視！？」

「じゃ、行つて来るわ」

「おう、行ってこい！」

「ねえ！わざとよね！？」

うるさいゆりを助監督である遊佐がなだめた。

「プレイボール！」

鬼壁が試合開始宣言をすると観客席の野次馬が騒ぎ始めた。

（先頭打者か・・・ここで、俺が塁に出なきゃ始まらないな）
そう考えている間にピッチャーは振りかぶった。

（遅い！）

キーン！と結弦は球をバットの芯で捉えた。

球はセカンド、ファーストの絶妙な所へと行った。

それを見ていたSSSメンバーは、

「なかなか、やるじゃない・・・」

「ゆりっぺさん音無さんは野球経験あるんですか？」

「いや、無いみたいだぜアイツ」

「日向君とは大違いね」

率直な感想を述べるとゆりは足を組み、キンキンに冷えた麦茶を飲んだ。

「It's my turn」

TKは英語を放つとバットを取り出しベンチから軽快なダンスで踊り出た。

「次、TKか・・・頑張つて来い！」

「Oh yes！」

（おい、コイツ目元に赤いバンダナ巻いてっぞ。どういつ事だ！俺達を舐めてんのか？）

キャッチャーはミットをややTKのボールゾーンギリギリへと構えた。

今度は負けじとピッチャーはさつきより球の速度を早めた。

カァン！！と音無よりでかい音がバツトより発せられた。

これはもう誰もが思った。

「スツげえ」

キャッチャーでさえも感嘆と漏らした。

そう、ツランホームランだ。

「何もかも謎だらけ……侮れないわね。てか何でバンダナしてるのにボールが見えるのかしら？」

「流石TKさんですね」

SSSメンバーは帰って来たTKを手荒く歓迎した。

その後は続き日向が壘に出た。

あつという間にもう7点の差が出来た。後は適当にアウトにし、守備交代した。

（まずい・・・こんな寄せ集めのチームに負けるなんて。だがこのチームは強打者が多い。一発逆転の手だってある筈だ・・・）

相手チームのキャプテンはかなり焦っていた。SSSチーム（相手チーム）を弱く見ていた、それが7点差の理由。

（7点差か……ここで俺が投げてアウトにすれば早めに試合は終了する）

ピッチャーマウンドに立ち、調子確かめる様に腕を回した。

「来おい!!」

野田は何故か殺気を放ちながらキャッチャーマウンドに居た。そういえばアイツキャッチャーだったよな、と顔をしかめてボールを握った。

そして、オーバースローで投げた。

「!?!」

パン！と見事に野田のキャッチャーミットに入った。

「ストライク！」

（今の一体……?）

バッターボックスに入っている相手はあまりの速さにバットを振れなかった。

（しびれるぜ……）

野田はボールを音無に投げ渡した。まだ手が痺れているのを我慢して。

「遊佐」

「何ですか？ ゆりっぺさん」

「あの球の速度どれ位かしら？」

「まあ、約100キロですね」

ゆりの疑問に竹山が代わりに答えた。

「100キロって、凄いですね。一体どうやって算出したんですか？」

腕立て伏せをしながら高松は問いかけた。

「企業秘密です」

「ストライク！バッターアウト！ゲームセット！！」

鬼壁の低い声が試合の終わりを告げた。

相手チームのキャプテンは膝ま付き、拳を地面へと叩いた。

何故なら、全てのバッターを打たせずスリーアウトにしたからだ。

第19話 Game start! Part 3

SSSチームは相手を翻弄。そのショックでもう目が死んでいた。渋々、その場を立ち去る相手。無様だった。

「弱い」

ゆりは蔑んだ眼で相手チームを見送った。

「凄いな音無、3連続バッターアウトなんてさ」

日向は音無を讃えると麦茶を飲んだ。

ちなみに、これは陽動隊が集めた物。クーラーボックスの中にはスポーツドリンク、炭酸飲料、様々な物が入っている。圧倒的に炭酸飲料が人気。

「Wonderful!」

ヘッドスピンをしながら音無を誉めた。

(TKって頭にヘルメットをせずにヘッドスピンするんだな・・・・頭痛くないのか? いやそもそもここ、地面だよな汚れないのか頭? 本当謎だなTK・・・)

音無は頭を悩ませながら緑茶を貰った。良くここまで飲料水を用意したものだ。

「竹山君次の対戦相手は誰かしら?」

「次は日本全国大会準優勝チームのピッチャーが率いるチームのようです。それと僕の事は『ク———』」

「全国大会準優勝チームか・・・・侮れないわね」

「全国大会って・・・」

日向は顔を真っ青に染めた。

「どうした? 日向」

「俺、ソイツと闘った事あるんだよ・・・」

「へー日向君やった事あるんだ・・・喧嘩」

「ちげえよ！」

「な〜んだ紛らわしい言い方をして」

何故か落ち込むゆり。

「喧嘩なんかやったらここに居ねえだろ！」

「それもそうね・・・・・・残念」

ボソツと最後に日向に聴こえない様呟いた。

「日向君」

ゆりは続けた。日向はそれに応えた。どうやらさっきの言葉は聞こえてはいないみたいだ。

「闘った事があるって言ったわね。どうだったの？そのピッチャー？」

「話せば永くなる。聞かない方がいいぜ」

麦茶を飲み終わるとどこか寂しい眼でペットボトルを見つめた。

どうやら何か因果関係があるみたいだ。

「出つつつつつつつたよ臭い台詞。気持ち悪いわ！日向君！何処かに失せて頂戴！」

「おい！ゆりっぺそんなこと言うなよ！しかも何だよ異様に長く使うなよちっちゃい『っ』！お前の方が気持ち悪いわ！」

「何ですって!?!」

「何か文句あんのかこんの野郎!?!」

二人の目から光線が出ている。実際にでないが・・・。

「日向君表に出ろや!?!」

「ここ表なんですけど!?!?!?!どうしたゆりっぺ頭可笑しくなったのか！尚更気持ち悪いぜ!?!」

「あんですって!?!何よその態度！私は監督よ！か・ん・と・く！!?!」

「へんだ。そんな事関係ねえよ！このヘタレ監督!?!」

「デメエもういつぺん言ってみい!!」

「おう何度でも言ってやるさ!!このヘタレ!!」

「駄目秀樹が!!」

「あゝあゝあゝ!?!それ言っちゃう!?!このマヌケ!!」

この二人の姿に皆呆れていた。

「遊佐」

「何でしよう音無さん?」

「この口喧嘩いつまで続くのか判るか?」

「判りません」

「速答かよ……」

SSSメンバーは馬鹿な二人をじつと観ていた。

これはこれで面白いかもしれない。

「ねえねえ音無君」

いつの間にか居た。案外陰薄いなど、思う。

「大山どうした?」

「あの二人どうやって停めようか?」

「さあ?」

くそつたれが!とか、へたれば!とかもう言いたい放題な二人。

「俺に任せろ……」

「野田君……!」

ここに勇者が誕生。さてあの狂暴な二人を止められるのだろうか。

「野田……」

勇者は歩き出した。二人を止める為に……。

「へたればいいさ!」

「お前はそれしか言えないのか自動再生機器が!」

「何ですって!?!」

最早もう二人は対立。

そんな場所に勇者野田が武器を持たず、ただあるのは素手。最悪

の場合それしか方法が無い（手を出すのは日向だけ）。

そして――、

「おい」

『ああ？』

物凄い殺気を放ちながら二人は野田を睨み付けた。

「すみません。何でも無いです……」

敢えなく撃沈。一瞬にしてヒットポイントが0になった。何も武装をしなかったからだろう。

その光景を観ていた二人は。

「阿呆だ……」

「……阿呆ですね」

「野田君……」

野田がその場を立ち去るとまたゆりと日向は言い合いを始めた。野田は適当にベンチの隅っこで悄気た。哀れだ。非情に哀れだ。仕方が無い。ここは俺が行くか……」

「藤巻君……」

また勇者が誕生。果たして二人を止める事ができるのだろうか（俺に何の武器も無え。有るのは拳か……）
覚悟を決めると二人の元へと行った。

「大丈夫なんでしょうか藤巻さん」

「藤巻君のことだよ。何か案が有るよ。きっと大丈夫」

（まあ、そうだよな。きっと大丈夫だよな）

ここ（SSS）に来てあまり間もないが藤巻は少なくともマシなヤツ、つり目で少々怖いが根は良いヤツ。希望がある。

「おい二人共いい――」

『ああ？』

藤巻の言葉を遮るととてつもない威圧を放った。

「ごめんなさい……………」

勇者藤巻は精神に一億のダメージ。

藤巻は勇者としての自覚が無くなった！

藤巻はLVが下がった！

その他色々下がった！

「藤巻君……………」

返事が無い。ただの屍のようだ。

屍はベンチの隅っこに行った。

「阿呆だ」

「阿呆ですね」

「藤巻君……………」

こうしている間にもゆりと日向は言い合いを続けた。

「お前の母ちゃんデベソ……」

「俺のお袋はデベソじゃありませんから！」

「あーら日向君何でそんな事解るのかしら？もしかしてマザコン？キモッ！」

「お前こそ何でデベソが解るんだよ！もしかして俺の事をストーキング？気持ち悪……！」

何だか哀れ、そんな眼で二人を見た。

「仕方が無いここは僕が………」

「待て大山」

また勇者が誕生とも思いきや音無が停めた。

「どうして？あの二人を止めなきゃこっちが何か恥ずかしいよ！」

まあ大山の言う事は間違っていない。

ここはグラウンド。仮にも野球場になっている。観客席に居るギヤラリーは次の試合が始まるまで適当に何かして過ごして居る。

何人かはトイレ。観客席では暇潰しにゲームをしていたり、カードゲームをして遊んでいる。

そこで何らかのトラブルが在ればそっちに注目する。仮にゲームやカードゲームをしていたとしてもこっちに注目する可能性が有る。夜に花火が上げればそこに皆が見る。それと同じ事。

「考えてみる大山」

「何を？」

「仮にお前が二人を止めに行つたとする。だが敢えなく撃沈。失敗。次にこのメンバーの中で誰かが止めに行く。これも失敗。大山、俺が何が言いたいかわかるか？」

「それってつまり、何をやっても無駄って事？」

「そう。さらにこう言う事も考えられる」

結弦は更に提案をした。

「無限ループ」

「無限ループ？」

無限ループ。遊。王で言うなら、もう面倒なのでWikiで見て下さい。

「飛ばしやがりましたね」

「飛ばしたな」

「飛んだね」

こうしている間にもSSSメンバー全員で止めに行つたが敢えなく撃沈。

（あれ？岩沢さんの姿が……。あああ！？皆を無視してギターを！？何やってんの！？しかも気付いてない！もしかして音楽

右足を思いっきり日向の急所へと振り上げた。
流石にこれに反応出来ず素直に喰らってしまった。

「ヒイ!!」

大山は顔面を両手で覆った。どうやら刺激が強過ぎたのだろう。

「日向さん……………」

「……………」

思わず二人は急所を押さえて地面に無惨に惨めに転げ回っている日向を見た。

皆は惨めにベンチの隅っこへ移動。お互いに慰め合っている。

（あれ？そっういや椎名の姿が……………）

辺りを見渡したが椎名は居ない。一体何処へ。

「日向君、私に逆らうところなる事を覚えておいてね」

踞りながら凄い勢いで首を縦に振るとゆりは納得した様に歩き出した。

第20話 Game start! Part 3・5

『お昼にしましょみんな♪』

という提案で現在、食堂に居るSSSチーム。

食堂は穴場だった。他の人達は皆外でお弁当を食べたり、遊んでいた。中には次の試合に向け練習をしている。

現在はSSSチームしか居ない。

「痛てててててて………」

「大丈夫か？日向」

男の急所を抑えながら嘆いているのは日向。大変な事にゆりの逆鱗に触れた為、こうなってしまった。
自業自得だ。

「ああ、ストレス発散しなければ良かったなあ……………」

「日向お前どれだけ貯めてたんだよ」

あれだけの事だ。キット物凄いストレスを貯めてたのだろう。

二人は券売機の所へ向かう。

向かう途中に大山がこっちに来た。

「あ、日向君もう大丈夫なの？」

心配な眼で大山は見た。

大体の所は顔を両手で覆っていたが状況を把握していた。

「んな訳無えだろ。たく本気で蹴りやがって……………」

ゆりの事を嘆きながらも券売機のタッチパネルを操作した。

「日向君、それ麻婆豆腐だよ。もしかしてゆりっぺに蹴られて可笑しくなっちゃたの？」

「そんな訳無えだろ。これ滅茶苦茶うめえんだぞ」

「やっぱり可笑しくなっちゃたんだ日向君」

そんな大山の言う事を気にせず、麻婆豆腐の食券を手にとった。

「日向君、考え治すんだ。君は自殺行為をする人間じゃないだろ。だから、だから――」

「大山、刑事になっている所悪いんだが別に日向が麻婆豆腐を食べる事で死にはしないだろ。お前が落ち着いて考え治すべきだろう」

刑事ドラマだか何だか分からない何処かの受け売りをする大山。

「だって、激辛と言われている麻婆豆腐だよ！それを食べる日向君はどうかしているよ！」

結弦と日向が以前麻婆豆腐を食べたが味は『激辛』では無く『美味』しかった。

これで麻婆豆腐は激辛では無い事が解った。

「そつえばさ日向」

「何だ音無」

「え！？無視！？」

取り敢えずうるさい大山を置いて結弦と日向は話をする。

「『ストレス』って言ってたけどお前ゆりにどんな事をされたんだ？」

「そうだな・・・、挙げればキリが無いな・・・」

暫く悩み、言おうとした時、

「空いてるんだったらここに座るけど良いかしら？」

ゆりが来た。

「あ、あんた、何故麻婆豆腐を．．．まさか、頭が逝かれたの？」

「イカれていねえよ！お前これ食った事あんのかよ！旨いぞ！」
また始まった。

「え？美味しいの？日向君？」

「ああ、かなり美味しかったぞ大山」

この禍々しい赤色、その赤色が豆腐にまで浸食。

この麻婆豆腐を見たら誰がも『辛い』と思うだろう。

もしかしたら、それが起源なのかもしれない。これぞ風評被害。

「え？美味しかったの音無君」

「ああ。ゆりも食べてみるよ」

「何で音無の言う事を信じて俺の事を信じないんだよ！」

「じゃあ、一口．．．」

ゆりは日向が右手に持っていたレンゲを取り上げると、麻婆豆腐を一口分掬った。

「あ！ゆりっぺ俺の麻婆豆腐——」

「ハム．．．」

日向の言う事を右から左へと流すと口へ運んだ。

「——！？」

口に入れた途端、いつぱいに広がる風味、程よくとろける豆腐、程好い旨味、そして全体的に広がる風味がそれらを全て優しく包み込む様な感覚。

これらをゆりは一言で形容する事が出来た。

「お．．．おい．．．し．．．い」

美味しい。

これでしか形容出来ない。いや、仕様がない。

「へー！ー！？」

T
o
B
e
C
o
n
t
i
n
u
e

第21話 Game start! Part 4 (前書き)

日向

「おい大山デカイ声だすなよ」

大山

「だって、あの激辛麻婆豆腐って言われてたのが『美味しい』な訳ないよ!」

ゆり

「美味しかったわ。麻婆豆腐の食券買って来よう」

大山

「江ーーーー!?」

音無

(そういえば椎名……………居ないな……………)

日向

「ほら、食べてみるよ大山」

大山

「え…………でもそれって…………ボソッ」

日向

「あ?何言ってたんだ大山聞こえないぞ」

大山

「だって、それって、間接キス……………」

日向

「は？何言ってるんだよ大山」

大山

「それって、ゆりっぺが食べたレンゲだよね」

野田

「ぬうううううあああああにいい！！ゆりっぺのどうう！？」

日向

「おう！？いつの間に！？」

野田

「ゆりっぺって聞いて呼ばれて飛び出てジャジャジャーン！！」

大山

「うわ、古っ！」

日向

「何勘違いしてんだ？大山、それに野田？」

大山

「え？」

野田

「は？」

日向

「お前らも食いたかったのか麻婆豆腐？」

大山

「違ふよ！」

野田

「勘違いをしているのは貴様だ！！」

音無

「いつになったら本編始まるんだ？」

第21話 Game start! Part 4

誰だか知らないが麻婆豆腐は『激辛』では無く、『美味しい』という事が判った。

「なあ、ゆり」

「何？音無君」

結弦はゆりにある疑問をぶつけようとしていた。
試合終了後に抱いたある疑問を。

「何で椎名が居ないんだ？」

そう、ずっと食事中でも気になった事。

「じきに解るわ」

（どういう事だ？）

また新たに疑問が浮かんた。

食事ならわざわざ居なくなっても良い。食堂で皆、集まり食べているのに。

独りが良いのならそれはそれで別だが。

「ジジ・・・ジ・・・ジジ・・・ジジ」

と妙に不快な音が結弦の耳に入っていた。

辺りを見回したが音の発生源は分からない。すぐに耳に入ってきたのだから、せいぜい、すぐそこに在る事は間違いない。

「はい、こちらゆり」

ガチャと手慣れた手付きでトランシーバーをポケットから取り出した。

トランシーバーは大体I p h o n e位の大きさ。お手頃だ。

『ゆりっぺさん、椎名さんのある作戦がうまくいった様です』

「そう、解ったわ」

『こんな事をしてよろしいのでしょうか？』

（え？）

「良いに決まってるでしょ。オーホッホッホッホッー」

『ゆりっぺさん、悪役の様ですよ。いや、むしろ悪役ですね』

「報告有り難うね遊佐」

ガチャと制服のポケットにしまうと、疲れた様に背伸びをした。

「こんな事ってゆり、どんな事だ？」

「相手を腹痛にする事よ」

「はい？」

「椎名さんに頼んで貰って腹痛にさせたのよ」

「はい？」

何を言っているのか解らない。

だが、外が騒がしい。

「おい！！速く出る！！漏れる！！！！」

「つぐ！！速くしろよ！！！！」

「ああああ！？こいつ。。。漏らしやがった！？」

「汚ねえ！！！！」

「も・・・う、駄・・・目・・・後には頼・・・ん・・・だ」

「馬鹿野郎！！あと、後、ウグ！？」

「辞める！！そんな寸げハウ！？」

「あう、もう……駄目……」

「あゝあゝあゝ！！諦めるな！！うゝ！！？」

「あ、空いた！！」

「ゆり……これって……」

目を疑う様な光景が目広がっていた。

男共がトイレの前で異様に群がっている光景を。

こつち（食堂）のトイレは現在、誰も居ない。だが、今すぐ漏れそうだったら仕方ない。

動いたら。。。が漏れる。

待てば漏れる。

どっちもどっち、漏れてしまう。動くより待った方が漏れる確立が減る。

「ええ、そうよ。音無君が考えている通りよ」

「お前、校長の『堂々と戦って下さい！』って言葉忘れたのかよ！？」

「堂々としてるわよ」

「何処がだよ！？」

「手紙で『コレハ呪イノ手紙デス。約一時間後デアナタ達ハ腹痛二ナリマス。死神。』って送ったわ」

「スポーツマンシップは何処行った！？」

「べつ々に。そんなの関係無い！！それに校長は『スポーツマンシップ』なんて言ってる無いわ」

「っぐ」

確かに校長は「正々堂々と戦って下さい！！以上！」しか言っていない。

だが、スポーツマンシップに則って、何て一言も言っていない。多少、屁理屈かもしれないが、ゆりの考えだろう。

「さてと、次は最終決戦か……………」

T o B e C o n t i n u e d

第22話 Game start! Part 5

準決勝の相手チームはゆりの策略によりダウン。他のメンバーで代用しようとしたが、先手を打たれまたもや腹痛にされる。

そんな中でSSSメンバーはのんびりと休んでいる。

「ドラドラ!」

「げ!? またひさ子の一人勝ちかよ……」

「Oh、流石ひさ子姉さん……!」

ひさ子、藤巻、TK、はいつもの様に麻雀をして遊んでいた。

「TKってあたしの事を何で『ひさ子姉さん』って呼ぶんだ?」

「そのAne^{アネゴ}gohada^{ハダ}が、Beautifulだからさ」

と訳の解らない事を口にする。

（あれ? 岩沢の姿が……? ま、どーせギターでも掻き鳴らしてんだろ。あいつ、いつも、いつも、休憩時間でも弾いてるからな）

予想通り、ひさ子のカンは当たっていた。

今度はアコーディオギターで激しく掻き鳴らしていた。いつもなら深紅色でカッコいいギターだが、今回は古めのギターだ。

岩沢なら、いつも楽しそうにギターを掻き鳴らしているが今回は何故か顔をしかめて弾いていた。

（…？ おかしいなあ。いつもならスッキリするのに……、何だ？何が、何が、足りないんだ？）

アコーデオギターを大事そうに専用のケースに入れると、いつもの深紅色のギターを取り出した。

（椎名……何処に居るんだ？）

食堂にはSSSメンバーしか居ない。だから見つけるのは簡単
と想ったが案外ここは広い。そう簡単には見つけられない。

（ゆりの奴、椎名に押し付けやがって アイツが可哀想じゃないか）

結弦は誰も居なそうな二階へと足を運んだ。

「ゆり約束通り、奴等を腹痛にさせたぞ……」

「御苦勞様。はい約束のこれ」

と、椎名に何かの人形を手渡した。

（何してんだ？）

「本当にこれで良いの？椎名さん」

「勿論さ」

まさに速答。

「椎名さん、気になるんだけどどうやって腹痛にさせたのかしら？」

「何、簡単な事だ。朝顔の種を粉末状にして水筒の中に入れた
それだけだ」

朝顔は強力な下剤になります。是非、読者の皆様もむかつく野郎がいたら朝顔の種を何かしらの形でさりげなくお茶に入れたり、食べ物に入れて相手に最高の苦痛と下痢をさせましょう。勿論、良い子は真似しないでね。悪い子はしても良いけど、ちゃんとやっていいのか悪いのか判断をしてね。

（げ　マヂかよ……！？）

物陰に隠れ、こっそりと盗み聞きをしている結弦。

だが、驚く所はそこでは無い。

椎名はどうやって粉末状態の朝顔の種を入れたのか、そして気付かれずにどうやって帰って来たのか。

まさにやる事が忍者みたいだった。

「その影に隠れている奴、そろそろ出て来たらどうだ。私を欺けられるとも思っているのか？」

「え？誰か居るの？」

椎名は背を向けて結弦の居る所へと言葉を発する。

ゆりでさえも前を向いていながらも結弦の存在に気付かない。
「ハア」と渋々と影から出た。

日向は雲が一つも無い空を見てポーツとしていた。
向かい側には大山が寝ている。

『来週、私の誕生日なんですよ!』

『来週……って球技大会じゃん。お前、何だよかなり運が良いな』

『それってどういう意味ですか!?!』

『ハハハ。冗談冗談。で、誕生日プレゼント何が良い?』

『ん　　ドラ。もん』

『今すぐ机の引き出しの中に入ってタイムマシンで二十二世紀へゴーしてこい』

『冗談ですよ』

『じゃあ、何だよ』

『球技大会ですよね……、来週』

『ああ。そうだが』

『じゃあ、』

「うわあああああああああああ！？」

「ぬうおう！！？どうした大山！？」

近くで寝ていたと思ったら急に大袈裟に大声を上げた。
「ま……………」

震えながら重い口を開けた。

その震え様は、生まれたての子馬が漏らしそうな震えだ。

「ま？」

「松下君が真つ二つになつっちゃたんだよおおおおおおおお
おおおおおお！！！」

「大山、今すぐ精神科病院へGOしろ。そして松下五段はピンピン
して肉うどんをあっちで食ってるぞ」

「竹山君、例の調べたかしら？」

「勿論です。それと僕の事は『クライスト』とお呼び下さい」

「皆よく聞いて!」

SSSチーム全員を食堂の二階に通じる階段に集めた。

「次の相手は相当手強いわ。だから心して闘って頂戴!」

あのアホなゆりでも警戒する相手。そのチームは、

「日本全国草野球大会優勝チームの一人が居るわ。だから絶対に気を抜かないで」

これはかなり危機感を持たなくてはならない。なんと言っても野球経験者は一人しか居ない。

ゆりの部で集めたチーム、SSSは強い。だが、それは相手が滅茶苦茶弱いから勝てた。今度の対戦相手はそれ以上、勝てるかどうかは分からない。

「えーーーーー!?!」

「勝てるのかよ……………」

「浅はかなり……………」

「椎名つちはいつもそればっかだよな」

「Oh no、マンマミーア」

どよめき合って段々自信が無くなってしまふ。
そして集団心理により更に自信が無くなってしまふ。

「貴様らああああああ！それでも男かああああああ！！」

「野田、あたしは女なんだけど」

「ここまで勝ち上がったんだ！！自信を持って貴様ら！！」

ひさ子の言う事を無視し続ける。

「いや、ゆりが相手チームを腹痛にさせたんだが……………」

「音無いいいい！ゆりっぺがそんな事するはずが無からう！！体調管理も実力の内！きつと相手は賞味期限が一ヶ月前のキムチを食べたんだろ……………！！」

「いや、それは作者だ。野田」

「そうなのか？音無」

「皆も気を付けろよ。ちなみに作者は『臭いからして大丈夫だろう。よし、食べよう！』と次の日の朝、腹を壊したそうだ。臭いが大丈夫だからって食べるなよ日向」

「俺はそんなマヌケじゃ無えよ」

読者の皆様も気を付けましょう。

「とにかくだ！！俺達は格段にパワーあっぷしている！自信を持てええええええ！！」

「一回の試合だけで解るのかな？みゆきち」

「わ、私に聞かれても……………」

野田は黒い棒を振り回して何かしようとしているが何がしたいの
か良く解らない。

「野田君の言う通り、貴方達はここの食堂で食べ物を食べた事によ
りパワーアップを成し遂げたはずよ！」

「げー？」

「どうした？音無？」

「俺……………弁当だよ……………」

「いや、大丈夫だろ」

そんなこんなで試合――

「互いにそれぞれ解っていると思うが『表』、『裏』を選んでもらう」

鬼壁は低くも芯が通っている声で両者に声を掛ける。
様子からしてまだ催眠術は解けていないようだ。

「じゃあ、私は表」

「俺らは裏で頼む」

キンと金属音を立て、廻る百円玉。重力に逆らう事も無く鬼壁の手に戻って行く。
結果は、

「よし、裏だ！」

「何言ってるんだ。これは表だ」

百円玉を見てみると絵柄が描かれている。

「ハア？何言ってるんだよ鬼壁、頭が可笑しくなったか？」

「貴様、硬貨は全国共通かどうかは知らんが絵柄が在る方が表。『100』と書かれている方が裏だ」

殺気を放ち、更に相手を睨み付け相手を金縛りに陥らせ最後にこう言った。

「頭が可笑しいのは貴様だ」

「すんませっしたー！ー！ー！」

全力で土下座をすると、後からでも分かった。
ゆりが満面の笑みを浮かべている事を。

「土下座をしている奴は放っておいて、試合を開始する。それぞれ所定の位置に着け」

SSSチーム全員は円陣を組み合っていた。

『……………』

「ちょっと誰か言いなさいよ」

「んじゃ俺が言うよ」

「よろしく、音無君」

指示を受けると大きく息を吸い、吐いて、もう一度息を吸いそして――

「バラク・オ。マ！」

「いや、人名じゃなくて……………てか何でギャ。マンガ日和のネタを真似ているのよ!」

「まあ、それで良いんじゃないね?」

「んじゃあ、せーの」

ゆりの意見を見無視し、結弦は掛け声を掛ける。

『バラク・オ。マ!!!』

「何言ってるんだ?あのチーム」

「さあね」

「じゃあ、行つて来い!音無!!」

「おう!」

バットの柄を握るとバッターボックスに入った。

「プレイボール!!」

低い声が試合開始の宣言を示した。

（全国大会優勝チームか……侮れないな）

ピッチャーはそれほど背は高くはない。大体、大山が少し大きくなっただろう。

腕を回すと大きく振りかぶり、勢い良く投げた。オーバースローだ。

速い。

「ボール！」

ボールはやや下目の内角だった。

わざとボールゾーンに投げたのは様子見だろう。

（速いな……）

キャッチャーはボールをピッチャーに投げ渡すと元の体制に戻る。ピッチャーは肩の調子確かめるかの様に腕を廻した。

（ボール球を見切れるとはな……コイツ、出来るみたいだな。次の合図はつと。おいおい、『本気』を出せかよ……つつたく、ま、俺は前半戦しか出ないけどな）

心の中で愚痴ると振りかぶり、ボールを投げた。

（速い！？）

さっきとは全然速さが違うボール。結弦は早めにバットを振る。

キーン！と音がするもボールは真後ろのバックネットに飛んだ。
結果はファール。これでワンボール、ワンストライク。

「ほーう、俺のボールに当てられたのはお前が初めてだ」

「それは誉め言葉なのか？」

「勿論、誉めてるさ。さあ、話は終わりだ」

適当に話を切ると、大きく振りかぶって投げた。

バットを思いつきり振るもボールに当たらず空を切る。さっきよりも更に速い。

「ストライク！」

ツーストライク、ワンボール。後、一球が最後のチャンス。

速くなって行くボール。まるで相手は球遊びをしているかの様に
余裕の顔をしている。

（まずいな……）

「さあ、当てられるかな？」

「当ててみせる…！」

「意気込みは充分の様だが、当てられなきゃ意味が無いっぜ…！」

最後の掛け声でボールを投げる。

（げ！？）

るからか！いや、でも関係無いか……）

少し前の試合でもホームランを売っている。バンダナが有っても無くても関係は無いだろう。

とぼとぼ帰って来るTK。即座にゆりに謝った。

「Sorry, Ms. Yuri. 面目無い……」

「良いわよ、仕方無いわ。あのボールだもの」

「うん、そうだよTK。仕方無いよ」

「Yamaちゃん…Thanks」

（TKって大山の事を『やまちゃん』て呼ぶんだな）

別の所に感心をしていると、

「よし、次は俺の――」

「バッター交代！」

「えええええ！？ゆりっぺ俺の出番は！？」

「あんたは暫く出番無し！」

絶望的になった日向を放って置いて、代打をゆりは決めようとした。

（さて、どうしようかしら…高松君は意外な所で活躍しそうだし、

関根さんは……論外ね……）

暫く考えた末、代打は決まった。

「遊佐、行つて頂戴」

「ゆりっぺさん、私体力は有りません。それに下手したらヒットも打てません」

「ゆりっぺ、俺の方が絶対良いだろ！」

「あんたは黙つて！」

観念したかの様にベンチに戻り、炭酸飲料を貰つ。

「遊佐、耳を貸して」

ゆりは他の皆に聞こえない様、遊佐にある作戦を告げる。

「解りました。ですがちょっと恥ずかしいですね」

無表情ながらも少しだけ頬を赤らめる。

「絶対に上手く行くわ」

ハアと溜め息を吐くと細いリボンで縛つてあるツインテールの髪をほどいた。

髪は風に逆らつ事は無く、ゆっくりと揺れる。

「遊佐」

「何でしょう音無さん？」

「そっちの方が似合ってるぞ」

「放って置いて下さい……」

恥ずかしながらもバットを手に取り、バッターボックスへと向かった。

（おいおい、何を考えているんだ？）

キャッチャーはミットの構えて遊佐を観察した。

（柄は短く持つてるか……、なら外角やや高めの方が打ち取り安いな）

この方法は結弦、TKをも打ち取らせた戦法だった。

相手の大地の踏み込み具合、バットの柄の持ち方、そして身体の向き具合、これで大体は打ち取り方法が判る。

TKだったら柄を長めに持っている、踏み込みは内側へ向いている。これだったら内角低めの方が打ち取り安い方法。

（今度はそう打ち取るか……）

ピッチャーはミットの位置を確認すると、振りかぶり投げる。

（『良い？まず、柄を短めに持って。相手がボールを投げたら即座に柄を長めに持って頂戴。そしたら打てるわ』）

（成る程、ゆりっぺさんは案外頭が良いみたいですね）

遊佐は作戦の内容が恥ずかしい訳では無い。ただ打って目立、その行為が恥ずかしい。それだけ。

即座に柄を長めに持ち、体制を整えるとキーン！と良い音がする。

（な…！？）

（打たれただと…！？こんなか弱そうな女の子に？）

ゆりが用いた作戦は心理も利用している。遊佐が打てたのは球の速度が少々遅めになっていたからだ。

打ったボールはサードラインのギリギリ越しそうで越さない所に勢い良く飛んだ。

「フェア！」

その言葉を聴く前にもう走り出していた。

だがサードの対応は早く、一塁までが限界だった。

第23話 Game start! Part 6

「遊佐、スゲー……」

「いいぞ遊佐！！カッコいい！！」

恥ずかしながらもベンチに居るメンバーに手を振る遊佐。

（何でしょう……この感覚、胸がスツとするこの感覚……）

風によって乱れる長い髪を整えると少しだけガッツポーズを皆に見せた。

こんな事するのはメンバーと自分自身が驚いた。そんな中に一人の女子が一塁ベースまで来た。

「……遊佐」

「椎名さん何か御用でしょうか？」

いつもしている黒いマフラーから何かを取り出した。その行動にいたって普通の質問をする。

「それは四次元ポケットでしょうか？」

「いや、マフラーだ……これは音無からの差し入れだ。受け取れ」

取り出した何かを遊佐に渡す。

「『KEY珈琲』……砂糖入りですか。貰っておきます」

KEY珈琲とKeyコーヒ、この『Key』というメーカーは二つの珈琲を出している。

外見の違いは多少ある。だが、中身も違う。遊佐が貰ったのは香り、風味、味、この三つを楽しむ飲み物だ。一方の『Keyコーヒ』は苦味のあるコク、味、『KEY珈琲』とは違う風味、もう一方の珈琲とは格段と違う代物だ。

中には『KEY珈琲』でも砂糖入りとブラックというタイプもある。

ちよつと背伸びをしたいタイプはブラック。別にどっちでも、という人は砂糖入りを選んだ方が良さだろう。

分かっていると思いますが、『KEY珈琲』ブラック、砂糖入り、『Keyコーヒ』、味はこの小説オリジナルです。ご了承下さい。

「音無によると飲むのは今だそうだ」

「そうですか」

「あ、ゴミは私が捨てておこう…安心して飲め」

「今、試合中ですよ？今飲んでも良いのでしょうか？」

「良いのではないか？」

プシュと蓋を開けると飲み始めた。

（何、試合中に飲み物飲んでんだ？）

周りを気にせずゴクゴク飲む遊佐。急いで飲んでいるみたいだ。

（ま、関係無いか……試合中でも熱中症になるからな。水分補給は大切だ…うん）

肩の調子確かめ、足首を回す。投げる準備は整った。後は相手をアウトにするだけだ。

「さてと、俺の出番だぜ」

「藤巻君、頑張つて来てね！」

「おう！」

大山から声援を受けると堂々とバッターボックスに向かう。

照り付ける太陽。俺はベストを尽くした。

辛い練習、バッティング、守備、攻撃、俺達は強くなった。後は練習通りに…いや、俺達は勝つ。絶対に。

「お前、野球上手くなったよな」

「……？」

「名前はさ、最初はさ、キャ。テン翼の小次郎かと思ってたよ」

が二塁まで行けるチャンスを作った。

状況はツーアウト、一、二塁。微妙な所だ。

次はひさ子、期待はできる。

（あの夢……久し振りに見たな。アイツ、天で元気にやつてかな？）

ベンチから見る限り無く蒼い、蒼い空。野球をやるには最高の条件の内に入る。

（アイツ、元気　だよな）

そんな空を見上げる一人の少年。

雲一つも無い、綺麗な空。夏の季節に近いせいか、いつもより少し暑い。だけど野球をやるには絶好の条件。

（あれ？岩沢……？ああ！？まだギターを弾いていやがる！！ちょっとは俺達を応援して下さいよ！）

蒼い空の下でギターを無我夢中で弾き続けている岩沢。今まで聴いた事の無い曲、激しく、楽しそうで、無邪気、何か――

（……ユイみたいだな……てか、何でユイが出て来んだよ！）

心の中で突っ込みを入れると再び目を試合の方へ移すと状況はツーアウト、一、二、三塁。満塁だ。

「ふうん、次は……俺だな」

野球とは関係無い殺気を放つとバットを持って行った。

（あ？何だコイツ）

キャッチャーは野田の姿を見て驚いた。

バットは右手だけで持ち、やる気が無い様に腕をだらんとさせ、体は横を向かず真っ正面に向いている。これでは打ちにくい体制だ。

「野田、何やってんだ？」

「駄目だなアイツ」

「アホだ……」

ベンチでいつもの様に呆れているメンバー。

（作戦？いや、それは無いか………な？）

少し焦り出しているピッチャーは頭を回して眠気を覚まそうとしていた。

土を足で少し蹴るといつものフォームで投げた。

ぱしっとグローブからキャッチ音が聞こえる。ストライクだ。それに対し、野田は何のリアクションを行わない。

（何だ？）

「おい！野田本気出せ！」

ベンチで仲間の声を聞かず、そのまま動かない。

ボールをピッチャーに投げ渡すと元の体制に戻る。

「おい」

「あ？」

自分より下の声に反応するとそっちに向く。

「お前、どういっつもりだ？」

「……」

野田は無視すると前を向く。

（……無視か）

「どうした、お前の球はその程度か？」

「はあ？」

「お前の持つてる力を俺にぶつけて来いよ」

（ますますやりたい事が解んねえな…）

相手の挑発に乗らず、少し頭を回す。挑発に乗る事で何か秘策があるかもしれない、心理戦だ。乗ったら乗ったで相手の思うツボに入るかもしれない。だが、アホな野田に何が出来るのだろうか。

普段はゆりの誘い、命令、これらが無視した者は野田による鉄槌が降りかかる。

いつも、いつもゆりに暴力を受けても決して彼女を一度でも嫌い

にはならなかった。

(コイツ……)

少し苛つき、いつものオーバースローで投げる。

ズパアと結弦程ではないが良い音が野田の耳に届いた。

(ほおう、ま、これでアイツがホームに戻って来れるな……)

「へ、デカイ口を叩いたと思ったらこの程度かよ!」

勝ち誇るとボールをピッチャーに投げ渡す。

「なあ、知ってるか……」

「は？」

突然の問いに着いて来れないキャッチャー。そんなキャッチャーを無視し、続ける。

「足が遅い奴が、どうやったら確実にホームベース(ここ)に戻って来れるか」

ますます、解らない。だが、

「!?おい!速くこっちに投げろ!」

「!」

気付いた時にはもう、遅かった。

何故なら、遊佐がホームベースを踏んでいたからだ。
ベンチから歓声、観客からの歓声、何かがスツとした気分だった。

「サード！どうして気付かない！！」

「すみません！いつの間にかホームベースに……」

野田は遊佐の特性と心理を利用しただけだ。

敢えて、謎の行動をして注意をこちらに引き付ける。それだけ。

だが、それだけでは遊佐がホームに戻って来れない。

そこで遊佐の特性、『いつの間にかそこに居る』。以前、野田が旧校長室で汚れた黒い長い棒を磨いていたの遊佐に気付かなかった。磨いているのに夢中になっっているせいかもしれないが、入ってくる次点で遊佐の存在に気付かなかった。野田がいくらアホでも気付く、だが遊佐は見事に気付かなかった。

「まあ、過ぎた事はしょうがない。次は気を抜くなよ、例え女子だろうがな……」

頭をかくと少し背伸びをする。

ホームベースを踏み、一点を勝ち取った遊佐は取り敢えずベンチに戻りたかった。

「はい、ゆさゆさ」

と関根が何かを渡してきた。

「オロナミンZ？」

T
o
B
e
C
o
n
t
i
n
u
e
d

第24話 Game start! Part 7

(くっそ……ゆりっぺえ……)

バッターボックスに入っている事を忘れて膝ま付いている野田。
悔しながらもゆりの名前を想う。

そんな野田に影がこっちに向かって来る。

「ほら、何やってるの？立ち上がりなさいよ」

ゆりだった。

「……ゆりっぺ、すまない……」

「点を取った以上、勝てる可能性が有るわ。だから立ち上がりなさい」

いつもなら、殴るか背負い投げをされるが今回はそんな事はしなかった。

精神的なダメージが残っている以上、追い打ちは駆けない方が良い。

「ほら、野田お前俺のキャッチャーだろ？この後、アイツらにお前の力を見せ付けてやれよ」

「音無い……」

野田は立ち上がると結弦の方へゆっくり向かう。

「……、俺はお前のキャッチャーなどでは無い。ゆりっぺのハートを受け止めるキャッチャーだ!」

「は?」

「ちよつと野田君……」

何か殺気が……と結弦は靈感なぞ持っていないが後ろからでも分かる様な禍々しい物が…。

「何だゆりっゴヴえ!?!」

ゆりの方へ喜んで反応するも、ボールが顔面へと当たる。

さっきの事が気に召したのだろう。ボールの速さは相手ピッチャーを上回っていた。

いつもの事だ、と呆れるもメンバーは守備の用意を進める。

(俺より……ゆりの方がピッチャー向いてるだろ……)

胸にしまい、緑茶を飲み干すとピッチャーマウンドへと向かう。

「来おい!!」

また殺気を放ちながら居る野田。殺気は野球とは関係無いがその心意気は良いだろう。

殺気は隣に居るバッターにも届いており、ビビっている。

「バッタービビってる!!ヘイヘイ!!」

と相手ベンチ側から声が耳へ入っていく。

「デメえ！仲間に言う事がそれか！？」

仲間がビビっている事実は変わり無い。ビビっているだけでは試合にならない。試合にするには野田の殺気に打ち克つ事だ。

（ありがとな野田。これで打ち取り安いぜ！）

いつものオーバースロー。素直に野田のキャッチャーミットへ吸い込まれていく。

「は、速！？」

ズパアと良い音が響いていく。

最初は様子見のつもりだったのだろうがもう遅い。
ここから結弦の勝ちパターンにはまる。

「ストライク！」

低い声が鳴り響く。

（あ痛ててて……）

じわりじわりと浸透してくる痛みを耐えて結弦にボールを投げ渡す。

結弦には野田が顔をしかめているのが分からない。顔をマスクで覆っているからだ。

「どうした！貴様の球はその程度か！！」

「んだと！？この！！」

いとも簡単に野田の挑発に乗るとさっきよりも速く振りかぶる。

「へえあ！！」

謎の声を出すもバットにも掠りもせず、ズツパア！とグローブから音がする。

「ストライク！」

「まだまだ！貴様はその程度か！！！！」

構えていながらボールを投げ渡すとさらに挑発をする。

「こっつの！！」

ビシュ！と腕から空気の壁を裂く様な音が結弦にも聞こえる。
さっきよりも断然に速い。ズパア！！とまた良い音がする。その
代償としてさらに痛みが襲う。

あまりの速さにバッターは反応できず、そのままバットを構え立ち尽くして居た。

「ストライク！バッターアウト！」

「すまない……小枝……」
こえた

「良いのよ。過ぎた事だよ？気にしない気にしない」

「お前、優しいな……」

「あたしはいつも優しいよ」

小枝と言う人は思いつきり笑顔で返す。

「小枝……」

「なあに？」

「笑顔作るの下手だな」

「ごめん……」

笑顔を作るのは下手だったガツカリする顔は上手いみたいだ。

（あつ！？、可愛い……！ガツカリした顔可愛い！）

第二者は全く歯が立たず、すぐストライクにされた。

自分の不甲斐なさにショックを受け、項垂れたままベンチに戻って行く。

「んじゃ小枝、行つて来るわ」

「気を付けてね」

バットを持ち、やる気が無さそうにバッターボックスへと向かう。

（あ、あのピッチャーか…、油断は出来ないな……）

気紛れにピッチャーマウンドの土をズサズサと踵で弄ると覚悟を決める。

相手はかなりの実力者だ。生半可な気持ちでは勝てない。

「来おい！！」

また殺気を放つとミットを構える。この回を決めれば次の回で攻撃をする事が出来る。

またいつものオーバースローでボールを投げる。

（くおっ！）

バッターの願いは届かず、ミットの中へ吸い込まれていき良い音がする。

「ストライク！」

（あ痛てててて……）

「お前、スゲえな。こんな良い音は滅多に出ないぜ」

並みのピッチャーは大抵音が無い。パンツ、位しか音が出ないが結弦はかなり音が出る。ボールのコントロールとセンスが良い証拠だ。

「誉めているのか？」

「勿論さ」

野田は相手ピッチャーの言う事が解らなかった。
何故、敵なのに誉めるのか解らない。

「さあ、来いよ！」

遠くからでも分かる様な感じがする。もう覚悟を決めるしかない。

（期待に答えなきゃなっ！！）

力強く大地を踏むと思いつきりボールを投げる。

（いける！）

ボールは完全にバットの目前に、誰もがこれは打たれたと思ったが。

（な！？）

キン！とバットの芯で捉えたが、ボールは真後ろへ。

元々運動神経が良いのか、鬼壁は顔の前に来たボールを余裕で首を困った様に傾げ、避けた。

（ボールが……、真後ろ！？）

滅多に観れない光景だった。何故なら、

（不味いな…、ボールが真後ろに行くっていう事は… タイミングが合っているって事だよな……）

「ファール！」

前に日向と会った日に言っていた事だ。

何でだ？、と言いついたらそこまでは聞いていないゴメンと言っていた。本当にこんな事起こらないよな、と思ったが今日身を持って思い知らされる事になる。良い機会だ。学ぶ事は良いことだ。次のボールを野田に渡される。恐らく次で決着がつくだろう。

（……、俺こんなにわくわくしたのは初めてかもな…。でも、打つてやる！）

少し足元の土を蹴る。

大体のバッターはそんな行動はしばしば眼にする。

（打ち取れるか…俺？）

肩を少し回す。そして覚悟を決める。

（さてとやりますかっ！！）

いつもとは違う行動を取る。それは――

（サイドスロー！？）

あの時、少し本気を出したサイドスローだ。結果的に日向に打たれたが十分速い。

あの時と今回は違う。

（打てる！）

素早く足を踏み込み、ボールを見据え、後はバットを振るだけ――

キン！

（打たれた！？）

（くっそぉ……）

誰がどう見ても文句無し。ボールは高く翔び、高さをキープ。ホームランだ。センターに差し掛かった所、一人の女子が松下五段に全速力で近付いて行くのが判った。

「松下ああああ！背中を借りる！」

まだ諦めていない者が居る。

「椎名つち！？」

松下五段は反論しようとしたが椎名がすぐそこまで来ている。

「よし、来い！！」

もう何がどうなっても良い。要するにボールが取れば良い話。椎名は背を向けた松下五段に勢い良く足を踏み込ませる。ビルで言うところと五階建て。そんなボールに椎名は、

「とう！」

一瞬で追い付いた。周りの選手、観客が啞然とした。

一瞬でボールに追い付けたのは松下五段の足腰がしっかりと土台としての役割を果たしていたからだ。

前宙を何度かし、しなやかに音を立てず着地。パフォーマンスは良いが肝心なのはボール。

カッコいい所を見せた所でボールが無いというのは問題外。しっかりキャッチをしていなければならない。

審判が椎名に駆け寄る。ボールを確認する為だ。

「これで文句無いだろう……」

とグローブの中身を見せると見事にボールが入っていた。

「アウトォ！」

ワァアア！と野次馬共が騒ぎ出す。それ程のスーパーファインプレーだ。

「スリーアウト！チェンジ！！」

第25話 Game start! Part 8

「はっ、勝てる訳無えじゃん……」

あ、ひなっち先輩……

それに何かちよつと苛つくなゝあの……？あれ誰だっけ？えゝと確か生徒会副会長の……、直江？那須？那覇？鍋？な……何だっけ？

しかもメツチャどや……何だっけ？えーと、テレビで良くやってる——あ——もういいや——！

『生徒会チームを結成しました』

とか何とか言って……しかも野球レギュラー？勝てる訳無いじゃん！

あゝあ、どうしようどうしようあたし動けないし寝たきりだし立てないし走れないし車椅子だし打てないし——

あれ？

あたし……立ってる……？

え？あれ？え？何？あたし、あの事故で動けないのに……

あ！夢か……

そうだもんね、現実のあたし動けないもん。神様って酷いよね……

……あたしの幸せ全部……奪って行ったんだ……

初音ちゃんに『神様』信じてるって言ったけど、あたし……、

4 / 3 は信じていないんだ…

あ！間違えた！3 / 4 だった！

4 / 3 って過ぎてんじゃん！あは

でもこの夢……前に見た気がするな……、デジャブ！？

でも今のあたしは無敵！最強！歩けるもん！立てるもん！走れるもん！

あははは あたし……でも何かな～寂しいな…

というのは置いといてつと！くよくよしても仕方無い！頑張ろう！

え～と、周りのメンバーは……ひなっち先輩と、音無先輩と……

あ！？

何！？あの人！？凄！！何で箒を人指し指一本で支えられるの！
？しかも微動だにしないなんて……凄！！今度から師匠って呼ばせて下さい！名前分らないけど……

後は……何か、はーみーみたいな女子が三人と、後……！？

何でデッサン力持ってるのあの人！？銃刀法違反だよ！しかも地面に何か描いてるし……何で？でも悪い人じゃなさそう

えーと、これで全員あたしを含めて八人……！あ！少ない！あと一人少ない！どうするの！？

確か野球って観てたけど（テレビ）…ま、大丈夫だよな？

よし！こういう時は決め台詞を言っただよな！あの…えーと生徒会の誰かさん！覚悟して！！

『頭洗って待つといて下さい』

「へっ！頭洗って待つとけやア！！」

ああああ！？あたしこんなキャラじゃないよー！！駄目だよ女の子がそんな言葉使いしちゃ！

れ、れ冷静になろうそして落ち着こう、クールダウンあたし…、あたしがあたしに注意してどうするの？きっとこれは夢だ夢だ夢だ夢だ夢だ夢だ夢だ夢だ夢だ夢だ夢だ夢だ夢だ。

いやいや、落ち着こうあたし。落ち着こう……。

ん？先輩何？

手を掴んで、

あたしの腕を後ろへ、

少し屈ませるよう促されて、

足で腕を極められて、さらに腕を後ろ方向へと……痛ああああ

あい！！

ひなっち先輩女の子にプロレス技を掛けちゃ駄目だよ！

うわああああ！あたし何か変なこと言った！？

「頭だったら衛生上の問題だろおおおおお！！」

「ギブギブギブギブ！！」

ええええそうだったの！？知らなかった！

どうしよう……、今までずっと使ってた……！

「んにやあああああ！！」

猫の様な叫びと同時に跳ね起きた。勿論、下半身は夢のように動

かない。

「ちょ…どうしたのユイ？」

いつも身の回りを世話してくれるユイのお母さん。今回はユイに驚かされた。

何故変な声を上げたのか気になる、そういう訳で聞いてみる。

「…変な夢見ちゃった」

「そう……」

それ以上訳は聞かず、黙ってユイの頭を撫でる。

まだ生まれて間もなく毛が柔らかく、とてもフワフワな子猫の様な髪の毛。撫でているこつちが癒されそうだった。

「何で撫でるの？」と何か子供扱いにされては困るユイが聞く。

「小さい頃のユイね…、怖い夢見た…って言うてお母さんに泣きついてさちよつとね……」

「そうなんだ」

しばらくユイはお母さんに撫で続けてもらった。

状況は四回の表。得点は変わらず、一対ゼロ、ツアアウト。

「バッター交代！」

「またですか？ ゆりっぺさん……」

「日向君出て頂戴！」

「へ俺？」

「体、動かしたいでしょ？」

と何故か妙に優しい笑顔。 こういう時はいつだって無茶ぶりをさせられる合図。

「いや、別に…それに俺と交代したら松下五段のホームラン見れなくなるぜ……」

松下五段は切り札であり、一発逆転の選手。 野田が変な騒動を起こして退場になった時の保険だ。

「見たでしょ？ 相手ピッチャーは相手の特徴を読んでアウトにする所を」

「え？ そうなの？」

「そうなのか音無？」

と頼りない声を上げる日向と大山。

根本的に二人は性格と体格、それぞれ違う。 だが二人にある共通点がある。

それは、

「二人共アホっていう事が改めて解ったわ。見たでしょ？野田君がアウトにされた時とかさ」

『あ！』

二人は思い出す。何か妙に打ちにくいコースという事を、この時ゆりはアホだとまた思った。

「良い？日向君出て頂戴」

「えーいや、でもさ松下五段の方が絶対良いつて」

確かに松下五段の方が良い。彼は柔道を会得しておりその上五段を録っている。運動神経は良いはず。

だが、ゆりは誰も予想していない事を口にする。

「アホな事をやって相手を引き寄せて椎名さんをホームスチールさせる事が出来るのは貴方しか向いていないわ」

日向はようやく解った。自分が何をすれば良いかが。

「まさか…！俺がそんな道化師役だなんて！嫌だぞ俺は！！」

必死でゆりに抗議を仕掛けるがゆりは日向の耳に近づくとある事を言う。

すると青ざめた顔になり、やります！と凄く笑顔で引き受けた。

（日向はゆりに何を言われたんだ？）

（とは言っても何て言って引き付けりゃ良いんだ？）

バッテリーボックスに立ち、少し準備運動をする。

何かヒントは無い物が……。

少し辺りを見回すが何も無い。あるとしたら次の打撃に準備中の大山、そこに駆け寄ってはいい、お茶と大山に渡す入江。
結果、

（何もヒント無え……）

もう覚悟を決めるしか無かった。道化師役をしつかりやらなければ……。

「はい、音無さんからお茶ですよ」

「え何で？」

と大山は入江から素直に受け取ると質問をする。

「『陽射しが強いから熱中症に気を付けろ』って伝えといてって言うてましたよ」

「へー、音無君って優しいね。あ、あつちに戻ったら音無君に『ありがとう』って伝えてくれるかな？」

「はい、分かりました」

と了解し、暫くその場に居る事にした。

「あれ？戻らないの？」

「何かゆりつpegがね『暫くそこに居て』ってね」

「そうなんだ…」

二人は会話を終えると日向を見守ることにした。

「ストライク！」

「あっこれでツーストライク…」

「うーん日向君大丈夫かな？」

そこで、大山はある事に気付いた。

何で入江のスカートに何か光る様な細い紐があるのか……。

（不味い不味い。ヤッベどうしよう!？）

平常心を仰ぎながら内面で焦っていた。

（あ、もう少しで投げそう……！仕方無い、やるか!）

もう後戻りはできない。やるしかないのだ。
遙か彼方の何処かに指を指し、そして

「何じゃありゃ〜！？でつかいタケノコがニヨキニヨキと〜!!」

その場が一瞬で固まる。皆は思った。

（あれは…、アホだ…）と。

（何やってんだあのバッター？ま、あと一球で終わりだがな…）

と振りかぶる。

（今だ!!）

とゆりがベンチにある紐を引っ張る。

引っ張った瞬間、入江のスカートが捲めくれた。

「…ふえ…」

一瞬、入江には何が起こったのか解らず脳の演算処理が間に合わなかった。

「へえあ!？」

と大山が入江のある物を間近で見えてしまい気絶した。

当然、バッターが準備する場所はバッターボックスの近くにある。従って、ピッチャーの視界に入る。

「ぶっ!？」

投げる勢いが弱まった。

（しまった！！）

と投げた瞬間、鼻血が出ていないか右手を鼻に持っていき確認する。すると、何かドロツと赤黒い液体が滴り落ちる。

（投げる勢いが弱まった…！？まさかあれが実行されたのか！？）

とりあえずバットを振り、ボールに当てる。

キーン！と音がし、ボールが高く上がる。

だが、そこが限界。高く上がっただけで、飛距離は少なくセンターの選手にアウトにされる。

「アウト！スリーアウトチェンジ！！」

後、一回裏で休憩だ。

第26話 Game start! Part9 (前書き)

挿し絵をしました。

ちなみに、Angel Beats! heaven's doo

r二巻のネタバレ要素が入ってます。

ご注意ください。

ちなみに作者は絵が下手くそです。覚悟して下さい。

第26話 Game start! Part 9

「うえ… ひぐつ… うう… 岩沢さぁん…」

「よしよし、良い子だから泣かない、泣かない」

さっきの事がショックで泣き付いている入江。

子どもが泣いている時に親があやす様に岩沢は何処か馴れているみたいだ。

「おいゆり、入江にこんな酷い事をしなくても良かったんじゃないのか！」

「はん！ひさ子さんとやら私は勝つ為にやった事だけどこか？」

「ひさ子さんとやらって… こんな酷い事して楽しいのかよ!？」

「ええ」

「最低だな… お前」

「最高の誉め言葉を有り難う、ひさ子さん」

何を言っても恐らく効きはしないだろう。ドSとなったゆりには…。そんな勝ち誇って笑っているゆりに結弦が毒付いた一言を放つ。

「お前、友達少ないだろ…」

「っ…!」

100のダメージ。

「ええ！そうよ！！何か文句ある!？」

開き直るが何処か焦っている。

「うおおおお！！ゆりっぺ俺が付いてるぞ！！俺がゆりっぺの友達第一号だぁぁぁぁぁ！！」

言わずとも判る、ゆり一筋のアイツだ。

どんなに暴力を振るわれても決して嫌いにならないアイツだ。

うげえ… という嫌な顔が遠くからでも分かる様な顔をしている。

「良かったなゆりあんなアホな友達が出来て…」

「っ、うるさぁぁぁぁぁぁい!!」

カタカタ、ピツと常にMYパソコンを持ち歩いている竹山はある作業をしている。

「よし、これで保存完了っと…」

パソコンをいじり保存した内容は、入江のスカートが捲れた瞬間の画像だ。

「うえ……岩沢さん………」

前よりは落ち着いている入江。だが、目が尋常では無いほど腫れている。

「よしよし」

入江を抱き寄せ、ずっと落ち着くまで頭を撫で続けている。ギタ―以外にも感心はあるみたいだ。

「みゆきち大丈夫？」

「…あ、関根っち……うん」

声は掠れ、いつもより力の無い声。ゆりはある意味で怖い。

「みゆきちの熊さんパンツ可愛かったぞ」

人は心が強い者と弱い者が居る。過去を引きずる、引きずらない、こういうタイプに別れる。

どちらかと言うと入江は引きずる者だ。従って、

「うわあああああん！！岩沢さあああああん！！」

泣く訳だ。

「よしよし。良い子良い子」

再び岩沢に泣き付く入江。まるで子どもの様。

それに冷静に対処する岩沢は親…いや、最早母親だ。

（良いな～みゆきち……）

抱き寄せて頭を撫でてもらっている姿に関根は嫉妬した。

岩沢は音楽しか頭に無い様な人だが、いつもバンドで練習してい

る姿はカッコ良くたくましい。その練習に付き合っているひさ子、入江、関根はその姿に惚れてバンドを結成してチームを作った。現在バンド名を募集中らしい。

（あーもう！苛々する……それに眠いし……）

ベンチに戻ったゆりは取り敢えずポカリでも飲んで水分補給を行っている。少し前の出来事を想いながら。

（そりゃあ、私だって友達の一人や二人……）

小学校の友達、中学校の友達を思い返してみると一人も居なかった。

ゆりの性格上、少し横暴な所があり無茶苦茶な命令でもしてくるしどちらかと言うと、一人の女性として扱われなかった。

そんな彼女でも周りから慕われており、たまに相談しに来る人が大勢居たがそれは過去の話。

キンとバットから良い音が出るが、ボールが高く上がるだけでピッチャーである結弦に簡単に捕られる。

（音無君、結構上手いわね……眠い……）

悔しがるバッターは次の選手に未来（？）を託す。

隣では遊佐がインカムからコードが出ており、両耳で何か音楽を聞いている。

本来、インカムは無線同士で通話をする物だが何かしらの改造を加えたのだろう。

（あゝあ、眠い眠い。寝ちゃおうかしら……）

「ゆりっぺさん、眠い様でしたら私が丁度良い時に起こしましょうか？」

心でも読んでいるかの様な言動。

そんな事は気にせず、遊佐に頼む。

「分かりました。ゆっくりに寝てください……」

「お休み……」

目を閉じるとそこは暗い闇。ボールが打たれる音がしたり、野田が悔しい声を出したりするがそんなものは右から左へと綺麗にゆりの耳から通り抜ける。

そんな音がするなと想いながら全てが黒で覆われて、ゆりは眠りに浸る。

ツアアウト、一、二塁、ツーストライクと微妙な状況だ。

ここまで頑張れたのは日向や椎名、野田、高松、藤巻、ひさ子のお陰。一方、大山はベンチで気絶中。入江のあれが凄すぎたのだろう。ちなみに高松は倒れた大山の代わりだ。

（後、一回で一旦終了か……）

ピッチャーマウンドに立つ結弦は少し疲れぎみ。十分水分補給をしたつもりだったが喉は渴きぎみで口の中も乾いている。

（なら、一気に終わらすか……）

キャッチャーのミットを定め、オーバースローで思いつきり投げる。

「くっお！」

バッターの願いは届かず、掠りもせずストライクにされる。

「ストライク！バッターアウト！」

『ここで、三十分の休憩を行います。選手の皆さん、ゆっくり休んで下さい』

アナウンスが終了すると、全員それぞれのベンチへと向かう。

「ふう、何とか凌いだな音無……」

「ああ。にしてもゆりの奴……、寝てるな……」

ベンチを見てみると幸せそうな顔をしてすやすや眠っている。

そんな顔をして眠っていると何だか、悪戯でもしたくなる。

「おーい、日向ー！」

「この声って……！」

こここのメンバーでも無い、むしろ絶対に無い。
昔、会った事のある声だ。

「カウントして銃^コで撃ち合う。」

え？

「相手の銃弾で倒れた方の負け」

ちょ……！どういう事よ！？銃って……わわわ私が扱える訳や無え
だろおおおおお……！！

誰か説明して……！お願い！私の一生のお願い……頼みます……！
神よ、我に教えて下さい……！たのんますよ……！お願いです……！

しかもカウントって……西部劇か……！？

何処よ……！？

東……！？マ○ケル・ベイ監督……！何処の撮影よ……！？
教えて……！……！おじいさん……！……！

って、相手……！チャー……！？

海の家の仕事はどうした！？もう夏が近いだろ！！

銃で人撃っちゃいけないっしょ！！銃刀法違反よ！！

あんたの嫁さん泣いちゃうよ！？折角両想いなのに……嫁さん泣いちゃうよ！？嫁さん泣いちゃうよ！？

重要な事だから三回言わしてもらったわ！！

しかも、日向くううううううん！！その茂みで何こそこそしてるのよ！？

それに大山君！！助けてよ！！こんなか弱い女の子が、美人がOS（助け）を求めているのよ！？助けてよ！！！！

って、体が勝手に動くうううう！？止めてええええ！！止めてえええええ！！

「いち、に、さん……」

何カウントを勝手にしているのよ！！！！！！辞めてええええええ！！

「じ、ろく、しち……」

ちい、こつなったら……、

「きゅっ、」

殺るしか……、

「じゅっ……」

ないの！？

あれ？指が……勝手に？

パパァン！！

うつ……！？

右腕が……、い痛う……

か、かかすり傷程度かな？そんなに……血、出ていないし……
にしても……腰が、抜けた……立てない……どうしよう……。

「お前の負けだ……女」

ちよ、チャー止めて……、もう勝負付いたはずよ……、しかも女って私の事忘れたの？

そんな……止めてよ……銃をこっちに向けないでよ……
止めてよ……お願いだから……！

「いいえ、負けるのは貴方よ」

何言ってるのよ私……！！

何で挑発してるのよ……！止めて……！！

「……丸腰になつたくせに、ふざけた事を言う……」

そうよ！！何言ってるのよ！！丸腰じゃん私！！
どうしよう……どうしよう……！

「……終焉だ……」
おわり

え？嘘？そんな……そんな……
止めてえええ！！まだ死にたくない！！！！

パン！

あ、もう終わりだ……私……、何処を撃ち抜かれたのかな……。お腹
かな？そこは嫌だな……。もし子宮に当たちゃったら、子ども出来な
くなる可能性があるし……。肺かな……。でも嫌だな……。撃たれたら確
か、三十分苦しんで死ぬんだっけ？

じゃあ、せめて頭が良いな……。頭だったら即死だし……。あ、で
も撃ち所が悪くて苦しむの嫌だな。

あのフィンセント・ファン（バン）・ゴッホは、銃で頭を撃ち抜
いて楽になろうと思ったけど二日間、もがいて死んだんだっけ……？
撃ち所が悪くて……。

って全部駄目じゃん！！

でも、ごめんね入江さん……あんな酷い事して……

でも熊さんパンツ、可愛かったわよ……大山君が気絶した程だし
……相手ピッチャーも鼻血出してたし……

可愛かったわ……熊さんパンツ……グッジョブ！熊さんパンツ！

ギーン！！

へ？

> i 2 8 2 7 7 — 3 6 4 0 <

前に立つてる女の子……誰？

ちよつとしかも何よ！私の綺麗な頭が、「ゆりつぺの頭」だけで済ましているのよ！？

馬鹿作者！！適当に描きやがって……呪ってやる！！

しかも何で左手から剣が……？

鋼の○金術師？

いや……でもおかしいわ……。

生身の腕から剣が生えるなんて……、錬金術が普及してるのかしら？この世界……。確かに人間の体内に金属があるけど決してあんな腕から生えている程では無いわ……。

薄く伸ばしているのかしら？

いや、それだったら弾丸なんて弾き返せないわ……。

炭素で代用してるのかしら……？それだったら可能性が有るけど炭素と金属の比を合わせるのは難しいわ。逆に脆^{もろ}くなるし……。

それに、あんな金属を使って頭フラフラしないのかしら？

人間はNa^{ナトリウム}で脳の微弱な電気を運んで筋肉に伝えさせて……だあ！！もう解^とけないわ！！

けど、ありがとう私を助けてくれて……。後ろ姿で顔が判らないけど……ありがとう私の命を救ってくれて。

それにしても、髪の毛……綺麗だな。良いな。秘訣は何かしら？

でも…、会った様な気がするな……。懐かしい様な…悲しい様な…
…何だろこの気持ち…？
…何か…悲しいな…。

『ゆりっぺさん…』

「……ん……何…」

起こされた気分は最悪だった。

まだもうちょい寝ていたい、そんな感じだ。日々、妹や弟達の起こされる感じはこうなんだ…と実感し遊佐の方へ向く。

「ゆりっぺさん、日向さんが相手チームの一人と話している模様ですがどうしますか？」

「別に良いんじゃない？休憩時間なんだし…それに何話しているのかしらね……」

まだ眠気が残っていて何だか気分が悪い、弟達もこんな感じで朝御飯食べているのか、と再び実感し遊佐に話し掛ける。

「盗み聞きは趣味では無いので分かりません」

「そう……」

T o B e C o n t i n u e d

第27話 Game start! Part10(前書き)

野田

「あ痛ててて……」

入江

「どうしたんですか野田さん？」

野田

「貴様には関係無い……」

関根

「うわぁ……凄い腫れてるね左手……ゆづゆづのボール受け止めたかな？」

野田

「なっ！？いつの間に……！」

関根

「そうだゆりっぺを呼ぼう！」

野田

「止める！そんな事をしたら——」

ゆり

「私がどうかした？」

野田

「げ！？ゆりっぺ！？」

関根

「あのですね…ノッチがですね左手が腫れているんですよ」

入江

「うわ…凄い……」

ゆり

「凄い腫れてるわね……どうしよう…キャッチャー交代しようかしら……」

野田

「止めるゆりっぺ！そんな事を言うな！！」

ゆり

「じゃあ、どうしろってのよ。この腫れ様は尋常じゃ無いわ」

関根

「ゆりっぺが『痛い痛い』の飛んでけ』って擦りながらやれば腫れが引くんじゃない？」

入江

「そんな子ども染みた事をやっても治らないと思うよ関根っち」

ゆり

「普通に冷やせば良いんじゃない？」

野田

「頼むゆりっぺ！！やってくれ！！」

ゆり

「嫌よ!!」

関根

「お願いやってよ!!」

ゆり

「何で貴女も頼んでいるのよ!!」

関根

「でもどうするの? ゆづゆづのボールを受け止められるのノッチしか居ないよ。それにやるだけで良いんだから」

ゆり

「んゝそれもそうね…音無君のボールを受け止められるの野田君しか居ないし…」

入江

「効かないんじゃない…」

関根

「やってみる価値あるよ」

ゆり

「（仕方無い……）痛い痛いのは飛んでけ」

野田

「うおおおお!! 元氣10000000000倍!!」

入江

「腫れが……！」

関根

「引いた！？」

ゆり

「不思議人間ね……」

第27話 Game start! Part 10

「日向久しぶりだね。どう？具合は」

背丈は大山より少し小さめな女子が日向に話し掛ける。

「お前……、この高校に居たのか……」

「クラス分け表見ていないの？」

「自分の名前が見つかったら他のクラスの野郎は見ないタイプだからな……俺」

大抵の人は自分の名前を見つけたら他の所には関心は無い。

「そうなんだ……んじゃ、これで次は点取らして貰うよ」

「取れるかな？……俺達強いからな……」

少し威圧を掛けるも臆する事なく彼女は答える。

「やってみなきゃ判らないよ？」

答えると後ろを向くと肩甲骨辺りまで伸びている髪の毛がゆつくりと揺れる。そして、その場を去って行く。

そんな彼女を暫く見送り、居なくなつた所で結弦は口を開く。

「彼女の知り合いか？」

「まあな……あいつとは会うのは三年振りかな……」

適当に答えると二人でベンチへ歩くと、まだ大山が気絶していた。良く鼻の下ら辺を視ると赤い何かがほんのり付いている。鼻血だ。

「大山、死んだな……出血多量で……可哀想に」

死んでいないだと突っ込みをする結弦。以前に似た様な事があった気がする。

「んで、日向あの人はお前の彼女か？」

「あゝ、彼女にしたい位にさ優しいよ。ゆりっぺと違って……。あ、でも彼女じゃねえぞ」

その言葉を聞いた瞬間、後ろから殺気のオーラが近付いて来るのが分かった。

「俺、ちよっとトイレに行くわ」

オーラを出している主^{ぬし}が判るとベンチから勢い良く飛び出るとそれが分かったようにゆりが後ろ頭目掛けてボールをヒットさせた。ゆりの前では全てお見通しという訳だ。

当然、相手は地べたに漫画の様ヘッドスライディングをする。

「……………もう、嫌だ……………」

地面に突っ伏し、そう嘆く。口の中は泥の味しかなくて、とても不味い。食堂の麻婆豆腐で口直しをしたいところだ。

無様な日向を当たり前の様にゆりは後ろから笑う。

「あははははははは！！日向君がゴミの様だ！！あはははははははははははははは！！」

「ゆりっぺさん、悪役（ム。カ）の様ですよ」

遊佐の突っ込みを気にせずそのまま笑い続ける。

（俺がボールを投げるよりゆりの方が向いているだろ……………）

再び想う結弦だった。

「あゝあ、哀れな者ですね音無さん」

「……………！お前いつの間に……………」

背は大山並の大きさ。

そして死んでたまるか戦線、唯一催眠術を使いこなせる直井だ。

「はい、オロナミンZどうぞ」

「あ……………ありがとう」

最近流行りのオロナミンZを手渡される。とても冷えていて触り心地が良い。

「では、これで」

後ろを向き、即座に何処かへ向かう直井。

普段は戦線メンバーを蔑む眼をするが、何故か結弦にはそういう事は一切しない。

「オロナミンZか……………」

キュポつと良い音を立て、一気にオロナミンZを飲み干す。

ゴミ箱はベンチにある為歩かなければならない。

「なあ、音無」

「ん？岩沢？」

行こうとした時、音楽キチで有名な岩沢に声をかけられる。

「あたし達がロックバンドしているのは分かるよな？」

「え、ああ……」

旧校長室に行く際、いつも思わず聞き入ってしまう程上手い音が聞こえて来る。

「スゲエよ……アレ岩沢だったんだ……」

「ついでにひさ子と関根と入江も居るぞ」

ちなみにひさ子はリードギター、関根はベース、入江はドラムだ。

「それで、俺に何か用？」

「ああ、そうそう」

すっかり忘れた岩沢はスカートのポケットから何かの紙を出す。その紙にはびっしりと文字が書かれており、何を書いているのか解らない。

「ここなんだけどさ、あたしとしてはベースとドラムを入れたいんだけど、『黄金コード』って呼ばれているんだけどさ、そこを崩さずに入りたいんだよね。どうすれば良いと思う？」

紙を結弦に見せると暫く考え込み、岩沢に思い知らされた。

（音楽キチ……）

「どう？」

真っ直ぐな眼だった。

黄金コードなんてどうでも良い。解らないのだから。

「岩沢さん、ゆづゆづには解らないと思うよ」

不意に関根が入って来る。謎の単語を言いながら。

「ゆ……ゆづゆづ？誰？」

「誰って音無に決まってるじゃん」

どうやら、

音無 結弦

おとなし ゆづる

←

ゆづる

←

ゆづ

←

ゆづゆづ

と言う訳らしい。

ネーミングセンスが悪い。

「ちよっと！ネーミングセンス良いじゃん！」

「誰に言ってるんだ？」

「さあ？それよりどう思う？ここ」

紙を再び見せられる結弦。

字はびっしり書かれていて解らないが読めなくはない。授業を眠たそうに受け、字が汚くなってしまふ学生の字だが、読める。

「ごめん、俺クラシック派なんだ……」

「……そつか……それは残念だ……」

「へーゆづゆづってクラシック派なんだ」

岩沢はクラシックに感心していないが関根は感心しているみたいだ。

「何でクラシックなの？」

「父さんがオーケストラに入ってて、それでさ」

「岩沢さんコイツ敵だ！」

「どうして？」

訳の解らない事を言う。

その後、クラシックとロックバンドについて語るが当然無視。

暑い中、ご苦労な事で。

「じゃ、ごめんな付き合わせて貰って」

「良いよ」

紙をポケットの中にしまいこみ、何処かへ向かう。

「あ！岩沢さん何処へ行くの！？」

すぐさまに岩沢の所に向かう関根。

今日は色々な人に絡まれる日みたいだ。

バシャバシャと水が弾ける音が日向の耳に入る。その音は快く、さっきのゆりの攻撃がゴミの様に思えてくる。

『じゃあ、誕生日プレゼントはウィニングボールが良いです』

『ウィニングボール……それで良いのか？』

『あ、勿論ひなっち先輩ですよ』

『って事は俺で試合を終わらせたボールか……』

『無理ですか？』

『（げ！？その上目遣いは反則だ！アウトだ！）』

『お願いします。あたし、一度でも良いからウィニングボールを貰いたいんです』

『どうして？』

『あたし、動けないから……』

『（そっか……ユイの奴……体、動かないんだよね……下半身が動けない分、運動制限がかかるよな……出来るだけやってみるか……）』

よし！分かった！お前の願いを聞いてやんよ！！』

『やったー！でもやんよって…プっ』

『わ、笑うな！』

（……ウイニングボール…か）

ユイの為、これしか頭に無かった。

（でも何で野球だつて解ったんだ…？）

日向は一度も会話の中で『野球』とは言わなかった。それなのに何故、ユイは『ウイニングボール』を言ったのか。それとも、ユイの中では球技大会＝野球なのか。

「おい、日向」

「何だ音無？」

「ゆりが集まれ…ってさ」

「そうか」

「はい！皆注目！！」

と言っているが正直、何処へ注目していいか判らない。ベンチ側を見るとまだ大山は気絶している。

「大山、可哀想に……」

「違ああう！私に注目よ！！」

「ゆりっぺさん、本題に入りましょう」

さりげない突っ込みをかますと、コホンと咳払いをし早速本題に入る。

「今までののは遊びだと思いなさい」

「そんな……ゆりっぺ……俺との付き合いは……遊びだったのか……？」
とてつもない勘違いをしている者が一人だけ居る。
ゆりっぺ一筋のアイツだ。

「誰が貴方と付き合うか……！……！」

日向「うわあ、ゆりっぺって魔性の女だな……」

関根「ゆりっぺやるねえ」

遊佐「やりますねゆりっぺさん」

「付き合ってねえよ！！魔性の女でもねえよ！！^{はや}囃し立てるの止めるおおおお！！」

肩で息をすると落ち着きを取り戻す。

それぞれに突っ込みを入れるが 何か忘れている。

「え……と何の話をしようとしたんだっけ……？」

「野田と遊びで付き合っていた事」

「あ、そうそう——」

次の瞬間、藤巻の視界が暗くなった。いや、正確に言えば気絶した。更に正確に言う顔面目掛けて、手刀で思いっきり叩きつけたのだ。

『藤巻いいいいいい』

一同は叫ぶがそれだけでは意識は戻らない。

「はい、皆私に注目よ」

「おい、ゆり藤巻はどうするんだ？」

「死にはしないわ。後で起こしましょう」

的確な指示（ゆり曰く）を出す早速本題にやっと入る。

「全国大会優勝者は『小枝^{こえだ} 凜^{りん}』って言う人よ。さっきのピッチャーとは比べ物が無いと思うわ」

あのピッチャーでさえ比べ物にならないとは、それ程凄いピッチャーなのだろう。

「勝てるのかゆりっぺ？」

恐らく勝てる保証なんて言うのは無い。

そこで、ゆりは皆をやる気を出させる為ある提案を出す。

「勝つたら私とデートね」

男共（音無、野田を除く）『おええええええええええ！』

ある者は酔っぱらった親父の様にゲロを吐く者や、絶望したりする者や、ゆりに対する感情表現は様々だ。

「私とデートするのがそんなに嫌かお前達^{まえら}あああああ！魅力
的だろ！！何処が嫌なんだ私の！！」

「いいぞ！！その話に乗ったぞゆりっぺ！！」

乗させてはいけない者が居た事をゆりは忘れていた。

To Be Continued

第28話 Game start! Part 11 (前書き)

遅くなりました。申し訳ありません。

第28話 Game start! Part 11

「プレイボール!」

低い声が後半の試合を告げた。

前半戦は四回の裏で終了、今度は八回の裏までという特殊ルール。引き分けの場合はそのまま続行。

(トップバッターっていうのもプレッシャーが掛かるよな…)

一回目の試合は相手が弱かったから勝てたものの、今回は大変だ。ゆりはこれまでは「遊び」と言った、それ程強いという事だ。

(ちゃっちゃと終わらせて早く攻撃しなきゃ……)

構えて、腕をやや下ら辺にボールを投げる素振りをする。

(…アンダースロー)

などと考えている内に投げられる。

ストレートだが、前のピッチャーよりは速い。即、対応するがボールはただ真上に行くだけでキャッチャーのミットに捕られる。

「アウト!」

(げえ…速っ……)

率直な感想を抱くとベンチへ戻る。

「速いですね、ゆりっぺさん」

「そうね…」

「次、TKさんですよ」

「バンダナしてて見えるのかしら？」

適当に現在の状況を述べるとTKを見守った。

「ストライク！」

(Oh、何てSpeed…)

最初は結弦が打てたら様子を見ようとしたが、簡単に打ち捕られた為内心は焦っている。

あのアンダースローの球を打てる者は居ないだろう。打てた結弦は奇跡だ。

崩れた体勢を再び整えると相手に目を据える。

後、一球でTKは終わり。仲間の為にもせめて一塁に出たいものだ。

(……Cool down)

そして、相手は投げる。ボール投げは遊び、キャッチボールも遊びだけど今回はそうはいかない。

遊びどころでは無い球がこっちに迫って来るのだから。

「ストライク！バッターアウト！」

TKの願い（バット）はボールに届かずアウトにされた。

「TKドンマイ、ドンマイ！次があるさ！」

「Fuzi ma っちゃん…」

次があるかどうかは分からないが、取り敢えず励ます藤巻。
ベンチに戻った後、オロナミンZを箱から出すと水分補給の為に飲む。相変わらずの爽やかな炭酸が口の中に広がる。

「TKって腰に手を当てて飲むのね…」

「…謎だらけですね」

TKが手を腰に当ててオロナミンZを飲む光景が何か二人にとってシユール過ぎた。普段は『I'll be back』とか何とかして訳の解らない英語を放っている。何処でもヘッドスピン（ヘルメット無し）をするわ、とにかく謎だらけ。二人はそんな普段のTKを見ているがオロナミンZを飲む光景が新鮮に見えた。

「次は日向さんですよ。どうします？交替しますか？」

「そりゃあ無えぜ、出番くれよ！」

前の方のベンチに座って居た日向は少なくとも聞こえていた。

「…、交替無しで良いわ。その代わり、打って頂戴。」

「言われなくても、わあってるよ!」

と張り切ってベンチからバットを持って出たが――、

「ストライク! バッターアウト! スリーアウトチェンジ!」

「悪い…、やっちゃった…」

呆気なくアウトにされた。

「何やってんのよ! お前はあああああ!」

ズビィ! と固く握った右手を日向の腹へ突き刺す。

「おゝ!?!?」

食らった日向は地面に転がり、暫くもがく。 前回は股間に蹴りを食らったがこちらの攻撃の方がどちらかというとマシ。

明らかに他のメンバーとは違う態度を取るゆりは日向に背中を向けた。

（流石…速いわね…あのボール…）

『小枝 凜』というピッチャーの動きを思い出してみると、結弦と同様、無駄ではないピッチングと正確なコントロール、速さは結弦を上回っていた。ただ、それだけだがどうして打てない。

大丈夫か?、と結弦がまだ転がり続けている日向の下へ近付くと、『コレ』かよ、と日向が返した為その場から離れて見捨てて行く結

弦。

(…………、)

こうして見ると、ゆりは日向が邪魔で仕方が無かった。

(後、もうちょいで夏休みか……)

と試合に関係しないが思う。

子どもの唯一の長い長い休み、それが夏休み。

「うにや！？しえきにやつちにやいやちやによ！？(関根っち何をいれたの！？)」

「ふっふっふ、どうだいあたし特製、関根スペシャルは！ワサビとカラシと獅子唐(辛いのだけを取り寄せたぞ)と牛乳と唐辛子とコーラを入れたドリンクだよおおおおお！！」

と外野が騒がしく、入江は顔を歪めて関根に問いただしている。いつもの事だ、とゆりは頭に手を置いて呆れつつ、最終的に関根はひさ子に必殺チョップを頭の天辺に味わわされた。その味はかなり痛い。

「そっいえば小枝ってさ」

「ん？」

「あれ、上手くなったのか？」

「上手くなったよ！」

「そっか…」

「来おおおい！！」

またまた殺気を出してキャッチャーマウンドに居る野田。バッターは少し気圧されたが、何とか耐えている。

大山は現在進行形で気絶中。代わりに高松が入っている。本人は『私の活躍、期待して下さい』と眼鏡を拭いて掛けようと思ったら、間違えてダンベルを掛けようとするという謎の行動を取る。

『期待』すると言っより、『心配』の方が当てはまるだろう。

（ちゃっちゃんと終わらせるか…）

結弦は振りかぶって、ボールを野田のキャッチャーミット目掛けて投げた。

「……ゆりっぺ〜」

と不意に大山が声を出す。

「大山君？」

「寢言の様ですね」

遊佐が冷静な判断をすると、まだ大山の寢言は続いていた。

「ゆりっぺ…ミサイルは手で持つちゃいけないよ……発射台が壊れているからって手で投げようとするなんて…無理しなくても…良
いんじゃない………」

「……」

遊佐は流石にこれは呆れた。

そもそもゆりがミサイルを手で持つ事自体怪しい。元々、本人は
何処か飛んでいるから無理をするが、流石にミサイルは持たない。

「どんな夢を見ているのよ…」

「…ゆりっぺさんって…ミサイル…」

「何か言った？」

「いえ、何も。それよりも一塁に居る人が、盗塁しそうですよ」

さっき結弦の投げたボールを打った相手チームの一人がそわそわ
している。

一塁に留まらせたのは高松が横飛びでワンバウンドしたボールを
捕るというファインプレーをしたからだ。ちなみに、大山が気絶中
の為レフトだ。

（確か…『小枝 凜』だっけ…？不味いな……三番だなんて…）

（あゝ誰だコイツ）

緊張感がある結弦に対して、野田は全然無い。さっきゆりが説明したというのにもう忘却している。

（俺…ストレートしか投げねえ……なら…）

方法は一つしか無い。

（思いっきり投げる！）

オーバースローで思いっきり投げると野田のキャッチャーミットへ吸い込まれて行くが、小枝の対応は思ったより素早かった。内角ボールギリギリにしたつもりだったが良い金属音が鳴り、高くボールが上がる。

『ヨッシャー！！』

と相手ベンチ側から大きな声援が上がる。小枝も心の中でガッツポーズをする。

もうこれはホームラン、と誰もが思う。ボールは空高く飛び、勢いも止まらなかった。

だが、一人を相手側は忘れてる。
こんな球でも捕れる一人が居る事を。

「とう！」

再び松下の背中を借りて踏み台代わりになると一気にボールに追いつく。

グローブがはまっている方の手を伸ばし、パシッと良い音がする。

「アウト！スリーアウトチェンジ！！」

気が付くと、相手ベンチから声が無くなっていった。

第29話 Game start! Part12(前書き)

「かつ飛ばせ大山!!」

「頑張れ大山!」

「打った褒美に肉うどんを奢ってやるぞ!」

「YamaちゃんFight!!」

あゝ、現在、私^{わたくし}こと、大山は現在バターボックスに立っておりま
す。

あ!ごめんね、これじゃどういう状況なのか判らないよね。

僕の名前はさつきも言った通り、大山だよ。『特徴が無いことが特
徴』ってクラスや、ゆりつぺに言われて いるんだ。

はあ…… 何で特徴を持っていないんだ僕はあ……

特徴って言っても……、乳首がいつでもどこでも立っている事かな
…。

何で乳首が立つんだろうね…… 僕の七不思議だよ。 でもそんなに不
思議は無いんだけどね。

SSSのメンバー皆にはこの事は内緒にしてね。 え?何でかって?

そりゃ恥ずかしいからだよ……………!!!!!!

聞いてよ!

僕の叫び!

ムンクより凄いだぞ!!

小学校の頃は皆僕の乳首を見ても何も言わなかったんだよ！でもね、中学になると小学校の友達が居なくなる訳じゃん！
それで、

「やーいやーい、お前の乳首立ってやんの」

とか現れ始めたんだよ！周りの皆が！！

周りの女子とかもさ、いやらしいとか訳の解らない事を言っしさ
！！もう訳が解らないよ！！

好きで乳首が立っているんじゃないやいこんにやろう！！！！

それとさ！

中学校三年の終わり頃に配られた卒業アルバムがさ、皆後ろの空いているスペースがあるじゃん！

ほら、あの最後の無駄に空いているページ！！

あそこにさ、みーんな、

『乳首立ち男』お

って書くんだよ！？

ひどくない！？最悪だよ！！もう最悪だよ！！重要な事だから二回
言わせてもらったよ！！！！

それでそれが、お母さんに見られたんだよ！！

見て一言、ただ一言、

「欲求不満なの？」

欲求不満なの？

欲求不満ナノ？

欲求フマンナノ？

ヨツキュウフマンナノ？

いよつきゅうフマンなのお？

うわあああ　ああああああああああああああああああ
あああああ！！！！！！

それから……

つて暗い話になっちゃったね……ごめんね。
物凄い、話変わっちゃったね……。ごめんね。

僕が出ているかと言うと回想になっちゃうけど、良いかな？

では本編、始まるよ。

第29話 Game start! Part 12

『……………』

これはもうホームラン！いやっほーう！！と思っただが椎名がいつも簡単に捕った為に相手チームは絶望していた。

「おいおい」

「あゝあ、期待させといて何なんだか…」

「それよりあの女の子凄くね？二回目だぞ」

「しかも可愛いし…」

「俺のクラスに居るけど影が薄いんだよね」

「あれ？そもそも違うクラスでチーム組んで良いのか？」

「ま、良いんじゃない？」

等と観客席から声が出ているが、相手チームは一切声が出ていない。むしろ目が死んでいる。

「流石椎名っち！！」

「流石だよ枝里！」

「パーティーだパーティーだ!!」

「今度肉うどんを奢ってやろう!」

「おい!音無!!しゃがめって言ったのに何故マトリックスで避けた!!」

「お前の怒る所、訳解んねえよ!」

「Don't stop dancing!!」

「プロテインあげますよ!」

何やかんやでSSSメンバーは大騒ぎ。

「…浅はかなり」

平静を装いながらも少しは照れている椎名。

「椎名つちつてどうやったらあんなに飛べるんだ?」

「鍛えているからな…」

速答だった。

いくら何でも鍛えてあそこまで行けるのは怪物位だ。

「それと音無^{いんむ}」

「小僧?」

「そうだ、お前だ」

俺か？と結弦が自分の顔を指差すと椎名は続ける。

「何故、一人で背負おうとしている」

『？』

頭にハテナを浮かべている全員は放って置いて喋る事を止めない。

「無理をするな、という事だ。後ろには私達が居る、打たれたら我々が捕るからもつと頼れ」

「別に、無理なんかしていないぞ？」

「そうか……。だが、打たれたら後ろに居る我々が捕る。それを覚えておけ」

何言っただよと皆でベンチに向かいながら椎名を少しからかう。

（何で分かったんだ椎名？）

正直、椎名に言われ、ドキッとした。

打たれて、皆に迷惑を掛けたくない…、疲れさせたくない、点を取られたくない、そう想いずっと投げていた結弦。だが、一人で背負うのは肉体的にも精神的にも疲れてしまうものだ。

「音無」

「ん日向何だ？」

「誰が野田君の代わりに打つの!？」

「大山君よ」

速答。

普段のゆりはそんな感じだ。

「うんそうだね…ん？」

「どうしたの？」

「今どういう状況なの？」

「あ、そうね。大山君気絶してたもんね」

という訳で大山に今まで起きた事を言う。

「いやゝ小説って便利だねゝ。物事が一瞬にして判るんだから」

「そお？こつちの身にもなつてよ。裏設定じゃ私なんか、5分掛けで貴方に説明したんだから」

「ごめんね、ゆりっぺ。お詫びに何か一つ願い事を叶えてあげるよ」

へゝんとじゃあ、と暫く悩み、答えが出た。

「私をメインヒロインにして頂戴」

「ごめんね。それは作者に言ってくれるかな……」

「嘘つき……何でも願い叶えてあげるって言っただじゃん……!」

「それは……僕に出来る事と出来ない事があるよ……」

「へんだ……!どうせ私何かサブヒロインだよーだ……!」

「あれ?ゆりっぺってサブヒロインだったの?」

「おっと、ネタバレしちゃったみたいね……読者様、今のは忘れてね」

ち、勝手にネタ帳を見おつて……出番少なくしてやんよ。

いや、してやる……。

サブサブヒロインに昇格させてやんよ。

いや、もう決定次項。

読者の皆様、今日日本をもってゆりっぺさんはサブサブサブヒロインになりました。

宜しく願います。

「ゆりっぺ、他に願いは?」

「んーじゃあ、バッターボックスに立ってネタをやって相手の気を剋らして頂戴」

「うん……え?何て?」

ゆりの言う事が速くて聞けなかった、何言っているんだ？とかではなく、確認で聞いている。

「ネタをやってって言うているの」

「ちょっと、僕にそんなネタは持ち合わせていないよ!!」

「私が考えたわ」

「そうなの？」

「ええ。あのピッチャーに告白してきて」

「うん……え？今何て？」

「だから、『初めて会った時からずっと貴女の事が好きでした。付き合つて下さい』って言えばいいわ」

「……!?」

叫ぶと同時にこの世の終わりだ、絶望した様な顔をしていたという（ゆり談）。

「簡単な事じゃない。ただ言うだけよ」

「い、嫌だよ！」

「大山君、あのピッチャーと同じクラスよね」

正確に言うならば、右斜めの一つ前にピッチャー事、小枝凜が居る。

「うん。なら、やらなくても良いよね……」

「ふふ♪やるのよ……」

脅迫めいた言葉を放ち、大山の眼を見る。

「嫌だああああああ！！僕は本気の恋しかしいんだ！！しかも、振られるのが分かっているのにiiiiiiiiiiiiiiiiiiii！！！！」

手の指を物凄い速さで合わせる。漫画で言うなら、テコテコという効果音が出そうだ。

そこに、日向が割って入り、

「ハッ！初心はつこころな野郎だぜ。丁度、練習にもなるんじゃないかね？」

「うるさい！！！！」

と、日向の軽率過ぎる言い方に気に入らない大山は反論する。

「僕は日向君とは違って本気の恋しかしいんだ！！」

「なっ！！？俺だって今本気で恋をしているんだよ！！！！」

一瞬、SSSのメンバーが居たその場だけの時が止まったという。

「はん！どーせ日向君は『コレ』なんでしょ！！音無君LOVEで

しよどうせ!!」

右手の甲を左頬に持つていきながら言う。今まで見た事の無い大山がそこに居た。

「^{ちげ}違いよ!!音無と俺はそんな関係じゃ無^ねえよ!!!!」

ガシツつと大山の体操服の襟元を掴むと静かに、喉元に噛み付く様に眼を見る。

その男は日向では無い。

『音無 結弦』だ。

「なら愚痴っていないでさっさとやれよ……」

その『音無 結弦』は皆の知っている『音無 結弦』では無かった。

スが同じになった時から貴女の事がずっと好きでした！！付き合
て下さい！！！（本音入り）」

パン！！

「ストライク！バッターアウト！スリーアウトチェンジ！！」

…その瞬間^{とき}…、僕の何かが……欠けた……。

第30話 Game start! Part 13 (前書き)

今回は視点多いです。

第30話 Game start! Part 13

「うえ、うえ……うぐ……うぐ」

大山は、漫画の様にハンカチで眼を当て泣いていた。ちなみにハンカチは自分のだ。

結弦は大山の肩に置いて慰めて、小さい背中さすって少しでも呼吸を楽にしようとしている。

皆、ある共通点があった。

『（前にも……こういう事があった様な……）』

いや、気のせいかと納得した。

逢ったのは転校初日なのだから。だが、その前に逢ったとしたら……、

『（そんな事、ある訳ないよな（よね）（ですよね）……）』

SSSメンバーは、心の内にしまった。

（あう……どうしょ……キャハ）

（『付き合って下さい……！』）

その言葉が頭から、離れなかった。

「小枝？どいした？さっきからグローブで顔を隠しっぱなしだぞ……」

「べつべ別に！グローブが見たくなっただの！」

「（もしかしてさっきの……いや、そんな筈無いよな……）そっか」
分かっているのかの様に、小枝の場所を離れる。

小枝はグローブを見てると言ったが、本当は満面の笑顔を隠すのだ。

（どうしよう…返事……私も言った方が良いのかな？あの時から……好きだって……）

ここから、小枝 凜視点に入ります。

あの時って確か…私がケガした時だよね。

誰も居ない教室に残っててプリント整理してて、それで…

「よっこいしょ……んじゃあ帰ろ——」

立ち上がって一步を踏み出したら、プリントが有って転んじやつたんだよね……。あの時は見事だったよ。一回転して転んだんだから。

今思うと不思議だよね〜どうやったら一回転するんだろう？

「あつちやあゝ……右膝、擦りむいちゃった…」

痛い傷だったよ（？）。

今までケガした事無いつて位。んでそこに、

「どうしたの？」

って大山君に声を掛けられたんだよね。

何で来たの？って聞くとノートを忘れたんだって。何か地味……。

「うわ…酷い傷……」

で私の傷を見るなり、

「手当てするよ？ちょっと染みるけど、我慢してね」

自分の鞆から消毒液と、ティッシュを取って手当てしたんだよね。
痛い痛かったよ……あれ、染みる所じゃ無かったよ消毒液。私には最早、殺人兵器だよ。

痛い痛いんだよ！あの痛みは消毒液という名前の殺人兵器で消毒された人にしかわからないよ！！！！

「い、痛っ……！」

「そんなに痛がらないでよ…もうちょいだから」

優しかったよね大山君。

消毒液が下に垂れない様に、ティッシュを当ててさ……、何か手慣れている感じだったな……。

「う……まだあ……？」

「え？あ！ごめんなさい！！後、絆創膏貼るだけだから！」

私、泣いちゃったよ……消毒液の痛さに……

この世の終わりだって思っちゃう位、痛かったよ……。

「はい、おしまい。ごめんね、痛かった？」

「うう……」

痛くて声が出なかったけど、大山君の顔見たら何か楽になったよ。
有り難う。

で、ハンカチで涙を拭いてくれたんだよね。

「大丈夫？可愛い顔が台無しだよ？」

「……」

あー、物凄く恥ずかしい……

いつもの特徴が無い事が特徴な大山君じゃないじゃん……

この絆創膏……CMでやってたやつじゃん……。高いのに……

「じゃあね、また明日！」

そう言って、教室から去っていった。

何かモヤモヤする……

何か肺が締め付けられる様な感覚がした。

「小枝！チェンジだぞー！！」

「え……？ああ、うん分かった！」

時って経つの早いねえ。私が着いていけないのかな？
ま、今回も……スリーストライクで頑張ろう！
グローブも付けたし、準備万端！さあ、行こう！

ってな感じで行けず、頭の中が大山君で一杯だよ……。

ああ、どうしょ……集中出来ないな……。

交代しようかな……

でも頑張んなきゃいけないよね。

相手は……見た事無いけど……頭が良さそうな人だな……。
楽勝かな……？

少し前

「高松君！何かネタをやって相手の気を剃らして頂戴！！」

「わ、私ですか！？嫌ですよー！！」

今まで見て来たが、もう日向や大山（現在進行形でベンチで佇んで居ます）の様になりたくない高松は全力で否定した。
道化師役なんてまっぴらごめんだった。

「ふふふ……やるのよ…やらなかったら八つ裂きにして、学校の裏にある焼却炉にぶちこむわよ…」

学校の裏にある焼却炉は絶対近付いてはならないという規則がある。

だが、ゆりはそんな事なんか関係無さそうにぶちこみそうだ。

「ひい！？それだけはご勘弁を！！」

目は冗談では無かった。本気と書いて『マジ』、まさにそのものだ。

周りはゆりからいつの間にか一m以上離れていた。

そんな訳で現在（高松視点に入ります）

不味いですね……

いや、そもそもランナーが居ないのにネタをやる必要性が……？
まさか！

私を恥さらしにするつもりなのですか！？

二人の時だってそうです！

ランナーが居ないのにネタをやってと強要された！！

私は…はめられた！？

なんという事！！これでは私は日向さんの様になってしまう！！
そ、それだけは避けたい！！嫌ですよ！！『お前、日向みただ
な』烙印がおされてしまう！！！！

さ、避けたい！！いや、避けなければ！！！！
ですがゆりっぺに、

『八つ裂きにして、学校の裏にある焼却炉にぶちこむわよ……』

って言われてしまった……

その命令を無視してもいいのですが、あの目は……

『本気』

だった……。

『本気』と書いて、『マジ』ってこの事だったんですね……。

やらねば……

でなければ……焼却炉で燃やされてしまう……

……そうだ！！球を打って一塁に出ればいい話！！

ただ、それだけの話じゃないですか！！よし！そうすればネタを
やらずに済む！！

さあ、どんと来てください！！
打ってや——

ズパア！

「ストライク！」

は……速い……！

遠くでは速いと思っただけ……近くでは……とても速い……！
甘く見ていた様ですね……本気を出さなければ……！

今度こそ…打ってやりま——

ズパァ！

「ストライク！」

まままままままままままま不味いですねこの状況は……！
ゆゆゆゆゆゆゆりっぺに殺されてしまっ……！

焼却炉だけは嫌です……！

せめて寿命で死にたいです……！

ふっ……もうこうなったら……

脱ぐしかありませんね！

小枝 凜視点に戻ります。

「き気持ち悪!!」

「何!? あいつマッチョじゃん!?」

「露出狂か!??」

「きゃあああああああ!?!」

「止める! よせ!! 高松!!」

「高松君……やっぱりアホだ……」

「アイツあ男の中の男だぜ……」

「……………」

「だからプロテイン飲んだのか…アイツ……」

「みゆきち! 高松君と付き合っちゃいなYO!」

「い、嫌だよ!!」

「あ、新しい歌が浮かんだ」

「岩沢……お前そればっかじゃん……………」

ホントにぶっ潰しちゃった…
ん？でもあの何人とも無いみたい……

「皆さんご安心を！！この筋肉の前では、いかなる物も無効！！！」

『おーーーーー！！！！』

何か悪い事しちゃったな……胸の辺りが赤くなってるよ…。
ごめんなさい。

試合、終わったら謝ろう。

でもポーシングするのは止めて。

皆も何か凄い声上げているし……

それから、上半身裸で一塁に行くの止めて。体操服、落ちたままだよ。体操服が可哀想だから着てください。

えっと……次の相手は……マフラー少女（命名）か

凄いなだね……私のホームランボールをアウトにしてるし…

次いでに藍川君のホームランボールも捕っちゃうし凄いよね。
あいぜん

油断は出来ない……

よし、いつも通りに投げれば大丈夫！

行くよ！！

果たして、小枝の豪速球は椎名に通じるのか！？
そして椎名は小枝の豪速球を打てるのだろうか！？

次回をお楽しみに！

第30話 Game start! Part13（後書き）

日向

「そう言えば……何でゆりっぺてあんなに必死なんだ？」

遊佐

「これだからじゃないでしょうか？」

日向

「何々？えーつと優勝チームには図書カード一万円をプレゼント……えーーーーー!？」

遊佐

「どうしましたか？」

日向

「（俺達は……この為にやってたのか……）ちくしょーーーーー!……!……!」

第31話 Game start! Part14 (前書き)

スランプです。

第31話 Game start! Part 14

（私だけ指示されていないのは何故だ？）

バッターボックスに立ち、長い髪の毛とマフラーを風に靡かせながら疑問を抱く。^{いだ}

別に指示なんてどうでも良い。ただ、怪しい。

こんな時なら無茶振りをさせる。だが、無い。周りの皆は『良くな^{やいっ}椎名っち』とか羨ましがっている。

だが、椎名にはある意味怖い。やられたらやり返すが…。

（無言の威圧……私に出来る事をやれという事が…？）

出来る事、それは…

（一点でも多く取る……事が……）

マフラー少女（小枝命名）は小枝を見据える。もう覚悟は出来ている。

（マフラーしてて暑くないのかな……）

適当にピッチャーマウンドの土を足でいじり、肩の調子を確認める。

こちらも覚悟は出来ている。

後は投げてスリーストライクにするのみ。

（後ろから妙な気配が……）

感じた事の無い気配…。

妖気…？いや、妖怪を見た事が無い小枝は妖怪の気は判らない。
正体が解らない今は、その目で確かめるのが手っ取り早い。

（いやあああああああああ！！？）

心の中で悲鳴を上げる小枝。

それは、妖怪ではなかった。

上半身裸の高松だ。

「小枝ああああ！早く投げろーーーー！！」

二塁に居るメンバーは声を荒げて小枝に言う。

上半身裸のマツチヨ（小枝命名。高松の事です）は二塁のすぐ側に
来ており、大変気味が悪い程足が速い。

「もう、嫌だあああああああああ！！！！」

そうは言ったものの、小枝はアンダースローで投げる。

（不味い！？気付かれた！！にしてもボールが私のほ
ー）

カシャーンと、眼鏡が落ちる音がすると共に倒れる高松。小枝の
球が顔面に激突したのだ。

普通、そういう事は有り得ないが高松は不運にも、ボールの方向
に向いてしまった為に顔面衝突と言う現象が起きてしまったのだ。

『高松うううううううう（Takamaっちゃん）（君）（さん）
！！！！！』

流石にこの事態は不味いと判断したゆりは、実行委員会の所へ行く。

「おいしいiiiiiii！？小枝ああああああああ！！！！確かに投げろって言ったけど何も相手に投げる必要があるか！！？」

「だってマツチヨ嫌いだもん！！」

「そんなの知るかああああああああ！！！！」

こうして、高松は『筋肉マツチヨ露出狂変態野郎』（分かっているとは思いますが、小枝命名です）の異名を取り、二塁の手前で気絶したのだった。

そして、駆けつけた実行委員会の二人によって担架に運ばれて保健室に連れて行かれた。

「ペナルティとして、SSSチームは二塁からスタート！代わりを二塁に置け！」

鬼壁は審判として妥当な判断を下す。小枝のチームとSSSチームはお互いに納得し、元の場所に戻る。

「大山君、行けるかしら？強制はしないわ。行けないのなら、野田君で行くけど」

強制はしない、ゆりは優しく言う。

「ゆりっぺ悪い物でも食べた？」

嫌な予感がした大山は少し遠回しに言う。

ただでさえ、人数が少なめのメンバーでやりくりをしなければならぬ。

「食べていないわよ。野田君、出て頂戴」

苛ついたゆりは大山が出ないと判断し、代わりに野田を出す。

「了解だゆりっぺ！」

久々の出番で嬉しいのかそれとも、ゆりに指示されて嬉しいのか分からないが、喜んで二塁に走って行った。要するに、忠実なる犬（奴隷）。

（あ、片手打ちの人が入って来た……筋肉マッチョ露出狂変態野郎よりはマシかな…）

小枝による野田の印象は、『片手打ちで誰かの名前を言う』。よっぽど片手打ちが印象に残った様だ。

「……」

今だに一對ゼロのこの状況を歯痒く思う。

どちらかと言うと、小枝にとっては、出来る事が出来ないみたいな感覚がする。まるで、体が思う様に動かない様。

「……………」

そして何と言っても、大山による告白。
告白した本人は精神的に凄いダメージを負ったが、小枝自身も揺らいでいる。

（こんなの初めて……）

心が少し不安定なまま、アンダースローで投げる。

（もらった……！）

バット独特の金属音が鳴り響く。

ボールは低空状態で、センターセカンドとサードの間を抜ける。

「しまっ………！」

心の状態がボールに出てしまったせい、椎名の許容範囲内の速さのボールを投げてしまった。

「椎名良いぞ！」

「そのまま走れ……！」

が、

ビシュウ！と空気の壁を突き刺す様な音が聞こえる。

「おう……？」

野田の目の前にボールが通って行き、三塁に着いた。

「な…!？」

野田は驚きながらもギリギリ二塁に戻る。椎名はいつの間にか一塁に居る。

暫くしてキャッチャーが、

「タイム!!」

と大声で言い、鬼壁に許可を取った。

そして小枝の所へ駆け寄る。

「どうしたの？阿井^{あい}君？」

真っ直ぐな瞳で阿井を見る。

そこらの男だったら鼻血を出すだろう。

「どおしたはこっちの台詞だ。投げられるか？」

「え？投げられるよ」

何でも無い……

ただの質問。

「違う…俺が言ってんのは、元のスピードで投げられるかって聞いているんだ…」

阿井は控え目に優しく言う。

いつもは近所のおっちゃん位に皆と親しい。だが今回は、違う。

「……」

それは…

「暫く休んでろ…疲れただろ？」

「でも……！」

「いーから、強制交代だ。どしよかな？あいつ入れっか……」

小枝の言うことは無視し、勝手に代わりのピッチャーを決める。

「あ……」

途中で何か言いかけたが、無駄だと判った小枝はやむを得ずベンチに向かう。

その姿を見たゆりは……

「やったわ！大山君！貴方の行動は無駄では無かったわ！！」

オーホッホッホッと不気味に笑い、目が軽蔑している目だ。

「ゆりっぺさん悪役の様ですよ……」

「勝つ為なら何でもするわ。例え、悪役でもね……」

「最早、悪役ですね…流石ゆりっぺさん」

極悪な笑みに率直な感想を述べる。

そこで、音無が毒付いた一言を口から発する。

「お前…友達少ないだろ……」

「…！」

二回目なのに……何か…悲しくなる……。

「音無さん、ナイスです」

グッジョブと密かに親指を立てて、音無を誉めるのだった。

「ねえTK」

「Oh、Yamaちゃん。何かYo？」

「TKってさ、ピアスしてるけど痛くないの？」

大山はTKの耳に付いているピアスを指差さす。

「No problem」

謎の決めポーズをし、踊る。いつもの事だ。

「へへ。耳に穴を空けるなんてある意味凄いやTK」

「Oh? No No・Meはそんな事はNothing」

謎の英語を発するとヘッドスピンをし始める。踊らなければ気が済まないのだろうか。

「エ?」

「This is a ワンタッチ!」

耳に手を伸ばすと、ヘッドスピンしながらピアスを難なくと取る。どうやら穴を空けるのではなく、挟んで見せかけているみたいだ。

「そうだったんだ……」

見せつけられるピアス。

銀色で樽の様に丸い。耳に付けたら、穴を開けている様には見えない。

「Yamaちゃんもどうだい?」

「僕は遠慮するよ……」

「そろそろ交代だ二人共……」

日向が割って入り、グローブを渡す。何か元気が吸いとられた様に、日向から力が感じ取れない。

「Time Limit…change」

「僕もそろそろ出なきゃ……」

受けとると、二人は持ち場に付いた。

「お母さん……」

ベッドに横たわっていて、白い布団をお腹の辺りに掛けている少女は喋る。

「なあにユイ？」

「あたし……体治るのかな？」

ユイは事故に会って以来、その後遺症として下半身が動かなくなってしまった。

本人にとって、道端で歩いている人はとても幸せ者だと思う。歩いている人にとっては当たり前前かもしれないが、ユイはその当たり前前の事が出来ない。

「……」

「ごめん……変な事聞いちゃった……」

母親の悲しい眼差しを見てユイは後悔した。

いつも傍に居てくれて、いつも味方になってくれた母親。父が死んでも一人でユイを父の分まで、見守ってくれた母親。こんな身体になっても見捨てない母親。

「とりゃ」

プニプニとユイの頬を両手で触ってきた。

「お母さん…？」

「絶対…治るから……。だから、私は治るまで傍に居るから。治らなくなつて良い。貴女が傍に居るだけでお母さんは幸せだから…」

「お母さん…」

自分が聞いて、アホだった。

こんなにユイのことを思ってくれていて…。

「あ…！そろそろプロレス…！つてもう時間が！」

「え？…あ！ホントね…！すぐにテレビを点けるわ！」

急いで窓側にあるテレビを点けると、覆面男とチャレンジャーの男がもう決着を付ける所だった。

『さあ、両者一步も譲らない…！チャレンジャーの田所そろそろ限界か？肩で息をしている！一方の我らの覆面レスラーこと、ライオンマン！凄い余裕です！おーっと、ここでライオンマンの右ストレートが田所のみぞおちに入ったあああああああ！…！』

「お母さん…ライオンマン強いね！流石だよライオンマン！！」

目を輝かせてテレビに食い付くわが娘のユイ。

いつも寝たきりなので暇さえあれば、音楽番組、バラエティー、プロレス、等を見ている。

ただ母親としてユイには女の子らしく、プロレスではない番組に興味を持ってほしい。

「ええ。そうね…」

でも、本人が興味を持った事は強制して止めさせる、ということはない。

『もうフラフラ状態！チャレンジヤーの田所！！ですがここまで耐えられたレスラーは初めてです！ライオンマンに勝ってほしい所ですが、田所にも負けないでほしい！！』

「どっちの味方？」

「わ…判らないわ……」

『鬘^{たてがみ}を靡かせ、次々と田所の攻撃を避けるライオンマン！！凄いぞライオンマン！！おーっとライオンマン…左ストレートを外した！？何て事！！これではノーガード状態！！！！』

「あ…！！」

（着いていけない……）

『田所の攻撃！おーっと何という華麗な避け方！！そして、田所の』

後に回りこんだ！わざと外させたのか！？田所、不味い！』

「おー！ー！」

（ごめんなさいユイ……お母さんまったく着いていけないわ……）

『田所の腹を腕でしっかり回しこんだ！これは……やはりライオンマンの一撃必殺……』

ライオンマンは実況者が言う通りに、腕を回しこみ相手を持ち上げ、思いっきり床へブリッジで叩きつけようとしている。

『ジャーマン・スープレックスだあああああ！ー！』

ドガン！と床へ叩きつけられた田所は無抵抗状態になった。

『ワン・ツー・スリー・フォー・ファイブ・シックス……』

『田所、立つんだ！逆ブリッジだ！立つんだ！』

『ナイン……テンー！ー！』

ゴングの音が鳴ると同時にユイは喜んだ。

「プロレスって良いね！お母さん！」

「ええ（ごめん……面白さが解らないわ……）」

外見は笑っても、心が笑っていないければつまらないもの。

『ライオンマン、強いぞ！！これでベルトの死守五十回です！！つ流石ライオンマン！！倒せる者はあるのか！？次の挑戦者はいつでも募集中だそうです！さてもうお時間になりました。実況は馬場でお送りしました！次回も実況やりたいですね！！次の番組は『ニユースの木』です！では、また皆さまに逢える日を楽しみにしています！』

「終わっちゃった……」

「そうね…（何処が面白いのかな…今度調べよう……）」

心の中で娘の為に決心する母親。

「お母さん！」

「なあに？」

「あたし、ジャーマン・スープレックスしたい！！」

「その前に、足を動かせる様にしなきゃね……」

その言葉を聞いた瞬間、ユイは固まってしまったという。

第32話 Game start! FINAL(前書き)

遊佐

「前回までのあらすじです。事の始まりは、ゆりっぺさんが野球をしたいと言い、泣く泣くやる事になったSSSメンバー。最初は余裕勝ち。次の相手を朝顔の種で腹痛にさせ、出場停止。ゆりっぺさん悪役ですね。そして、最終決戦。果たして、SSSメンバーは勝てるのだろうか？次回をお楽しみにして下さい。」

日向

「うおい！？次回かよ！？」

遊佐

「冗談です」

日向

「良かった…」

遊佐

「今回は時間軸が飛びます。ですので、八回表、ツアアウト満塁です」

日向

「飛びすぎだろー!!」

遊佐

「それは作者に言っして下さい」

日向

「でも何で？」

遊佐

「早くGame Start編を終わらせて次に行きたいからですよ」

日向

「そんなに良いのかよ!？」

遊佐

「Game Start編が終わったら私の視点で描く、『遊佐D i a r y』が始まります（予定）。お楽しみに」

日向

「あー!もう!今回の話は結構長いです!!では、スタート!!!」

「おや、愚民に聞こえていないらしいですね。良いでしょう催眠じ

——」
「ストライク！」

大きくて、野太い声が直井の声を掻き消す。

「バッター交代……って言っても、ホームラン並に打つメンバーは残っていない……」

「このまま逃げ切れるのでしょうか？」

逃げるというより、相手をいかに点数を取らせず守備で抑え込めるかが重要。

ゆりはメンバーの気力と守備力、天運、相手の戦力から差し引いて答えを出した。

「可能性は、50：50。どっこいどっこいね……」

何にせよ、メンバーに疲れが出てきている。

四回の裏で交代するのは、疲れが来ない様にする為。この15人にも満たないメンバーでやりくりするのは難しい。

（あ……当たらない……小枝さんより遅いと思うけど……速いよ……！どうやったら打てんの！？）

小枝より遅い……だがその差は変わらない。

劣ってはいるが、それで十分。強いて言うなら、

（音無君と同じ速さ……）

音無のピッチングを見てきたが、初めてにしては良いセンスを持っていると日向から聞いた事があった。

（おしまい……罰ゲームでも覚悟しよ…後、遺書も書かなきゃ……）

もう、打てない………というか相手が悪すぎる。

蟻一匹がかまきりに勝負を挑む様なものだ。自分が弱いのではなく、相手が強すぎるのだ。

「ストライク！」

「これで………」

「ツーストライクですね、ゆりっぺさん」

積み上げたチャンスが崩れていった。

大山が体を張って（？）小枝を交代まで追いやった。

高松はただの自爆だったが役に立った。

遊佐がホームスチールで点を取ってくれた。

野田がチャンスを作ってくれた。

ひさは男にも負けない位、頑張った。

藤巻は……。

椎名と松下五段で力を合わせてホームランボールを取ってくれた。直井は催眠術で鬼壁を操ってくれた。

入江は自分を犠牲（ゆりの陰謀）にし、球のスピードを下げた。

竹山は情報収集をしてくれた。

陽動部隊は水分補給の為、色々な飲み物を集めてくれた。

結弦は必死で抑えてくれた。

何一つ無駄が無い小さな努力。それが崩れていく。

「俺、役に立ったんじゃないか!?」

「Fuzi ma ちゃん、どんまいどんまい」

慰められても嬉しくない。何かもやもやしている。

小枝を交代にさせたものの、ピッチャーは結弦並の速さだし、守備が堅く八回の表まで手を煩^{わづ}わせた。

（当たってほしいよ…振んなきゃ始まらないよね……）

さつきからバットを振っていたが、まったく当たらない。掠りもない。

（これで…最後だ!）

オーバースローで投げると、結弦並の速さでこっちに向かって来る。

（ここだ!）

タイミング良くボールがバットの目前に来た。

これで、一点でも取れる!

（あれ?）

ボールはバットに当たらず、代わりにグローブの濁いた音が聞こ

えた。

「ストライク！バッターアウト！スリーアウトチェンジ！」

「ごめん……ゆりっぺ……」

「良いのよ……相手が悪すぎたのよ」

慰めにもならないが、ゆりは大山をなだめる。

「それに、後一回で上手くいけば私達の勝ちよ。頑張りましょう」

ゆりにしては珍しく、声を上げる。

「最後のオペレーションよ！皆、勝つわよ！！」

『オーーーーー！！！』

「音無おとむ……」

「小僧って、止めてくれないか？」

「小枝 凜という小娘は知っているか」

知っているも何も、ボールを一発で当てられたヤツだ。

「ああ、知ってるけど…」

正直、こういう反応をすれば良いか分からない。滅多に話し掛けないらしい。

少しだけ沈黙し、口を開いた。

「小娘の球…捕るのがやっとだった……だから、次は無いと思え…」

「それってつまり…捕れたのはまぐれっていう事か？」

「そう言う事だ。だが、捕れる限界はそこまでだ。それ以上が来たら捕れない…」

「解った。（椎名にも限度ってものがあるんだな…）」

椎名も一人の人間だ。怪物並の跳躍力を持っていたとしても、人間とは変わらない。

椎名の方へ向くともう、松下五段の所へ行っており相談していた。椎名の姿を確認すると野田の所へ向かう。

「野田」

「何だ？」

相変わらず獲物を狩る獣に眼で威圧してくる。
音無だけは好きにはなれないらしい。

「本気を出すけど良いか？」

「貴様、今まで本気じゃなかったのか？」

「お前の手が心配だからな。手加減していたんだが…」

「ゆりっぺの為だ。本気で懸かって来なければ俺の手は壊れないぞ。覚悟しとけ…」

四回の裏では手が腫れている事を隠している野田。
それは本気で投げれる様、配慮していたがその必要性はなさそう
だ。

「分かった…」

「どうだ小枝。ベンチから俺達の活躍を見て」

「んゝ新鮮だったよ」

「そっか…」

阿井は強制交代させてショックを受けていないかどうか心配だった。

その配慮が近所のおちゃんって呼ばれるようになったのは過言ではない。

最初のバッターは…

（って…もう最終か……時間の流れって早いな………）

五回の表のトップバッターだ。

勿論、本気は出す。ちゃっちゃと終わらせる為に。

（何だ…？今の俺なら何でも打てそうだ！）

根拠の無い強がりを中心に中で呟く。その自信は後々になって崩れるとは知らずに……。

結弦は振りかぶる。だが、違う。

（アンドろー…）

×アンドろー

○アンダースロー

大きな間違い。野田はやはりアホの様だ。

（小枝の真似をした所でこの俺を打ち捕る事は出来ないぜ！…）

空気を裂く様な音が聞こえた時には、もう野田のキャッチャーミ

ットに収まっていた。

「ストライク！」

（え？）

「い…ってえなこんちくしょー！」

怒りに任せて投げると難なくキャッチする結弦。あらかじめ予め言っておいたはずなのに…。

そんな野田を無視。後で面倒になるからだ。

「は…速いよ…！藍川君…！」

「小枝より速いな…！」

小枝と藍川は真っ先に浮かんだ言葉を口に出す。
あの速さは尋常ではない事は確か。

「竹山君、さっきの球の速さは？」

「最高記録…142キロです！それから僕のことには『ク——』」

「何処からその力が出ているんでしょうか？ゆりっぺさん」

こうしている間にもスリーストライクにし、一人目のバッターをアウトにする結弦。

一方の野田は痛がっているが、顔がマスクで覆われている為どん

な表情をしているかは残念ながら判らない。

「ごめん小枝…」

「いや…さっきのは本当しようがないよ！だから顔上げて！」

この世が終わった様な顔（小枝談）をしていて、絶望に満ちている。

「俺、打開案を思い付いたぜ…」

「おー！流石だね！で何を思い付いたの？」

「バントだよ…」

『……………』

奇妙に沈黙が長かったという。

二番目のバッター曰く、相手は長距離のいわゆるホームラン並のボールを捕るのが得意。だから近距離、バント位のボールは苦手な筈……

と言う事らしい。

「んゝ何か上手く行かない様な気がするけど、頑張つてね！」

「ネガティブに考えていたら上手く行かないぜ。前向きに考えるん

だ！」

バットを取ると歩き出し、目的地に向かう。

（俺…約束守れるのか？）

身体を自由に動かせない女の子、ユイとの約束。出逢いはそのらの学生とは変わらないが、逢い方がちょっと特殊なだけ。
一目で、可愛いとも思う。

（神は…居るのか……？）

神がこの世に居たら願いたいものだ。お金とか、地位や名誉、そんな物は欲しくない。

ただ、ユイの笑顔を見れば充分だ。

（この方法なら…多分いける筈……！）

正直に言うと、確証なんてなかった。ただ、凄い選手が後ろに居るだけだから前の野郎共はへボい……という理論だ。

上手く行かないかもしれないが、バントしか方法はない。

（上手く行くのかな……）

（あいつぁ…どうだろうな……）

小枝と藍川は親が子供を見守る目つきで見る。

（まずは様子見だ…！最初の一球で出来るか判断をすれば良いさ…
…多分。出来なくてもやってやらあ！）

張り切っている様子は遠く離れた場所でも分かる。

（終わらせてやる…）

（……………）

アンダースローってこんなに凄いの？という位の速さでキャッチ
ヤーミットに吸い込まれた。

（…え！こんなに速いなんて…遠くより近くの方が迫力があるな
…）

取り敢えず、この速度の球は打てないと解った。後はバントに賭
けるのみ。

ただ、速いボールをバントで打つには投げる素振りをした時にし
なければ恐らく打てない。投げる前からやっていては、相手が例え
ボール球を投げてでもストライクになるだけだ。

（…出来るのか？俺は）

あのボールを見て不安を覚えた。だが、やらなければならぬ。
引き分けに持ち込んで、試合を長引かせ、相手を疲れさせなけれ

ば勝利はしないだろう。

（やんなきゃな…）

神経を研ぎ清ます。

相手がいつでも投げても良い様に。

（バントしても無駄だと思っただけど…）

（ここまでは予想通り…だな…）

二人して親みたいなる事を考える。

野球をする子供を見る親達はこっという事なんだな…と二人は思う。

「あ、投げた」

「タイミングも良いし、多分上手く行くだろう…」

が、普通ならバントしたら前の方へコロコロと転がって行く筈…
なのだが、何故か後ろの方へ行ってしまった。

「ファール！」

「え〜？」

「おいおい、メ。ヤーみたいだな……」

この場に居る者と、バッターボックスで啞然としている者は思っ
た。

何をしてても無駄だと――

「ストライク！バッターアウト！」

「大ちゃんがバントして分かったな……」

「そうだね……」

バントは止めて、積極的にバットを振った方が良いと。
また、大ちゃんという人は全てが終わった様な顔（小枝談）をしていたという。

「んじゃ、行って来ます」

「行ってこい、小枝」

最後の希望が点を取る為バットを握り、バッターボックスへと向かう。

「タイム！」

と日向が言い、野田の元へ向かう。

「どうした？」

「ああ？何がだ」

「しらばつくれやがって…左手を見せてみる…！」

即座に野田の左手首を握り自分の目前まで持つていくと、キャッチャーミットを取り上げる。

それを横で見ていた小枝は、

（ひ…左手が…）

思わず、目を覆ってしまった。

尋常ではない程、腫れていて、内出血している。これは誰でも目を覆いたくなる。

「って酷いなこりゃ…」

様子がおかしいと思ったメンバーは野田に駆け寄る。

「の…野田…その手…」

「かすり傷だ…心配ない…」

「かすり傷じゃねえよ！つかこれがかすり傷なら骨折はどうなんだよ！？」

「……擦り傷」

「てめえ…折ってやろうか？」

「おい日向、悪化させてどうする…」

「…そうだな」

取り敢えず、結弦に言われて落ち着く日向はこれからをどうするかを考える。

結弦の球が取れて、反射神経が良い野田を失いたくはなかった。交代させても良いが、誰が速い球を取るのか、そこが問題。

(…この中でやりくりをするんだったら、野田をキャッチャーから外して…でもな…野田は突っ立ってもらうか…)

高松は現在、保健室に居るのでまったく使えない。

だからといってゆりにやらせる訳にはいかない。遊佐、竹山、入江、関根、岩沢…も考えたが、ケガでもされたら困る。

「じゃ、あたしが代わりにやるよ」

とひさ子が拳手をする。

「女にキャッチャーは辛いだろうからな…俺がやる」

「Hay! I do!!」

「俺がやるっ…手の皮が厚いからな」

「お前ら…こういう時はやる気出すんだな…俺がやってやんよ」

次々に積極的に手を挙げるメンバー。だが、一人だけ手を挙げていない者が居る。

(皆…)

心の中で叫んだが、その思いは誰にも届かなかった。

「大山の意志で決めた事だ。尊重してやんよ」

「浅はかなり…」

「頑張れ！大山！」

「肉うどんを今度奢ってやるぞ！」

「エーーーーーーー！？」

こうして、大山はキャッチャーをやる事になった。

（あれ？……って事は…）

小枝は考えた。

キャッチャーの手が内出血する程の球…そして、好きな人……

（絶対に外せないじゃん！！）

そう。もしも好きな人がケガをしたら、大変だ。

「音無君、僕キヤツチャーの経験ゼロだよ……」

「大丈夫。ど真ん中にミットを構えてろ」

野田はアホでも役に立たない事は解っているので、サイドで突っ立ったまま。

もしも打たれたとしても素手で捕る、と意気込みをし、藤巻が近くでサポートをしている。

(ど真ん中って……ここの辺かな……？)

実際に構えてみるとキャッチャーミットは結構重いと実感した。
プレッシャーものせいかもしれないが。

(絶対打たなきや絶対打たなきや絶対打たなきや絶対打たなきや絶対打たなきや絶対打たなきや絶対打たなきや絶対打たなきや絶対打たなきや絶対打たなきや)

こっちもプレッシャーが掛かっている事を大山は知らなかった。

⌞
⋮
⌟

観客席が妙に静けさを保っていた。

「静かね…」

「そうですね、ゆりっぺさん」

会話をしている内に結弦がボールを投げる。

（速っ！？）

予想外の速さに小枝は驚くが、バットを振らない訳にはいかない。キン！と良い金属音が響くが、ボールは真後ろのフェンスに直撃する。ファールだ。

（手が……）

かなり両手に何かが響いた。握力が弱まるも、精一杯強く握る。

（一球目でこんなに…センスがあるね……）

例え敵対する相手でも誉める、それが彼女のやり方。

「おかしいですね…」

「どうしたの？竹山君」

「スピード計測したところ、153キロ出ました。それと、『クライト』とお呼び下さい」

「ちよっ…それ本当？」

「嘘についてどうするんですか」

こんな緊迫した状況では嘘なんて通用しない。

冗談だろうと思い、竹山の目を見たがその目は真剣だ。 156キ
口出たのは本当だと分かった。

「……それもそうね…」

ゆりは結弦と小枝がどうなるのかは分からない。ただ、見守る事しか出来なかった。

「最早……、もう野球小説ね…」

「それは言っではいけません、ゆりっぺさん」

（ボールが真後ろ…… タイミングはあれで良いんだよね…）

（不味いな…… 一球目でタイミングを合わせられるなんて……）

二人は睨み合う。気が抜けると気圧されそうだからだ。
前まではうるさかった観客席も二人を見守る様な形で睨む。

（は…ハイレベル過ぎる！）

この状況下、大山はこんな事になるとは知らなかった。
今更ながらあの時は拳手はしなければと後悔する。
前を見ても、左前を見ても、『氣』が溢れている様な気がした。
それと何か後ろの存在感が凄すぎる。

「（僕がキャッチャーなんかで良いのかな？）……………」

特徴が無い事が特徴な大山はそれでも構える。経験ゼロでも少しでも役に立つ様に。

（後…二球か……）

堂々と真ん中にキャッチャーミットを構えている大山にアンダー
スローで思いつき投げ。
そのボールを計測した竹山は、

「160キロです！」

「ウソ!？」

驚くしか出来なかった。

（外す訳にはいかない…!）

思いつきバットを振ると、また良い金属音が出る。

（打たれた……!）

（しまった…!?!）

打ったは打ったのだが、ボールは思う様に飛ばない。
ただ打ち上がっただけ。
タイミングがずれた、それだけ。

（あれ？飛ばない……）

「セカンドフライ……」

（『お前…成仏きえるのか？』）

（消える…？）

謎の言葉が結弦の頭を過る。
最近はそんな事が起きなかったが、久々に起きた。

「……あー、負けちゃった……」

小枝は思わず、呟いてしまった。
負けるのは初めてなのだ。

（タイミング…合ってたと思ったのに）

たったの7キロの差。この差だけでこんなに違うもの。

（これで…約束が果たせるのか……）

日向はグローブが付いた手を伸ばす。

(そいつは…最高に気持ちが良いだろうな……)

パスツと日向のグローブから音がする。
アウトだ。

「アウト！ゲームセット！！」

長い戦いが終わった…

『ワアアアアアアア！！』

と何かで塞き止められていたのが崩れたかの様、観客席から声
上がる。

「落としてくれなかったな…日向……」

悔しかったり、楽しかったり、何か色んな気持ちが混ざって
いた。

「でも楽しかったよね。小枝さん」

自分より少し大きい大山が立ち上がり、声を掛ける。
声を掛けられるのは久々。少しだけ、恥ずかしそうに答える。

「そうだね…大山君」

振り向いた時、大山に見せた笑顔はそれはそれは、最高の笑顔で
答えたという。

球技大会編
E N D

第33話 遊佐Diary(前書き)

お待ちせ致しました、遊佐の視点から見てみるSSSの一日(?)
でございます。

前に言ったのですが一つ追加です。今日は休日ですが、ゆりっぺさんが大事な話があると言う訳で行かなければなりません。

サボったらずボったで、罰ゲームがあります。

私はそこまでMではありませんので、行きますよ。

基本的に学校がお休みの日は私服でも大丈夫なんですよ（部活によりますが）。

因みに、私達は制服です。

理由は良く解りませんが、懐かしい気がするんですよ（皆さんも）。

いつもの様に旧校長室のドアを開けるとそこには、藤巻さんとおりんさんと大山さんが居ます。

珍しいですね、私がいつも来るのが一番なんです。

「ねえ……どうしたら良いかな……この状況………」

「ずっとそのままにしたら良いんじゃない？」

「そ……そんな………」

大山さんどうしたんでしょうか……来てみて早々に……

「お二人さんアツツイね」

「…そんな関根さん助けてよ……」

少し近付いて様子でも……このソファは凄いですよ。フカフカしてて……何故小枝さんが……？

ソファが死角になって見えません……不覚です。

小枝さん、入部はしたんですけどね…一応……理由は解りませんが。

「お、遊佐じゃん」

「おはよーゆさゆさ」

「おはようございます。しおりんさん、藤巻さん。大山さん、お熱いですね」

「そ、そんな…」

小枝さんが大山さんの右に座って大山さんの右腕を抱いて寝ている状況で、どうやったら熱くないと言えるんでしょうね。

「すー…スう…」

寝息を立てて凄く幸せな顔をしていますね…

「僕の話聞いてよ」

と、大山さんが小さい声で事情を話す。小枝さんを気に掛けてい

る様ですね。

僕はゆりつぺに何をされるか分からないから、朝の5時30分に起きたんだ。

関根

「ちょ…それ早いつて」

んで、眠気覚ましにラジオ体操を…

藤巻

「……………」

遊佐

「…ラジオ体操……………」

それで、朝にパンを食べて出掛けたんだ。

関根

「なんか……………」

藤巻

「普通過ぎるな……………」

遊佐

「……」

で、学校に着いて一気に眠気が襲って来たんだ。

藤巻

「…当たり前だな」

それでここに着いて誰も居ないから…

遊佐

「ソファで寝た……と言っ訳ですね」

うん、そうなんだ。

で、起きてみたら

関根

「りんりんが居たわけだね」

「分かってくれた？」

大山さんの朝って…何か普通ですね……

「それにしても珍しいですね、お二人さんがこんな朝早いなんて」

「俺か？…俺は朝珍しく早く起きたんだよ」

「あたしは岩沢さん達の朝練で早く起きた」

「そうなんですか…」

藤巻さんは滅多に無い事ですからね。

しおりんさんはバンドの練習ですからね…でも何でここに居るのでしょうかね。

ガチャ！

「おい関根！ここに居たか！！」

「げえ！？何でここが！！？」

抜け出したんですか…

ひさ子さん…凄い疲れている様ですね……

「おいおい、ひさ子朝っぱらから騒がしいぜ？それにもう朝練はこら辺にして休んだらどうだ？」

「……うにゅ……？……すウ……」

小枝さん……

「……そうだな……遅れたらゆりに何されるか分からないからなあ……」

ゆりっぺさんの罰ゲームは死よりも恐ろしく、人格が変わると言われていきますからね（噂）……

「そうだよひさ子さん！終わりにしよう！！」

凄い必死に頼み込んで……

小枝さんはこんなに騒がしくても寝ていられるんですね。

「まあ……、そうだな。岩沢に言ってくるよ」

長く考えた結果、もう終わりにする様ですね。

ひささんは物分かりが良いみたいです。

「んじゃ」

ガチャ、とドアを開けると急いでいつもの場所へと走り出すひさ子さん。良い走りです。

「ふじまっちゃん、ナイスフォロー！ありがとね！！」

「練習ってそんなにきついのか？」

音楽キチな岩沢さんですからね……キツイと思います。

それにしても小枝さん起きないですね。顔は変わらず、凄い幸せ

そうです。

「まあね」それにしても、凄いきりりん幸せそうだね」

「大山お前何かしたか？」

「しっ…してないよ！」

小枝さんは隣で大声を上げられても起きないんですね。未だに大山さんの腕に抱き付いています。

まあ、原因は判っていますが。

「それより今何時？」

話が急に変わりましたねしおりんさん。

「7時53分です」

「どうりで人が来ない訳だ」

確かにそうですね。

「浅はかなり…」

「…今声がした様な……」

それは気のせいでは無いと思いますよ、しおりんさん。
この声は、

「椎名つち？」

その人しか居ませんよね。

椎名さんは基本的に『浅はかなり』しか言いませんし。

「へ？椎名さん……？」

辺りを見回しても居ない様ですね……という事は……

「天井うえですね」

「良くぞ見破った……」

声が再びすると、華麗なる動きで着地すると立ち上がる椎名さん。
いつから居たのでしょうかね。

「椎名つち……いつからそこに……」

「3時間前からだ」

……

「……何でそんなに早く起きれるの？」

しおりんさん、根本的に質問の内容が違います。

「浅はかなり……」

そんなこんなで、皆さんが集まりました。

「皆、集まったわね日向君を除くけど……って小枝さん寝てるじゃない……」

日向さんどうしたのでしょうか……休まず来ていたのに……あの日までは……

「小枝さんを誰か起こして頂戴。じやないと話が出来ないわ」

「さつきから起こしているんですが、起きないです」

高松さんは予備の眼鏡（8個）を磨いて現状報告……

椎名さんは部屋の隅に居ます。

竹山さんはパソコンの調整、藤巻さんは何故か竹刀を手入れしていたり、野田さんは黒い棒をいつもの様に磨いていたり、岩沢さんは……話を真面目に聞いていますね……

みゆきちゃんとしおりんさんは固まっていますね……いつもの事です。

ひさ子さんも岩沢さん同様、話を真面目に聞いています。

大山さんは小枝さんに右腕を抱き付かれています。

音無さんは相変わらずですね。いつでも真面目に話を聞いています。偉いです。

「……う……すう……すウ……」

「小枝さん、そろそろ起きないと……」

やっと大山さん口を開いた様ですね。

「……うにゆ……あ……おはよー……大山君……」

「お……起きた……!」

「どんなに大声を上げても起きなかったのに……」

「愛の力かな?」

それはどうでしょうしおりんさん。

「で、ゆりは何でわざわざ休日と呼んだんだ?」

「音無君、良い質問ね……」

良い質問かどうかは解りませんが話の内容次第ですね。

「皆も分かっていると思うけど、何故日向君は休んでいるのか分かるかしら」

ゆりっぺさんは校長の机に足をでかでかと乗つけると問いかけます。

パンツが見える……と思った読者様、残念ですが見えません。

ゆりっぺさんはあー見えてもガードが固いですから、それなりの対策で見えません。

「あー、それ気になってた。何でだろうね？」

大山さんの言う通り、ここに居る皆さんもそう思っているでしょう。

「それが解らないから、皆に集まってもらったの」

（俺は知ってるんだけどな……でも、日向に口止めされてんだよね……）

「へー、日向ここに来ていないんだね」

初めて入ってきた小枝さんは解らなくて当然ですね……
何ででしょうね……休むなんて……

「それを私達に推理せよ……との事でしょうか？」

高松さんは眼鏡を拭きながら聞いています。

「え？そんな…」

「大山君がやるんだったら私もやるよ!!」

起きてても大山さんの右腕に抱きつくんですね…小枝さん。そんなに大山さんが好きなんですな。

「ゆりっぺさん、このままでは皆さん参加しますよ」

「皆そんなにやりたいんだったら……」

暫く考えて、答えを出すゆりっぺさん。

「全員でやっちゃおう!!」

結局そんなっちゃうんですね……

「私も一回こついう事やってみたかったのよ!!」

それが理由ですか……

「つつか尾行もしてねえよ！」

正確にはこれは尾行ではなく、張り込みですね。

「ふっふっふ…気付いた？」

「……………」

呆れて何も言えない様ですね……

「ゆりっぺさん本当に日向さんはこの場所^{エリア}に来るのでしょうか」

「パソコンのプロフェッショナルな竹山君に日向君の体力面、高校に行くまでの範囲から割り出した結果がこれ。当てはないけど……」

まあ、それぞれチームに別れ各自、日向さんを発見次第後を付けるという計画ですからね……

高松

『こちら高松チーム、日向さんは現れません——』

小枝

『何で上半身裸なの！？この筋肉マッチョ露出狂変態野郎！！』

？

高松

『なっ……………何て事を……………』

入江

『りんりん！そこは突っ込んじゃいけないよ！！』

小枝

『うるさああああああああい！！この筋肉マッチョ露出狂変態野郎がいけないんだ！！破滅して筋肉！！絶望しろ筋肉！！さらすのやめろ！！』

高松

『な……この筋肉のどこが……』

小枝

『全てが嫌だ！！破裂しろきんに———』

プチんと通信を切るところを向くゆりっぺさん。
解ります、その気持ち……

「小枝さん…筋肉嫌いだったんだ…」

「今度チームを組む時は気を付けましょう……」

筋肉を否定するという事は高松さんが否定されるという事になります。

「そうですね」

「……………」

くじ引きは時に残酷なもの……

公平な手段と言われても……

そういえば、直井さんも『音無さんと同じチームが良いです！』
って叫んでましたね…

ゆりっぺさんに催眠術を掛けて同じチームになる様にしたら、鏡
で返り討ちにされ今ではゆりっぺさんの従順な僕しもべになっております。
ちなみに、前回の鬼壁さんは試合が終わって数分経った頃に、解
けました。

それ位、直井さんの催眠術が凄いということです。

藤巻

『ピ……ガチャ……こちら藤巻チーム………』

野田

『おい！！ゆりっぺチームに変えろ！！』

岩沢

『うるさいぞ野田。冷静になれよ』

直井

『はっ！？何故私が……！音無さんは……音無さんは何処だあああ
ああああああああああああああ！！！！』

颯爽に通信を切るゆりっぺさん……デジャブですね……

催眠術が解けたみたいですね直井さん。

『こちら椎名………』

「椎名さんどうしたの？」

椎名さんは単独行動です。

あの尾行力は誰も着いていきませんからね（張り込みですが）……

『お前達の公園から約100m、病院前にて車椅子を押した日向を
発見した…』

「病院つて……」

「ビンゴ！…そのまま見張ってて私達も向かうわ！」

『…心得た』

それにしても…車椅子？

一体日向さんは何をしたのでしょう…

「椎名さん車椅子って言ってたけど何で？」

「それをこれから調べるのよ！」

眼がキラキラしてますよゆりっぺさん…

100mはそう遠く離れていません。歩けば何とかかります。

*****／＼

*****／＼

／*****＼**／＼ To Be Continued
*****／

第34話 遊佐Diary もっと熱くなれよ!!--!編

「……………」

『俺が結婚してやんよ!』

『どんなハンデでもつったろ!!--!』

『良かったのか?』

> i 3 2 2 1 0 — 3 6 4 0 <

『良かったさ…』

『こんなお荷物……誰が結婚してくれるかな…?』

『じゃあな親友!』

「先輩……？」

「うん……？ああ、ごめんな考え事してた」

「そうですか」

車椅子を押しながら病院前を散歩中の俺、そしてユイ。

ユイに指摘されて、再び前を向く。

あの試合の後は大変だったな。クラスの皆からブーイングされたりしたけど、校長先生のフォローのお蔭で治まったけどな。

入学当初から色々お世話になったよな……

SSSが立ち上がるキツカケを作ってくれたのも校長先生だった。有り難うございます。感謝してるぜ！

「どうだユイ、リハビリ」

「辛いですよ……でもこうしてひなっち先輩が来てくれてそんな辛い事忘れちゃいます！」

とびっきりの笑顔で返してくれるユイ。

こんな笑顔……見た事あるな……

あの時だってそうだ……小枝のセカンドフライを捕った時、頭の中から見た事が無い映像が次々に出てきて……

「先輩？どうしたんですか難しい顔をして」

「え？そうか……いつもの俺だけ……」

「ん……何か変ですけど……まいつか！」

こいつ…エスパーか？

確か…俺の頭ん中の映像でコイツに……告白したんだっけ？

……まさか……な……

でも…もし……そうだったら…俺が小さい時から見た『約束』に繋がる…

『結婚』と言う名の『約束』に……

「やっぱり今日の先輩変ですよ？どうしたんですか？」

「そうか？ハハハ」

適当にユイの問い合わせに答えると車椅子を押しながら歩き続ける。結構疲れるな……球技大会の後だからか？大体四日経ったのに……体力衰えたか？

「先輩…もしかして疲れていますか？」

「そうかも……」

やっぱりエスパーなのかユイ……

あー…ホントに疲れているのかも…

おっ、丁度良い所に椅子があるな…そこに座るか……

「ちよい休憩なユイ」

「分かりました！」

また笑顔で返してくれるユイ。可愛いな…

でもこんな感じだったけ…？

もっところ…破天荒で、後先考えない様なヤツで……うるさくて、

ユイって毒舌なのか？それとも天然か？
原因は俺にあるが言い過ぎじゃないか？

「ん…：周りから見てもそうだと思いますよ？」

「俺ってそんなに老けて見えるのか！？」

前言撤回！

毒舌ですよ！！コイツ！！

「冗談ですよ〜先輩　かつこいいですよ」

前言撤回！！！！

この可愛い笑顔に免じて許す！！！！

「お…：おう…：それにしても良い天気だなあ…：」

取り敢えず話を逸らさなきゃ何か不味い様な気がする…：！
どうだ！？

「そうですね〜夏が近付いているんでしょうか？」

よっしゃ！！！！

「まあ、ここんどこ気温が上がってるしな…：」

ユイのお母さんに、

『ユイは体温調節が苦手だから外に行く時は気を付けてね〜
』

って言われたしな…気を付けなきゃな…
先生にも言われたし…

『日向君みたいに動いて木陰や、陽が照っている場所に行ける人が居るんじやが、ユイちゃんは行けないから時々ユイちゃんに暑いかな寒くないか聞くんじやぞ』

ユイを木陰に入れているから大丈夫だと思うが…聞いてみるか。

「ユイどうだ？暑くないか？」

「丁度良いですよ。どうかしたんですか？」

良かった…顔色も悪くないみたいだし…

「いや、何でも無い。ただ聞いただけ」

前を向いてみると…椎名？

……気のせいかな…

（不覚…だ…この私が…）

「あれ？先生だ…何やってんだ？」

丁度ベンチは病院から見るとすぐ近くだ。

その入口で誰かの家族連れのお父さんに手を振って見送っていた。

「先生は患者さんが病院を退院する時に必ず見送っているんですよ

」

「へ」

ユイってここに何年間居るんだろうな…

先生あの年で良く頑張れるよな……大体70代前半か？パツと見て語尾に『じゃ』を付けているし、初音ちゃんの手術の跡を残していないって言うし（音無情報）…相当貫禄があるよな……平成のブラッ。ジャックか？

「ユイって学校に行ってるのか？」

「ん…テスト位ですよ。保健室でやってます」

テストと言えば…音無が学年で1位だっけ……ダントツだったぜ。その前は竹山でさ、スッゲー悔しがってたな。

で、10位以内に入っているのがゆりっぺ、岩沢、ひさ子、遊佐、竹山、入江…ってかほとんど女子じゃねえか……！頑張れよ男子……！！

ちなみに俺はこう見えても33位だぜ……！！

……そんなに凄くねえか……

「へ…ん？ユイって学校行ってないの？」

「あれ？分からなかったんですか？」

分からないも何も…てつきり病院から学校に行ってるのかと思ってた……

「うん…分からなかった」

ユイは無邪気な笑顔で返してくれたけど……ゆりっぺだったら……想像しただけでも恐ろしいぜ……

「あ！先生の奥さんだ！！」

へー……………

……あれ？おかしいな………凄じ若い女の人が……………

「あ、ユイちゃん元気？」

ユイが大声出したせいで、こっちに向かって来た。おかしいって！
！先生の奥さんって年が離れすぎだろ！！！！

「あの……年はおいくつでしょうか……？」

絶対におかしいってば！！若すぎるでしょ！！若すぎるでしょ！！！！

「ちょっと先輩、女性に年を聞くのはダメですよ！」

いやいやいやいや！そりゃそうだけど……………

「38だよ」

「えー……！！？えー……！！？えー……！！？」

おかしいよ！？おかしいって！！

40位年が離れてる！！

「…先輩？せんぱーい？」

あやっべ思わず取り乱しちまった……

「驚くのも無理はないよね」

「そうですか？」

ユイのお母さんは若いよ！若いお母さんが居るから感覚（？）が鈍
っているんだＹＯ！！

うちのお袋なんかもうぎっくり腰をする様なお婆ちゃんだぞ！！

「ほあたあアあアあああああ！！？」

頭を抱えて地面に踞らなきや気がおかし狂くなります！！

「せんぱい？せんぱーい！」

「この子どうしたの？」

どうする？ア。フルゝ状態になってる俺。

あー…落ち着こう……

「すみません…取り乱してしまいました……」

「取り乱し過ぎですよ先輩」

「面白いね君。名前は？」

この局面で言うか？普通………まいつか。

「俺の名前は——」

「『ひなつち』って言います！」

え——？何で言うん？ユイ。

「へー面白い名前だね。覚えとくねー。んじゃサラバ！」

「あー待つ——」

足速っ！！もう病院の入口まで行っちゃったよ！！
てかユイ何でなん！？何で言ったん！？

「あーあ…もうちょっと話したかったのに」

「うおい！何で言ったんだよ！変な印象を与えちゃったじゃん！！」

「えー？『ひなつち』って良い名前じゃないですか」

「良い名前だけどさ！………もういいや………」

「先輩、元気出して出して」

俺はユイの柔らかいほっぺに両手を優しく添える。

「せんぱい？」

そして——

「ふふあ？ふいふあっひへふはい？はひふおやつふえふんふえすは？（ふえ？ひなっち先輩？何やってるんですか？）」

優しく、痛くない様にほっぺをつねって伸ばしたりする。

ほんと柔らかいなあ……気持ち良い……

「ふえんはい？ふえんふあーい？（先輩？せんぱーい？）」

ユイが何を言おうが俺はやり続けてやる！！

ユイがいけないんだ！こんな柔しいほっぺを持っているのがいけないんだ！！

はい、どうもいきなり日向さん目線から入ってきて少々不機嫌な遊佐です。

現在位置は日向さんが分からない様な所に居ます。

「あの車椅子の子……何処かで会ったような気がするわ」

奇遇ですねゆりっぺさん、私もです。

「え？ゆりっぺも？僕もそんな感じがする」

おや、大山さんですか。

「……………」

音無さんは落ち着いていますね。流石です。

他のチームはこちらに向かって来るんですが、どうも距離的に行くのが難しくてなかなか来れない様なんです。

「日向君女の子のほっぺをつねって伸ばしたりしてるけど何がしたいのかな？」

「さあ？」

あの子……確か……………」

「……『ユイ』……と言う名前ではないでしょうか？」

おかしいですね……口が勝手に……

「それよ！」

合ってるんですか……

「ねえねえ、二人が何か話しているんだけど聞こえないよゆりっぺ」

「そいつ時は（ゆりっぺダミ声）」

ドラ。もんみたいにポケットから……ではなくバッグからゴソゴソ

と……って何処からバッグを取り出したのですか？

「『最大１００メートル先の物音が聴こえる装置』」（ゆりっぺダ
ミ声）」

バッグから取り出した物は……チャーさんが開発した物ですね……
小型化したアンテナにヘッドフォンが付いていて聞くには最適。更
には、アンテナに付いているダイヤルで調整（何の調整でしょうか
？）が可能……らしいです。

「……このダイヤルを回して……っと！」

さっそくゆりっぺさんはアンテナに付いているダイヤルを１０にし

『爆発まで後、１０秒です』

「？」

「エ？」

「ゆりっぺさん……」

「おい……後１０秒って………」

『……５……４……３……』

「使う以前に使えないよゆりっぺ!!」

.....

「……取り敢えず、皆さん落ち着きましょう。でないと日向さんに
気付かれる可能性があります」

この場を落ち着かせると、ゆりっぺさんは何回か深呼吸をしてから
無線機を使って全チームに何かを伝え日向さんを観察。アンテナは
使わないのでしょうか？

第34話 遊佐Diary もっと熱くなれよ!!!編(後書き)

遊佐

「タイトルが変ですね」

第35話 遊佐Diary ダメダメ諦めちゃ!!どうしてそこで諦めるんだ作

「ちよっ…小枝さんくつつきすぎだと思っよ?」

「大山君、私じゃイヤなの?」

「嫌じゃないけど…」

「じゃ、いいよね♪」

本編に入った瞬間からイチヤイチヤする小枝さん。他のチームのメンバーはまだ来れないそうです。で何故、小枝さんはここまで来れたのでしょうか?運動神経が良いからでしょうかね?

(小枝さん……何か良い匂いが………何だろ?)

(あー何か大山君に抱き付いたりすると落ち着くな)

「大山君の周りがピンク色のオーラが見えるのは気のせいかしら?」

「心配するな…俺にも見えるよ………」

ついに大山さんに春が訪れましたか……今は夏ですが。

『こちら高松チームです。所定の位置に就きましたが、小枝さんが居ません』

「心配ないわ高松君。小枝さんならここに居るから…」

ゆりっぺさんは目を大山さんと小枝さんに移すと呆れた様な顔になり、次の指示を出します。

「私が命令を出さない限りそこから動かないこと、解った？」

『了解です……………ガチャ』

無線を切るとアンテナを日向さんに向けると盗み聞きをします。一体何を言ってるのでしょうか。日向さん。あのアンテナの謎の機能は使えない様ですが、他は使えるみたいですね。

「なあ、ゆりそれってヘッドホンを着けていないと聞こえないのか？」

「そうみたい。まったくチャーの馬鹿！」

チャーさんの馬鹿と言っている時も大山さんに後ろから抱き付く小枝さん。大胆ですね。

「チャー？」

「音無君は分からないの？お得意の超能力を使ってみたら？」

超能力って…何カ月前のネタを引っ張ってきてるんでしょう。

「…分からない……………」

「直に会えると思うから、楽しみにしてて」

チャーさんって海の家を営業してるらしいですよ（ゆりっぺさん談）

。その人はなんでも、下らない何かを作ってはSSSに提供をしています。その一つがあのアテナです。まったく使えません（?）。その中で唯一傑作だったのが『小型推進エンジン』です。ボタン一つで垂直に飛ぶという優れたもの。それを日向さんに着けては飛ばして飛ばして飛ばしまくっていました。

ついには、スケートボードに付けて名探偵。ナンみたいに走り抜けでは日向さんに直撃させてケガをさせました。ケガだけで済ませた日向さんって凄いですよね。

「直に会えるっていつ頃なんだ？」

「まあ楽しみにしててよ」

ヘッドホンに手を添え、日向さんの言葉を一つも漏らさない様に聞き入っているゆりっぺさん。何か暇ですね……私の仕事は岩沢さん達——いや、音楽一行のマネージャーです。その他はゆりっぺさんの補佐役だったり忙しいのですが今回は違うみたいです。暇ですね……

「……………そうだ…京都へ行くこつ……………」

「どうした遊佐!？」

何気無い一言で心配してくれるなんて……優しいですね音無さんは。

「すみません、あまりにも暇なものでつい……………」

「それなら良いけど…大丈夫か？」

まだ心配してくれるんですね。音無さんは本当に優しいですね。

「ええ、大丈夫です」

最終確認をする音無さんは、『ユイ』さんといちゃついている日向さんを見ます。

…あの時言ったことが本当とは……思いもしませんでしたよ……日向さんは音無さん一筋だと思っていたんですが…

というのは冗談です。気持ち悪いですよ男性と男性だなんて有り得ない事です。

ちなみに、『同性愛』というものはキリスト教が禁止してしましてそれが日本に伝わりそして禁止。まあ、フランスコ・ザビエルのせいですね。

——という訳です。何処かの国では同性との結婚は認められているそうです。以上、余談でした。

「何か暇ね」

ついにゆりっぺさんも飽きましたか。

「大山君、何か芸でもやって」

出ましたゆりっぺさんの無茶振り。

「僕、持ちネタ無いよ？」

「つまんないの…」

そんな事はお構い無しに大山さんに抱き付く小枝さんは幸せそうですね……

（大山君って良い匂いがする………）

さらに顔が緩みましたね。

暇過ぎるのでこのまま小枝さんでも観察しましょうか……

- 1 ・顔を大山さんの背中にうずくませる
- 2 ・時々、大山さんの頬に頬擦りをする
- 3 ・幸せそうな顔をする
- 4 ・大山さんって……まんざらではない様ですね
- 5 ・いちやっついていきます
- 6 ・上記の繰り返し

こんな感じですかね。

レポート風になってしまいましたが、ここらで限界です。

「音無君って日向君があの小娘に盗られて悔しくないの？」

「俺達そんな関係じゃねえよ!!」

ゆりっぺさんに突っ込む音無さん。そんな大声出したら気付かれてしまいますよ。

小枝さんの観察も飽きたことですし、岩沢さんの音楽でも聞きますか…。

このインカムって便利なんです。

何とイヤホンを付けると音楽が聞けるのです。

容量は189テラー（この小ささで凄いです。流石チャーさん、感謝しています）。曲を聞きたい時にはタッチパネルで検索。

その他の機能と言ったら……まあ、無線機としても使える……位です

ね。

(Crow Song……っと)

タッチパネルって便利ですね。

指が押せる範囲が狭いのが短所ですがね。今度チャーさんに会ったら改善策でも考えてもらいましょう……またの機会があったらゆりっぺさんにチャーさんに電話させてもらいましょう。

ちなみにこのインカム、岩沢さん達の曲しか入っていません。

「……………」

良い曲ですね…

岩沢さんは良いセンスしてます。岩沢さんの音楽はこの私でもはまっちゃいます。

「前から気になってたんだけどさ、遊佐何を聞いているんだ？」

気になるのも仕方無いですね。暇さえあればほとんど聞いていますからね。

「岩沢さんの新曲です。聞いてみますか？」

『Crow Song』は先週完成させたばかりのできたてほやほやです。

「えーっと…良いのか？」

「勿論です」

『ゆりっぺ大変だ！！野田が暴走をし始めやがった！』

藤巻さん報告が遅いです。手遅れです。無線機がありますから早く報告が出来る筈なのですが。

「もうおおおおおおおおお！？どうしていつもこんな
のよ！！？」

今なら同情しますゆりっぺさん。

「大山君いつもこんな感じなの？」

「えー…つとね……大体そうだね…」

こんな事態でも後ろから抱き付く小枝さんって一体…
それと音無さん、音楽に夢中になり過ぎです。少し位は焦って下さ
い。

「誰かあのアホを止めてええええええええええ！！」

発狂しないで下さい。

「任せろ…」

何処からともなく現れる椎名さんは言葉を置いていき、野田さんの
方へと走ります。

「椎名じゃん」

「知り合いですか？」

不味いですね。気付きましたか…。

「うぐ…！？」

短い悲鳴が聞こえたと思うと野田さんが死人の様にぐったりとしていて椎名さんの肩に担がれています。どうやって止めたのでしょうかね。

「カッコいいですねあの人！」

ユイさんが言う頃には消えてしまいました。流石、椎名さん。

「あいつぁ運動神経が良いからな…何でゆりっぺとか言ってたんだ
——あれ？」

「先輩あそこに五人組の男女が居ますけど…」

指をこちらに指すという事は…ばれちゃいましたね……

「ばれちゃったね大山君……」

そろそろ抱き付くのは止めませんか小枝さん。それと音無さん……
もう夢中になり過ぎです。

「もう、日向何で私達に相談しなかったの？」

「そうよ信用しなさい」

「いやいやゆりっぺさん、それは無理だと思います。」

「私の筋肉にかかればこんなこ——」

「ドスウ！！」

鈍い音がすると共に足から崩れていく高松さん。原因は解ってますがね。

「高松君……」

「見ない方がよいよ大山君。筋肉見たら毒されて死ぬよ？」

「筋肉見ただけで死ぬものなの？」

もう嫌われてしまいましたね高松さん。ドンマイです。大山さん、筋肉見ても死にませんからご安心して下さい。

「個性的な人達ですねひなっち先輩」

こう言う事を言う人は少なくないです。基本はアホの集まりですからね。

「へー日向君『ひなっち』って呼ばれてんだ」

「I kiss you!!」

「お前には『秀っち』の方がお似合いだぜ？」

茶化すゆりっぺさんと藤巻さん。

「や、止める……そのあだ名にはトラウマが……」

以上で私のお話はこれでおしまいです。これ以上深入りすると私のプライベートがばれてしまう恐れがあります。

では、またの機会があったらお会いしましょう。

どうせなら次回でも予告しておきましょう。

次回、ゆりっぺさんは夏休みに入った途端にある事を提案するので
す。

そのある事とは？とお思いの方、残念ながらこれ以上言うとネタバレ
になってしまいます。

では、さようなら。また次回をお楽しみに待って下さい。

小枝さんの素顔

ゆりっぺ

「緊急よ小枝さん!!」

小枝

「え?なにどうしたの?」

ゆりっぺ

「貴女の似顔絵が出来たのよ!!」

小枝

「ええええええええ!!?本当!?!」

提案して下さった、C a n a nさん…有り難うございます。現在、
みてみんなにて公開をしています。

ゆりっぺ

「読者の皆様、そしてC a n a nさんお待ち致しました。これが
小枝さん、そしてこれが……作者の全力よ!!!!」

小枝

「(ドキドキ……)」

ゆりっぺ

「これだあああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああ!!!!!!」

> i 3 4 3 0 5
— 3 4 6 0
<

小枝

「お—————！！これが……私………」

ゆりっぺ

「作者、全力を出しすぎて執筆を休む事になりました。誠に申し訳
ありませんが、今後とも応援を宜しくお願い致します」

これは本編ではありません。申し訳ありません。

ゆりっぺ

「小枝さん、小枝さん」

小枝

「何か用？」

ゆりっぺ

「作者がね懲りずに貴女の似顔絵を手直したのよ」

小枝

「懲りずにつて……え？手直し？」

ゆりっぺ

「そうよ。手直したのよ。貴女の似顔絵って線が薄かったから髪の毛がスッカスカっぽく見えた、と言う訳で、ちよつと手直ししたって訳」

小枝

「へへ。あれでも私は満足なんだけど……」

ゆりっぺ

「あの程度で満足する作者ではないわ。いざ描こう、と思つたらかなり手が震えたらしいわよ」

小枝

「禁断症状！？」

ゆりっぺ

「かなり気合が入ってたわよ。作者って似顔絵を描いた事がないから参考の為に色々な漫画から顔の角度、髪の毛の陰影とか調べたのよ」

小枝

「そこまで……………」

ゆりっぺ

「だから、作者の総てが貴女に詰まっていると言っても過言ではないわ」

小枝

「…………ゆりっぺって時々カッコいいこと言っただね」

ゆりっぺ

「嫉じ伏せるわよ」

小枝

「ごめんなさい…………」

ゆりっぺ

「だからだ話している場合じゃない。発表するわよ。じゃあまず、前の小枝さん」

Before

>i34305—3640<

ゆりっぺ

「そして…これが…」

小枝

「どんな感じだろ？」

A f t e r

> i 3 2 6 3 4
— 3 6 4 0
<

A f t e r
> i 3 4 3 9 1
— 3 6 4 0
<

b e f o r e
> i 3 4 3 0 5
— 3 6 4 0
<

ゆりっぺ

「そして……これが、新しい小枝さん！」

小枝

「（ドキドキ…）」

小枝

「わーーーーー！！スッゴイ上手いよ！！」

ゆりっぺ

「かなり可愛くなったわね………ちなみに、作者はまた全力を出し過ぎて執筆を休む事になったわ」

小枝

「え？また？」

ゆりっぺ

「慣れない事をしたからじゃない？」

大変、申し訳ありません。

この度また全力を出し過ぎました。こんな私ですが、応援を宜しく
お願い致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4729t/>

Angel Beats! ～君と～

2011年11月7日15時02分発行